

令和 2 年度

「いわての復興教育」

実践事例集



令和 3 年 3 月
岩手県教育委員会

目次

I いわての復興教育推進事業

1 いわての復興教育スクール〈沿岸〉

01	大船渡市立末崎中学校	1
02	宮古市立宮古小学校	5
03	野田村立野田中学校	7
04	高田高等学校	11
05	大船渡高等学校定時制	13
06	釜石高等学校定時制	15
07	山田高等学校	17
08	宮古北高等学校	21
09	宮古商工高等学校	23
10	岩泉高等学校	26
11	久慈東高等学校	28

2 交流学習スクール

12	大槌町立吉里吉里小学校	30
13	宮古市立田老第一中学校	31
14	山田高等学校	33
15	宮古商工高等学校	37
16	宮古水産高等学校	41
17	久慈東高等学校	45

3 震災学習列車活用スクール

18	大船渡市立盛小学校	47
19	大船渡市立大船渡小学校	49
20	山田町立山田小学校	51
21	岩泉町立小本小学校	54
22	宮古市立第二中学校	57
23	山田高等学校	59
24	久慈高等学校長内校	61

II 学校安全総合支援事業（文部科学省事業）

いわての復興教育スクール〈内陸〉

25	八幡平市立柏台小学校	63
26	八幡平市立松尾中学校	67
27	矢巾町立煙山小学校	71
28	矢巾町立矢巾東小学校	75
29	矢巾町立矢巾北中学校	79
30	花巻市立宮野目小学校	82
31	花巻市立宮野目中学校	86
32	金ヶ崎町立金ヶ崎小学校	90
33	金ヶ崎町立金ヶ崎中学校	92
34	二戸市立浄法寺小学校	94
35	二戸市立浄法寺中学校	98
36	軽米高等学校	102
37	岩谷堂高等学校	105
38	前沢明峰支援学校	108

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校の学区には陸中海岸国立公園の一つである碓石海岸があり、多くの観光客が訪れている。産業としてはわかめなどの養殖業を営む漁家及び冷蔵事業や民宿など水産や観光に係わる業態が特徴である。

本校では地域の漁家の協力を得て、わかめの養殖から販売までを行う学習を平成14年から実施し、修学旅行時に東京で販売を行っていた。

東日本大震災では、使用していた養殖施設や刈り終えたわかめをすべて流され、販売することはできなかった。しかし全国からたくさんの支援をいただき、震災の翌年にはわかめ学習を再開させ、販売先は盛岡に変更した。

本校では「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する」を目標に以下の3つの重点目標をたて、復興教育を実施している。

- ① わかめ学習を通して、自然の恵みや地場産業、漁業関係者との関わりをもつことによって、地域住民としての自覚を深め、勤労観・職業観を育てる。【主に「かかわる」】
- ② 道徳の授業を中心に復旧・復興に向けて努力してきた先人に学び、目標を持って生ようとする態度を育てる。【主に「いきる」】
- ③ 防災学習を通して、災害に備え、身を守るための方法や情報の収集、日頃の備えなど防災について関心を深める。【主に「そなえる」】

本校の復興教育は体験活動を中心に、地域の人材を活用して実施している。

II 取組の概要

(1) わかめ学習

ア 森林体験（3年）

＜9月8日事前学習、9月11日実施＞

事前学習では三陸中部森林事務所の方から森林と海との関係、森林を手入れすることの大切さ、当日の作業の説明をしていただいた。特に、草刈り鎌の使い方については森林事務所の方が見本を示し、教えていただいた。

当日は下刈り・伐採の作業を2班に分けて実施した。当日は雨上がりの天候だったので、午前中だけの作業になった。そのため、植樹の作業はできなかったが、作業範囲の広さや大変さ、作業の大切さなどを学ぶことができた。



＜事前学習＞



＜森林体験学習＞

イ わかめ芯抜き（2年）＜6月26日実施＞

前日に本校の産土タイムスーパーバイザーの尾崎さんに芯抜きの仕方を指導していただいた後、わかめの芯抜き作業を実施した。当日は漁協の婦人部の方々にも協力をいただき、大量のわかめを「元葉」「中芯」「芯抜き」の3種類に分ける作業を行った。小休止を入れながら、22名で約250kgのわかめを芯抜きした。生徒達は作業の大変さを感じながらも食べていただくお客様のことを考えながら衛生面にも気をつけて作業を行った。



ウ わかめパック詰め(2年) <9月16日実施>

6月26日に芯抜きしたわかめをパック詰めする作業を行った。ラベルを貼り、わかめを計量した後、袋に詰める作業を行った。今年は合計で779袋になった。衛生面に気をつけながら、信頼性を損なわないように計量を慎重に行い、パック詰めしたときの見栄えにも気をつけて作業した。



エ 接客講習会(2年) <9月30日実施>

ファミリーマートの協力をいただいて、ポップづくりや笑顔の作り方、商品の渡し方・お金の受け取り方等を学習した。特に、笑顔の作り方は生徒にとっては印象が強かった。



オ わかめ販売(2年) <10月8日実施>

盛岡のフェザン、肴町商店街でわかめ販売を行った。わかめを買っていただいた方々から「頑張ってるね」「完売できるといいね」という励ましをいただきながら販売を行った。フェザンや肴町商店街の方々からも宣伝していただき、当日は多くのお客様にわかめを買っていただいた。



<フェザン>

生徒達は、販売体験を通して、「人と人の関わりをもつためにコミュニケーションをとることの必要性」や「お客様の気持ちを考えることや感謝の気持ちを持つことの大切さ」について気づいた。接客講習会で作成したポップを店頭に掲げ、販売講習会で学んだ笑顔の作り方を実践し、無事779袋を完売することができた。



<肴町商店街>

カ わかめ学習オリエンテーション(1年)

<10月14日実施>

本校の産土タイムスーパーバイザーである尾崎さんから、これから実施するわかめ学習について説明していただいた。1年生にとって初めてのわかめ学習である。尾崎さんからはわかめの生態系や養殖の仕方などを説明していただいた。その後、11月下旬に行われる種巻きの実習を行った。種がついたロープを大きなロープに巻き付ける作業であるが、種がついたロープの結び方(本結び)に悪戦苦闘する生徒もいた。生徒は養殖わかめの作業の難しさを感じるとともに、おいしいわかめをつくらうという決意を固めた。



キ ロープ補修(1年) <10月27日実施>

わかめ養殖に使うロープや浮き球の補修作業を行った。前年度に使用した種糸を外し、浮き球のペイントを落とし、新しく浮き球にペンキを塗った。お互いに協力して作業をすることができた。

その後、種巻きの練習をした。種巻きの練習ではロープの結び方を再度尾崎さんに教わった。結び方がうまくできない生徒もいたが、お互いに教え合って種巻き作業の準備を行った。



＜浮き球の補修作業＞

ク わかめ種巻き（1年）＜12月1日実施＞

例年より1週間遅い作業になった。約25名の漁家の方に協力をいただいて作業を行った。当日は船酔いする生徒も出ず、全員が協力して作業を行った。揺れる船上で種のついたロープを巻く経験がないため、練習通りとはいかなかった生徒もいたが、漁家の方々に種の巻き方をアドバイスしていただき、無事に作業を終えることができた。

波に揺れる船の中でも作業をしている漁家の人たちの大変さを感じるとともに、おいしいわかめをつくりたいという決意をもった生徒も多かった。



ケ わかめ調理実習（3年）＜11月18日実施＞

岩手県生活衛生営業指導センターで行っている「生活衛生業の体験学習」でわかめの調理実習を実施して4年目になる。今年も岩手県飲食業生活衛生同業組合大船渡支部の協力をいただき、わかめの調理実習を行った。



生徒達はプロの調理師に指導をいただきながらわかめを使った料理2品をつくった。生徒たちは工夫されたわかめの料理をつくり、わかめ料理の奥の深さに関心を持った。この料理のレシピは来年のわかめ販売でわかめを購入していただいた方々に配布する予定である。



＜「末中わかめのだし巻き卵と生春巻き」＞

コ わかめ早刈り（1年）＜1月26日実施＞

わかめの間引き作業にあたる早刈りを行った。船に乗っての作業は2回目である。当日は波が高く、生徒も作業がやりづらかったが、漁家の方々からどのわかめを間引けばよいかを教えていただきながら作業し、刈り取りができた。

今後はわかめの本刈り作業を3月2日に実施し、湯通し、塩蔵作業を行い、来年度のわかめ販売に向けて準備を進める予定である。



(2) 復興道徳・防災学習

ア 先人に学ぶ道徳 ＜7月10日実施＞

『岩手県版中学校道徳資料集 郷土の未来を見据えて～先人の生き方に学ぶ～』で取り上げられている郷土の復興を進めた先人達に学ぶ道徳の授業を実施した。1年生は「小松藤蔵」、2年生は「和村幸得」、3年生は「後藤新平」について学習した。

先人の功績をパワーポイントで紹介しながら、苦難に出会ったときの行動について学級で話し合い、「自分ならどうするか」という視点で考えさせた。今後の自分の生き方につなげることを目的に授業を行った。生徒は「どんな苦難にも諦めないこと」「周りの人のことを考えること」等を学んだ。



イ 郷土の復興・発展を考える道徳

＜12月17日実施＞

岩手県道徳教育郷土資料集『ふるさといわたの心』を使った道徳の授業を実施した。

1年生では「でんでん虫は優しさをのせて」2年生は「六百リットルの水」3年生は「僕らの復興のシンボル」の授業を行った。身近な話題で生徒にとって考えやすい題材であった。生徒は自分なりに考えを持つことができた。また、グループでの話し合いを通して、友達の意見も聞くことにより、更に考え方の幅が広がり地域に対する思いを再認識したり、自分たちが地域に何ができるのかなどを考えることができた。

ウ 防災体験学習＜11月13日実施＞

避難訓練の後、大船渡消防署の方々を講師に迎え、防災体験学習を実施した。1年生は消火器訓練、2年生はAED講習会、3年生は応急処置について学習した。生徒達は体験学習を通して、命を守ることの大切さを学び、緊急事態があったときに生かしたいという感想を持った。



＜1年生の煙体験の様子＞



＜2年生のAED体験の様子＞



＜3年生の救急救命法体験の様子＞

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 本校のわかめ学習は19年以上続いており、地域の協力もあって充実している。震災以来ファミリーマートの支援や盛岡での販売も協力をいただき、生徒にとって地域を知るとともに、地域一体となって学習することで本校にとって欠かせない学習になっている。
- (2) 「先人に学ぶ道徳」以外に今年度できた「ふるさといわたの心」の副読本を活用した道徳も取り入れ、【いきる】【かかわる】の教育的価値にも迫る学習計画を立てることができた。
- (3) 防災学習は学年ごとにテーマを決めて3年間かけて実施しており、防災に対する本校の学習するスタイルできあがった。また、今年度も大船渡市消防署の協力を得て、昨年度課題であった1学年の内容を改善し煙体験学習も実施することができた。

2 課題

- (1) 本校の生徒数も減少傾向にある。その中でも地域の方々に支えられながら学習している。単なる作業体験に終わることなく、指導して下さる漁家の方々の姿から働くことの意義やワカメ学習を通じての地域の素晴らしさを学ばせたい。
- (2) 3年続いている防災学習を昨年度は授業参観日に実施したが、今年度は参観日が中止となり、保護者も含めた学習ができなかった。校報等を通じて親も考える機会をつくりたい。
- (3) 今年度の防災体験学習では1年生の学習内容を改善した。3年生も昨年度より多くの救急法を学んだ。今後はサイクルは変えずに、改善を行い、「止血法」を取り入れるなど体験学習をさらに充実させていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：宮古市立宮古小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、市街地の中心部に位置する。東日本大震災の際には、本学区も被災し、市街地の多くが浸水し、大きな被害を受けた。本校は、地域住民の避難所として数ヶ月に亘り運営にあたった。

被災後、学校の研究主題を「ふるさとの復興を担う『人づくり』の展開」とし、国語科、社会科、体育科、特別活動を中心に教育課程全般にわたり復興教育を取り入れ、それを「復興教育学習プログラム」と称し、8年間継続して教育活動を行ってきた。

今年度も、これまでと同様に教育課程全般にわたって復興教育学習プログラムを推進してきた。学習者である子供たち自身がそれぞれの活動につながりを感じ、最終的に目指す目標に向かって学習できるように、以下の2点を重点にして今年度も実践に取り組んだ。

- 1 本校の「復興教育学習プログラム」を継続して行う。その際、それぞれに行っている学習活動を、学習者である子供たち自身が「人づくり」という視点で一つのまとまりとして捉え、目標に向かって学習できるよう計画していく。

＜復興教育を通して目指す子ども像＞

- 主体的に学ぶ子
- ふるさとを愛する子
- たくましく生きる子
- 自分の命は自分で守る子

- 2 学年末には各自が「復興教育学習」のまとめを書き記し、それを冊子としてまとめ、防災・復興に関する学習の成果を発信する。

II 取組の概要

- 1 授業を中心に据えた復興教育（復興教育学習プログラム）

各学年の年間テーマを決めて、総合、生活科、国語科、社会科、体育科、特別活動を中心に、地域を担う「人づくり」を進める復興教育に取り組んだ。

今年度も昨年度と同様に、年度当初に目指す学習のゴールを児童と共有するオリエンテーションを行った。



6 学年：オリエンテーションの様子

- 2 復興教育学習プログラムのまとめ
総合や各教科の中で年間を通して学んだことを、児童に振り返らせ、各学年に応じた一人一人の学習成果物を冊子にまとめた。



- 3 避難訓練の実施（年4回）

避難訓練は年間5回を計画している。火災や地震発生・津波警報発令時における避難経路の確認を行った。コロナにより実施できなかった「引き渡し訓練」については次年度以降に実施したい。



4 津波模型の実演を見学（7月）

総合の学習において、3年生38名を対象に宮古商工3年生の生徒が行う津波模型の実演から津波の被害について学ぶ授業を実施。生徒さんの津波模型の実演に、3年生の子どもたちは驚きの声があがった。



5 ハザードウォークラリー（7月：PTA行事）

PTA厚生委員会が主催の行事。保護者、教職員、児童を合わせ約100名が参加。学区内にある避難場所等を廻り、各ポイントで出題されたクイズを解きながら、再び学校に戻り得点を競うという催し。参加した親子は、クイズを解き防災に関する知識を高めることができた。



6 防災教育に係る授業研究（7・9月）

校内研において、年間2回の研究授業を実施。1・3・6年生の授業を通して研究協議を行った。写真は、6年生が「〇〇家の防災マニュアルを作ろう」の授業で話し合っている様子。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 本校の「復興教育学習プログラム」を継続して行うことができた。年度当初に目指す学習のゴールや学習活動を子供たちと共有するオリエンテーションを実施したことで、学習者である子供たち自身が、それぞれの学習活動を「復興教育：人づくり」という視点でとらえることができた。

(2) 学年末には各自が「復興教育学習プログラム」のまとめを書き記し、それを冊子としてまとめることで、行ってきた学習活動を自分自身で整理して自分の思いを発信することができた。

(3) 昨年度末からこれまで新型コロナ感染の影響により、地域の方々と関わる活動等、実施できなかった活動があった。そんな状況の中でも活動内容を工夫しながら可能な範囲で実践を行うことができた。高学年においては、コロナ禍において自分たちでできることを考えることができた。

2 課題

新しい教科書になり、他教科との関連からカリキュラムを見直す必要が出てきた。コロナ後の教育活動として実施できることを考えながら新たな「復興教育学習プログラム」を作成していく必要がある。

I 事業の概要（地域の実情含む）

【野田村立野田中学校】

本校は東日本大震災津波により甚大な被害を受けた野田村にある唯一の中学校である。平成29年まで校庭に仮設住宅が立ち並び使用できなかったため、テニスコートを校庭として利用し授業や行事を実施するとともに、部活動では村内の体育施設を利用しながらひたむきに努力を続け、好成績を収めてきた。年々地域の復興も進んできており、校庭に設置されていた仮設住宅は撤去され、平成29年9月には校庭使用の再開がなされた。現在校庭は、授業や部活動などの諸活動に使用ができるようになり、学校環境や学校生活も震災前の状態に徐々に戻りつつある。

本校では、「郷土野田村を愛し、その復興・発展を支える人材の育成」を目指して、地域の素財や外部の人財を効果的に活用した教育活動「太陽プロジェクト」を展開している。地域の未来を担う「ひとづくり」が本校の使命であり、学校・保護者・地域が協働して、教育活動の充実を図っている。特に、創作太鼓の継承と発展を復興教育の大きな柱として位置づけ、表現力の向上を図りながら地域貢献活動にも取り組んでいる（復興教育）。生徒たちは「野田村の太陽になろう」を合言葉に、元気や笑顔を発信するとともに、今まで支援をいただいていた方々や学校に感謝の気持ちを表そうと、様々な活動に取り組んでいる。また、地域の災害リスクに関する学習や避難訓練を通して、自然災害発生のメカニズムや災害を回避するための知識や技能を身につけ、生徒が自らの命を守り、生きるためにどのような行動をとればよいかを考え、実践しようとする態度を養う取り組みを行っている（防災教育）。

II 取組の概要

1 創作太鼓への取り組み

創作太鼓指導会

ア ねらい

創作太鼓の活動を通して、表現力の向上を図りながら、自分たちの活動で地域を元気づけようとする思いをもち、主体的に地域に関わろうとする態度を育てる。

イ 活動内容

東日本大震災後、「野田村の太陽になろう」を合言葉に、自分たちが地域の方々を元気づけられるひとつの手立てとして創作太鼓に取り組み、9年目となる。使用する太鼓は、歌手の稲垣潤一氏や台湾ロータリークラブ、全国校長会からの支援、タイヤを利用した手作りの太鼓である。外部の人財として、邦楽作曲家の佐藤三昭氏と太鼓演奏者の高橋理沙氏を招き、年3回（10月、1月、2月）学年に応じた太鼓演奏を指導していただいている。指導会を中心として、それぞれの曲に込められた思いや背景を自分たちで考え、カタチにし、様々な機会をとらえ、創作太鼓を通して、支援への感謝や地域を元気づけたいという思いを発信している。（なお、コロナ禍の影響もあり、2月の指導会については、中止とした。）



2 県外地域・他校との交流及び地域行事への参加

(1) 「復興和太鼓」演奏交流会での演奏（11/17）

継続して創作太鼓の指導をしていただいている高橋理沙氏に協力をしていただき、北海道亀田郡七飯町で行われた「復興和太鼓」演奏交流会に3年生が参加し、演奏を行った。コロナ禍の対応として、今年度は11月に北海道函館市方面の修学旅行となったことが計画を立案するきっかけではあったが、素晴らしいステージを用意していただき、地元紙である函館新聞にも大きく取り上げられた。交流会後、思いが込められた感想のメールや葉書が、高橋氏や七飯町教育長與田敏樹氏から届けられた。高橋氏のメールには会場で演奏を聞いた方々が書いてくださった感想も添付されており、生

徒たちは単なる演奏会での演奏ではなく、心の中の想いや願いを七飯町の方々と交流してることができたことがうかがえた。



(2) 他校との交流

ア ねらい

学校間交流を通し、他校の取り組みの様子を知り、視野を広げるとともに、野田村の復興の様子や本校で取り組んでいる三大文化を発信することで、自分たちの成長に生かしていこうとする態度を養う。

イ 兵庫県西宮市立山口中学校との交流

東日本大震災以来、山口中学校との交流を継続して行っている。例年8月に行われる野田まつりの際には、山口中学校生徒会の生徒にも参加してもらい本校の3年生と一緒に野田中ソーランを披露し、地域のまつりを盛り上げてきた。また、2020年1月には当時の3年生が山口中学校を訪問し、創作太鼓を披露するなどしている。今年度は、コロナ禍の対応のため、イベントや校内外の行事の中止・縮小などが相次ぎ、また積極的に人が移動することや密になる活動を控える必要性があることなどから、これまでのような交流を行うことができなかった。県を跨いで移動をしたり、遠方まで出向き直接顔を合わせて交流をしたりすることができなかったが、ビデオレターを作成し、お互いに交換し合った。今後も、様々な工夫をしながら交流を図り、つながりを維持したい。

(3) お達者同窓会(10/1)

本校会場で行われる介護予防普及啓発事業「お達者同窓会」において、参加した高齢者の方々と福祉体験を行ったり、野田中ソーランや創作太鼓を披露したりするなどの活動を通して、地域に暮らす方々との交流を深めた。



(4) その他

夏休み中に岩手県中学校校長会の役員の方々が大地震後の復興の視察として来校された。その際に3年生がこれまでの野田中学校の復興の歩みを発表したり、創作太鼓を披露したりした。視察団の中には震災当時に副校長として勤務された方、震災直後に赴任され野田中の創作太鼓活動の基礎作りをされた方もいらっしゃり、発表や演奏を聴いていただいた後、当時をふり振り返りながら熱い想いが込められた感想を生徒に話していただいた。お互いの想いが伝わる交流の機会となった。

3 外部人財を生かした復興教育

(1) 外部人財を生かした未来を担う人づくり

ア ねらい

外部人財を招いての講話や活動から、講師の生き方や考え方などに触れ、学ぶことで、自己の生き方に生かそうとする態度を養う。

イ 活動内容

(ア) 塩の道講演会(1学年)(5/25)

久慈広域環境協議会の貫牛利一氏を講師に招き、野田村で塩づくりが盛んになったわけや村おこし、復興への思いを講話いただいた。

(イ) 復興教育学習講演会(3学年)(7/8)

3学年の総合的な学習のテーマである「私たちの野田村を創っていこう」のもと、野田村役場の未来づくり推進課や教育委員会の職員の方々、防災官の工藤剛氏、また八戸工業高等専門学校の川村信治教授など、野田村の復興や防災を推進しているの方々から、「いわての復興教育プログラム」における教育的価値である「いきる」「かかわる」「そなえる」の3つの観点で直接話をう

かがい、疑問に感じていることや今まで知らなかった「復興」の実態について理解を深めた。



(ウ) 震災10周年事業復興講演会(1/29)

震災当時、岩手県沿岸部に勤務し、現在も新聞記者として地域の復興を見つめ伝えている、河北新報社小牛田支局の山並太郎記者をお迎えし、ふるさとや復興への想いについて講演をしていただいた。地方紙の新聞記者としての体験や思いを話していただくことで、本校でも大事にしている教育価値「伝える」について再認識する場となった。併せて、震災から10年を経て記憶の風化が進む今、野田中学校としてのこれまでの歩みを振り返りながら、今後進むべき道を共に考える場ともなった。



III 取組の成果と課題

1 成果

(1) 今年度はコロナ禍への対応として、様々な制約があり、例年行っている発表の機会の中止や規模の縮小などのため、活動を行う上で昨年までにはない難しさがあった。しかし限られた条件での活動となった分、「野田村の太陽になろう」を合言葉に、創作太鼓や野田中ソーラン、合唱など様々な活動に取り組む中

で、自分たちの活動で地域を元気づけようとする想いをより強く持つことができ、それぞれの活動に積極的に取り組むことができた。

- (2) 外部の指導者を招いての太鼓指導会を通して、復興太鼓として始めた当時の願いや曲に込められた想いを考え、自分たちの太鼓に生かし、工夫しながら自分たちの想いを込めた太鼓を創り上げることができた。震災後に始まった創作太鼓を先輩から継承し、さらに発展、進化させていこうと高い意識をもって取り組み、その成果を学校行事などで地域の方々に向けて披露することができた。
- (3) 塩の道講演会や復興教育学習講演会、河北新報社の山並記者の講演会など、外部人財を講師に招き、本物に触れることで、講師の生き方や考え方から、未来を担う人材として自分の将来や今後の野田村のさらなる復興について考え、生かそうとする思いが高まった。
- (4) 地域の高齢者との交流会（お達者同窓会）では、消極的な態度で参加していた生徒も、野田中文化の発表、福祉体験など、高齢者の方々と共に活動することで、徐々に積極的に行動する姿が見られた。

2 課題

- (1) 生徒や教員が年々代わっていく中で、本校の創作太鼓に込められた想いや願いを風化させずに、次世代にどのように継承していくかを考え、意図的な指導場面を設ける必要がある。また、これまで継承してきた文化を、次は伝統という段階にしていくために、どのような手立てが必要になっていくのかをカリキュラムマネジメントの観点からも考えていかなければならない。
- (2) 復興教育に関わる補助金や義援金が少なくなっていく中で、外部指導員を招いての太鼓指導会や諸活動を行っていく上での運営活動費を、いかに捻出し維持・発展させていくかが継続した課題である。

参考資料

【「復興和太鼓」演奏交流会の感想：3学年】

- ・北海道という場所に野田中創作太鼓八代目の歴史を刻めたと思う。創作太鼓を通して、たくさんの人とのつながりができたので、そういう面も九代目と十代目の後輩達には大切にしていってほしいなと思った。
- ・野田中創作太鼓は過去の先輩方、三昭さん理沙さん、たくさんの人のおかげでできていることを忘れず、今できていることを当たり前と思わずに後輩には取り組んでほしい。そして何よりも太鼓を演奏する上で想いを強くもって表現して、野田村の太陽でありつづけてほしい。
- ・九代目、十代目には野田村をもっと発信してほしいと思う。今回、八代目が北海道公演を達成できたのは、たくさんの方の支えのおかげだし、太鼓が受け継がれてきたのも多くの人たちの支えのおかげであって、そういう人たちへの感謝を忘れずに想いを届けられるように頑張りたい。
- ・後輩達には、もっともっといろいろなところで演奏して、野田中が誇る創作太鼓を全国に広めてほしい。
- ・県外で行った演奏だったので緊張したけれど、達成感もあった。後輩には、技術ももちろんだが想いも大切にしてほしいと思った。
- ・コロナウイルスで世の中が大変な中、理沙さんを始めとする北海道のみなさん、三昭さんの活動のおかげで、野田中創作太鼓の公演ができたことは奇跡だと思いました。本当にありがたいことだなと実感しました。
- ・詩読みやバチ打ちで七飯町のみなさんに震災の悲しみなどを伝えることができたのでよかった。
- ・たくさんの方の協力のおかげで太鼓の演奏ができていると思うから、周りの人への感謝を忘れずに演奏してほしい。
- ・プロの人との交流は絶対無駄にはならないし、これから太鼓練習と交流会などを大切にしながら、後輩には自分たちらしい、先輩を超える太鼓演奏をし、想いを聴いている人に届けてほしい。
- ・先輩方もたくさんの方の大きな舞台で演奏してきたけれど自分たちも歴代の先輩方がまだ叩いたことがない北海道で叩くことができてよかった。北海道にも野田村を発信することができた。

【復興講演会「寄り添う意味を考える」の感想】

- ・私が今必要だと思うことは、震災についてもっと知ることです。私は震災当時のことは、鮮明に覚えているわけではありません。映像を見たり、被害について両親や祖父母から聞いたりして、震災について知りたいです。私が大人になると、東日本大震災を知らない人がもっと増えるので、子どもや孫に伝え残せるようにしたいと思います。(1年生)
- ・今自分たちの世代で大震災の記憶をなくしてしまうことは絶対にだめだと思うので、今行っている復興のための太鼓などを今後も後輩たちに伝えられるようになりたいです。そして、自分も山並さんのような震災について深く考えて伝えられるような人になれば、次の世代の人たちにも伝え続けることができると思いました。(2年生)
- ・山並さんは、「ただ悲しくて辛い出来事だということだけで片付けてはいけない」「後世に必ず伝えなければならない」という強い思いがあったからこそ、記事を書き続けられたのだとわかりました。(2年生)
- ・「すべては子どもたちのため」という話を聞いて、自分が子どもをもったとき、どういう育て方をするか、どうやって子どものために尽くすかが、わかったような気がしました。(2年生)
- ・野田村以外の被災地の復興の様子なども知りたいと思いました。山並さんのように多くの方の話を聞くことはできないかもしれないけれど、震災のことを知っている人に聞いたりして、自分もそれを伝えていきたいと思います。(2年生)

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災津波が発災してから9年が経過する。

津波で壊滅的な被害を受けた本校においても、新校舎は5年前から使用しているほか、第1グラウンド、部室棟、海洋システム科の養殖棚、艇庫等の実習施設が昨年度末に完成するなど震災前の状態に戻り、今年度からは、養殖実習を本格的に再開している。

また、地域の復興状況も市街地の整備が進むなど大きく進展しているが、発災時に、小学校低学年あるいは未就学児であった現在の本校生徒にとって、発災直後から復旧・復興に至る経緯の記憶は薄い。

そこで、社会で活躍している本校卒業生から、震災時の体験とその後の人生をテーマとした講話を聴く機会を設けるほか、昨年度秋に開館した「東日本大震災津波伝承館」を生徒が見学し、学校や地域のみならず、三陸沿岸各地の復旧・復興の歩みを改めて学習する機会をつくることで、本校生徒が自分の生き方を見つめ、人生設計力を育むことを目的とする。

II 取組の概要

1 東日本大震災津波伝承館見学（5月21日）

進路決定を目前にした3年生全員を対象に実施。

被災直後から現在までの復興の歩みについて、東日本大震災津波伝承館で学ぶことで、自らの生き方と在り方、進路決定を含めた今後の人生を考える機会となった。

【参加人数：教職員15名、3学年生徒117名】



全体ガイダンス

当日は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、5月末まで休館中であったにも関わらず、津波で壊滅的な被害を受けた本校の復興教育の推進に特段の御協力をいただき、特別に開館していただいた上に、解説員の方々から詳細な説明をいただいた。



解説員の説明に聴き入る生徒



エントランス周辺



被災直後の様子について学習



復旧・復興の歩みを学習

2 復興・防災・減災教育講演会実施（6月3日）

本校の「総合的な探究の時間」にもお世話いただいている株式会社ヘラルボニー（本社 花巻市）の丹野晋太郎プロジェクトマネージャー（本校卒業生）を招き講演会を実施した。東日本大震災津波発災当時、中学校3年生であった氏は、津波で御両親を亡くされるという辛い体験をしながらも、支えてくださった周囲の方々への感謝を胸に、高校在学中は学業や部活動に真剣に打ち込んだこと、一方で、進路選択における迷いがあったことなど当時を振り返り率直なお気持ちをお話しいただいた。



ヘラルボニーの紹介



講演する丹野氏

大学時代は学業に勤しむ一方で多くのボランティア活動に関わったことをお話いただいた。特に、地元陸前高田市で毎年8月に行われるけんか七夕の再開に向けてのボランティアの際には、県外から来てくださったボランティアの方々から本人が気づくことができなかった地元の魅力を挙げられたことで陸前高田や岩手県に対する愛着が深まったと語っていた。この経験が地元の魅力を伝えたいという思いを生み、広告代理店に入社するに至ったこと、一方でかつて自分が多くの人の支援を受けて震災で受けた心の傷を回復させていったことから、社会的弱者を支えたいという思いが膨らみ、株式会社ヘラルボニーに転職したこと、進路選択時に迷うのは当たり前で、前向きに考え、迷ったらやってみようと思うことが大事であるということを生徒に語っていただいた。

これまでの講演会では、いわての復興教育プログラムにおける教育的価値「いきる・かかわる・そなえる」のうち「そなえる」に重点を置いたものが多かったが、在校生の発災時の年齢を踏まえて「いきる・かかわる」に重点を置いてご講演いただきたいとの要望に沿った内容であった。

【参加人数：教職員 48 名、全校生徒 365 名】

III 取組の成果と課題

1 成果

(1) 東日本大震災津波伝承館見学

施設内には、展示品、写真や映像等、当時を物語る展示がされてあるため、見学前は、辛い経験を思い出すフラッシュバックを心配したが、そのような症状を示す生徒はおらず、当時から現在に至る地域の歩みを、参加生徒全員が改めて学習した機会となった。

(2) 復興・防災・減災教育講演会

東日本大震災津波の体験のみならず、その後の高校生活や進路決定、転職など、社会で活躍している卒業生が高校生当時の目線で、自らの体験を赤裸々に話していただいたことで、復興教育に止まらずキャリア教育の目指す人生設計力を育む機会となった。

2 課題

新型コロナウイルス感染症拡大防止を受け、避難所運営体験等、中止せざるを得なかった事業について、コロナ禍でも災害は発生するとの観点から、市の防災局等関係機関と協議を進めながら、事業実施の方向性を模索する必要がある。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は大船渡市の高台に位置しており、東日本大震災において校舎は被災しなかったものの、在籍する生徒の多くがライフラインの断絶や避難所生活を送るなど被災体験を持つ。

一昨年度から防災学習列車を利用して復興教育を推進し、昨年度実施した防災士による防災講演会、震災遺構見学を通して生徒の防災に対する意識が高まっている。今年度においては、より地域の人材や資源を利用した復興教育を推進したいと考えている。

II 取組の概要

I 防災講話・避難訓練実施

校長先生より、地学の専門的な切り口から地球の構造、地震が起きる仕組みや地震の進む速さを説明いただいた。身振り手振りを使ってわかりやすい説明で、生徒達は訓練の大切さを確認した。

講話後は、地震と火事を想定した避難訓練を実施した。講話で学んだことを受けて、生徒たちは緊張感を持って訓練を行い、速やかに避難することができた。

生徒感想（防災講話・避難訓練）

- ・マグニチュードについて詳しく知れて良かったし、危険じゃないと分かっているけど、危機感を常に持つことを心がけようと思った。（1年女子）
- ・避難訓練では報告を受けてからすばやく行動できたので、これをいつか本当に災害が起きたときに生かされればいいと思いました。（1年男子）
- ・講話では地震・津波が起こるメカニズムや、私たちが立っている大地のつくり、震災の時どういったことが起きていたのか知れてよかった。（2年女子）
- ・校長先生の説明の仕方がわかりやすく、一時間があっという間に感じました。避難訓練もとてもスムーズに行えたと思います。いざという時のために日頃からの訓練はたくさんやっておくべきだと思いました。（3年女子）
- ・地震が発生した時に講話のことを思い出して行動できればいいなと思います。家族にも話してみようと思います。（4年男子）

2 校外学習事前学習

「あなたの大切なもの」をテーマにして、大切にしたいものは何か、大切なものを守るためにはどうしたらいいか一人一人考えた。初めに紙の上でスーツケースに必要な物品を詰めてみる練習を行った。詰めるのに苦労している生徒が多く、物を厳選して準備して前もっておくことが大切なことがわかった。また、家族を守るためにどうするか意見交換し、あらかじめ避難場所を決めておくなど事前対策が重要だと確認することができた。

生徒感想（校外学習事前学習）

- ・東日本大震災を経験した人として、次に同じようなことが起きても大丈夫なように伝えていく必要がある。（1年男子）
- ・災害の時にどんな行動をとるか、物はどうするかなど色々なことを思い出せたので良かった。（2年男子）
- ・先人の知恵も過去の経験も緊急時に思い出せなければ意味がないと思います。心配しないで済むように準備を今日からしようと思いました。（3年女子）
- ・いざという時のために今から準備をして自分ができることを精一杯頑張りたいと思います。（3年男子）
- ・経験したからこそ誰かに優しくできると思います。私も他の被災地に迷わず支援したいです。（4年女子）
- ・震災が起こったら何をやるかこれから考えていきたいと思いました。母だけは守りたいです。（4年女子）

3 校外学習

一関一高定時制と合同で大船渡津波伝承館の語り部さんによる津波の紙芝居の鑑賞とウォークラリーを行った。初めに大船渡市三陸町の津波の教訓を題材にした紙芝居を鑑賞した。語り部さんの素晴らしい朗読と演技に皆引き込まれた。沿岸で大きな地震が起きた時は一人であっても高台に逃げる「津波てんでんこ」の教訓を学ぶことができた。

その後のウォークラリーでは5つのグループにわかれて語り部さんからお話を伺いながら、加茂神社周辺を歩いた。一関一高の生徒達も合同のグループで行動し、東日本大震災の被災状況や津波避難のポイントについて共に詳しく学ぶことができた。

生徒感想 (校外学習)

- ・地震が来たらすぐに避難することを意識して過ごしていきたいです。(1年男子)
- ・伝えること、語り継ぐ事は大事だと思った。(1年女子)
- ・初めて分かったことがあって勉強になりました。加茂神社に行って波が階段を上ってきたのを想像するとゾッとしました。(2年女子)
- ・歩いて分かったこともあり、自分にとって大切に良い時間になりました。(3年女子)
- ・紙芝居はとても見応えがありました。津波の怖さを改めて知ることができました。(4年男子)

4 防災講話

防災士を講師に、ビニール袋を使った非常時の調理と、新聞を使ったスリッパ制作をご指導いただいた。調理指導では、非常時を想定して、ビニール袋での時短炊飯や温かい汁物を調理した。少ない材料・エネルギー資源を使っての食事作りはとても参考になった。非常時は温かい食事が心と体を癒やすということが印象的だった。新聞紙スリッパ制作は床の冷たさを和らげ、人が大勢集まる避難所において衛生的に使えるなど、コロナ禍においても役立つものになった。その他にも新聞紙はお腹に巻いて保温することもできるというお話もあり、新聞紙をたくさん備えておきたいと感じた。生徒達は、実習を通して家族や地域の人々のために率先して行動する気持ちを新たにすることができた。

生徒感想 (防災講話)

- ・今日覚えたことをいざという時に役立てたい。(1年女子)
- ・ビニール袋で米が炊けることに驚いた。鍋で直接作るよりも洗い物も少なく、水も節約できるので良いと思う。(1年女子)
- ・簡単にできるので家でも家族みんなで作ってみたいです。缶詰もあるので試してみたい。(2年男子)
- ・災害時や緊急時に周りの人のことや状況を考えられるように、今日聞いたことを忘れないように紙におこしておきたいと思いました。(3年女子)
- ・新聞紙スリッパは思ったより強度があつて驚いた。この知識を忘れないようにしたい。(4年男子)
- ・自分だけではなく、他の人に説明ができればいいなと思いました。改めてとても道具に頼る生活をしているなと思いました。(4年女子)

5 シェイクアウト訓練

地震が起きた時の身を守るためのシェイクアウト訓練を音源を使って行った。初めての訓練で戸惑う生徒もいたが、よい訓練となった。その後、毎月1・15日に体験できる災害伝言ダイアルの紹介と体験を行った。このサービスを初めて知る生徒も多く、とてもよい機会になった。

生徒感想 (シェイクアウト訓練)

- ・自分の身は自分で守ることや、訓練の大切さがわかった。(1年男子)
- ・電話がつかなくてもメッセージを残せることは身近な人の安全確認にとっても良いと思った。(1年女子)
- ・この先も様々な災害が起こると思うので、落ち着いて「171」のことを思い出していこうと思いました。(2年女子)
- ・実際に音声を残してみても、自分の声や話し方がそのまま伝わるので、その時の状況を受け取れるのが良いなと思いました。(3年女子)
- ・こんなサービスがあることを知りませんでした。家族にも伝えて活用できるようにしたいと思います。(4年男子)
- ・うまく録音されていなかった。家でもう一度試したい。(4年女子)

Ⅲ 取組の成果と課題

1 取り組みの成果

防災士や語り部などの地域の方や伝承杭などの資源を活用して、様々な観点から防災について学ぶことができた。実際に見たり体験したりしたことで生徒の防災に関する知識がより深まったと感じる。また、地域のことを知り、将来地域のためにできることを考えるきっかけにもなったと思う。今後も地域資源の活用や交流を通して防災教育をすすめたい。

2 課題

講話や学習会などで多面的に学ぶことはできたが、学んだことをまとめたり、発表したりするなどの発信する活動がなかった。自分事に落とし込み、行動できる生徒を育てるために、学んだことを地域に還元するような双方向型の計画を検討したい。また、教科の枠を越えて「いきる・かかわる・そなえる」に結びつく活動を年間を通して計画していきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：岩手県立釜石高等学校定時制

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校の生徒は、釜石市、大槌町、住田町、遠野市の4市町から通学している。令和2年度の生徒数は26名（4月現在）である。

本校周辺の地域では三陸沿岸道が開通するなど復興事業が進んでいるがその一方で、震災後10年目を迎え地域住民の震災の記憶の風化が懸念されている。

本校生徒の実情として、生徒の多くが中学校時代に不登校や別室登校であったため、様々な体験を通じた学習が求められている。

本事業では、教育的価値「そなえる」や「かかわる」に位置づけられる「地域とのつながり」並びに「復旧、復興のあゆみ」を主とした学校独自の復興教育を推進する。

II 取組の概要

1 避難訓練

6月30日（火）は火災を想定した避難訓練、10月16日（金）には地震を想定した全日制・定時制・釜石祥雲支援学校の合同避難訓練を実施した。第2回の避難訓練では停電によって放送機材が使用できなかった場合を想定して実施した。



10月16日（金）実施の避難訓練

【生徒のアンケートより】

- ・1年生の初めての避難訓練だったので避難経路を知る機会になった。避難経路を忘れず放送をしっかりと聞かなければと思いました。今回は事前に避難することがわかっていたが、実際に火災などが起きたら冷静に行動しなければいけないと思いました。

- ・今回は学校での避難訓練でしたが、どんなところでも子供や高齢者、体の不自由な人など様々な人がいるので避難するときは周りの人を助けるなど周囲への配慮も必要だと思いました。合同での実施でしたが、人数が多いと避難も大変だと改めて思いました。

2 農業体験学習

自然に触れ命の大切さを知り、協同の喜びなどを知ることを通じて、他の人や地域社会に役立つことを自分から進んで実践することができる力を養うことを目指して、遠野市での農業体験学習を実施した。

本校では、定期的に釜石市内の近隣の農家を訪問し農業体験学習を実施しているが、本年度は活動の場所を広げ遠野市の宮守川上流生産組合で農業体験学習を実施した。



7月17日（金）の農業体験学習

当初は農作業の繁忙期の田植え作業を手伝う予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、7月に活動内容を変更して実施した。1,2年生は、ブルーベリー畑の雑草取り、ハウス内でのプチトマトの収穫と脇芽取り、3,4年生は、カブトムシの飼育場の清掃活動、ブルーベリー畑、大豆畑の雑草取りをした。



7月20日（月）農業体験学習

宮守川上流生産組合での活動は、組合員の方々と交流しながら活動できたので、農業の仕事について、遠野市の風土について知る貴重な機会となった。この取り組みは生徒の反応も良かったため、次年度も継続したいと考えている。繁忙期である田植え、稲刈りの時期に活動できればと考えている。

3 防災体験学習

11月20日（金）に実施した防災体験学習では東日本大震災の被害が甚大であった釜石市近隣の陸前高田市、大船渡市を訪問した。



11月20日（金）防災体験学習（陸前高田市）

東日本大震災津波伝承館や大船渡市立博物館を見学し、各施設の職員から陸前高田市や大船渡市での東日本大震災の震災当時の状況や、震災津波等の自然災害が発生するメカニズムの説明を受けたり展示物や映像を視聴したりすることを通じて震災津波の恐ろしさを実感を持って学ぶことができた。

大船渡市立博物館では地質展示室、考古・民族展示室を見学することができ、自然と共に生きることについて考える機会となった。



11月20日（金）防災体験学習（大船渡市）

また、陸前高田市、大船渡市の市内の復興状況をバスで移動しながら見学し東日本大震災後の復興の状況を学ぶ機会となった。

III 取組の成果と課題

1 成果

本校が「いわての復興教育スクール〈沿岸〉」に認定されて今年で3年目となるが、防災体験学習を中心として復興教育に取り組む体制づくりが整いつつある。防災体験学習は、陸前高田市と大船渡市で実施したが、陸前高田市の市街の様子を見学したり、各施設で施設職員の方から説明を受けたりすることによって生徒達は、震災当時のことを思い出すとともに、地震のメカニズムなど自然災害について学び、自然災害に「そなえる」ことの重要性を再確認したようであった。

遠野市での農業体験学習は、自然に触れ、組合員の方々と交流しながらの有意義な活動となった。次年度は予算化して継続して実施したい。

2 課題

本校生徒は中学校時までの学校生活で集団活動が不得手であった生徒がほとんどである。復興教育を行う上で、生徒の創意工夫を生かしたり、交流活動など生徒が主体的に学んだりする活動までは、実施できていない状況である。主体性には欠けるところがあるものの、他人を思いやることができる生徒が多いので、ボランティア活動など生徒達の持ち味を生かした活動を積極的に実践したいと考えている。また、今年度予定していたが新型コロナウイルス感染拡大防止のため実施できなかった鶴住居町内及び橋野鉦山の見学については、次年度実施したいと考えている。

I 事業の概要（地域の実情含む）

山田町は、2011年3月11日に発生した東日本大震災で、中心街を含む海岸部が大きな津波被害を受け、復興に取り組んでいる。あれから約10年が経過する現在は、仮設住宅がほとんどなくなり、復興公営住宅などの建設も進み、復興の途中にある。その一方で、震災の記憶風化を防ぎながら、地域の更なる発展に本校生徒も貢献することが求められている。

本校は、震災以降特に生徒数が減少し、今年度からは1学年1学級の定員となった。また、山田中学校からの入学者が例年85%以上で、子どもの頃からの知り合いに囲まれて生活しており、多様な考えや価値観に出会いにくい状況にある。

このような状況を踏まえ、復興への貢献、学び拡大、コミュニケーション力の伸張等を目標とし本事業を活用することにいった。

II 取組の概要

1 防災教育の推進

(1) 第1回避難訓練

6月17日、二部構成により第1回避難訓練が行われた。第一部では、「2階特別教室より火災が発生し、有害なガスが発生している可能性があり、全校生徒は口にハンカチを当て直ちにグラウンドへ避難する」という想定で行われた。第二部では、災害時に本校が避難所になったときのための設営訓練が行われた。各学年に設営内容が割り当てられ、1・2年生は畳敷き、3年生は長机の設置及び本校に設置されている山田町防災倉庫より第一体育館へ物品の搬入に奮闘した。



(2) 第2回避難訓練

災害はいつ何時起こるか分からない。そこで、生徒へは避難訓練の実施について予告をせず、文化祭準備中に地震発生を想定しての避難訓練を行った。生徒一人ひとりが予告なしにもかかわらず、校内放送を聞き所定の集合場所へ安全かつ迅速に避難することができた。

2 交流事業

(1) 青森県立名久井農業高等学校

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

(2) 岩手県立雫石高等学校

「いわての復興教育推進事業（交流学习スクール）」で実践事例を紹介する。

(3) 岩手県立平舘高等学校

「いわての復興教育推進事業（交流学习スクール）」で実践事例を紹介する。

3 震災被害の伝承

(1) 碑の記憶

1年生は、明治以降の津波の石碑と東日本大震災の教訓を追った岩手日報社の連載「碑の記憶」を学習教材とし、復興・防災学習に取り組んだ。フィールドワークでは5班に分かれ、山田町内の大沢・織笠・船越・田の浜・龍昌寺の5地区に建てられている明治三陸地震津波や昭和三陸地震津波の石碑を調査した。碑文や周辺の被災状況などを見学した上で、「語り部」となっている地区の方々にインタビューを行った。

※生徒の感想

〔1年A組 坂本 純子 さん〕

校外学習を通して、多くのことを実際に見て聞いて学ぶことができました。私は、東日本大震災の経験をしていないので、町の変わり果てた様子しか知ることができませんでした。当時のことは、テレビでしか見ることができなかったため、分けることは少ないです。しかし、今回の話を聞くことで、多くの大切なことについて分かりました。「命を守ること、大切にすること」はとても大切なことで、碑でその思いを伝えていこうとすることがよく分かりました。私もこの先大人になったら、教わったことを周りの自分の家族に伝えていけるようにしていきたいです。

〔1年B組 佐々木 幸来 さん〕

語り部の方々は、ほとんど高齢者だということが分かりました。田の浜の中村さんは100歳で、この年齢になっても語ってくれているのがすごいと思いました。中村さんの伝えたいという意志をととても感じ取ることができました。織笠の方も、足がよくないようでしたが、雨の中にもかかわらず、外で語ってくれて、人生の先輩が一生懸命語って伝えてくれたことを、次は自分たちが伝えていかなければいけないと感じました。



(2) 総合的な探究発表会

1・2年生全員を対象とし、11月27日に本校第一体育館で行われた。会場には、「碑の記憶」でインタビューを引き受けてくれた語り部の方々や山田町教育委員会、町内小中学校関係者、県内高等学校関係者等が来校し、これまでの総合的な探究の時間の発表を評価していただいた。

本校では、総合的な探究の時間の目標を「確かな学力のうえに豊かな創造性と個性を備え、正義・倫理を持った市民として、地域社会の将来を担う人材の育成」とし、各学年試行錯誤を重ねてきた。その中で決して忘れられない、忘れてはならないのが東日本大震災である。1年生は、「碑の記憶」をテーマとし、二度と津波による犠牲者を出さないとの強いメッセージの発信となっている。命を守ったら、次にすべきことは「復活の記憶」である。2年生では、復活の軌跡を探究することで、その思いを次の世代に受け継いでいくことをテーマとしている。

(3) 第12回宮古地区学生研究・意見発表会

高校生、学生が研究・意見発表に取り組み、主体性や考える力を身に付けることにより、人材の育成を図ることを目的として開催された。

4 本校独自の復興教育

(1) 前期清掃活動

通学路や校地内の清掃・環境整備を通して、環境美化に対する意識の高揚と奉仕の心を育んだ。

各学年に清掃区域が割り当てられ、1年生は校門から国道45号線まで、2年生は校門から竜泉寺まで、3年生は校地内の花壇と周辺の草取りに汗を流した。



(2) サマーチャレンジやまだ2020

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

(3) 第20回海の運動会及び浜辺クリーン作戦

「いわての復興教育推進事業（交流学习スクール）」で実践事例を紹介する。

(4) 歯磨き指導

本校1・2年生の保健委員8名が、船越小学校へ出向き1年生14名に歯磨き指導を行った。六歳臼歯について○×のクイズ形式により、児童の理解を促した。また、絵本を読み聞かせることによって、さらに六歳臼歯の特徴を知ることができたと思う。最後に、大きな歯の模型を使って、六歳臼歯の磨き方がイントを実演した。

5 ボランティア活動の推進

(1) アドバイザースタッフセミナー①

(2) アドバイザースタッフセミナー②

(3) 沢の果てまでイッテQ

(4) 山田町クリーン大作戦

(5) たんけん！はっけん！やまだまち

(6) みんなの広場

(7) マイ陶器でお茶会&餅つきをしよう！

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 防災教育の推進

生徒一人ひとりが校舎から緊張感をもって安全かつ迅速に避難することができた。本校は、東日本大震災発生時、町指定の避難所として最大約1,300名の方々が利用した。当時のことを教訓として語り継がれ、避難訓練の際には役場職員の方々を招き、指導を仰ぎながら迅速に避難所の設営することが一つの訓練として定着している。

訓練終了後、役場総務課危機管理室の方より講評をいただいた。

- ・新型コロナウイルス感染症拡大を防止するため、畳間のスペースは2m空ける。
- ・山田高校は、通常約250名の避難所となるが感染症を考慮し通常の1/3の90名が妥当となる。
- ・濃厚接触者を特定するため、必ず避難所名簿を作成する。

避難訓練と併せて新型コロナウイルス感染症対策について再認識し、多くのことを学んだ。



(2) 震災被害の伝承

ア 碑の記憶

地域の石碑を紐解き、新聞作成やグーグルマップ作成に取り組み、多角的に復興や防災についての探究活動を実践することができた。また、震災学習列車活用スクールとも相まって、被災からの復興状況を確認するとともに、被災状況や復興について、伝えていくことの大切さを学ぶことができた。

イ 総合的な探究発表会

総合的な探究の時間で学んだことやさらに探究したいことについて、1年生はパワーポイントを、2年生は壁新聞やiPadを活用して発表し、自己の在り方や生き方についての考え

を深めることができた。

ウ 第12回宮古地区学生研究・意見発表会

これまでの総合的な探究の時間の発表は、校内にとどまっていた。しかし、本発表会は山田町を越えることとなり、本校1・2年生の取組を宮古地区に発信するよい機会となった。

(3) 本校独自の復興教育

ア 前期清掃活動

例年であれば、高校総体に参加しない文化部所属生徒等による活動ではあるが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため高校総体中止により、全校生徒による一大行事となった。その甲斐あってか、例年以上のゴミの量の回収となり、改めて奉仕の心の大切さを全校生徒で共有することができた。

イ 歯磨き指導

本校1・2年生の保健委員が、船越小学校1年生の児童との交流を図るとともに、生徒自らが指導者となり、その経験を通して歯・口腔の健康について必要な知識を身につけることができた。

また、町内に1つしかない高等学校としての存在意義を発揮できる貴重な機会であると同時に、異年齢との交流であり、本校生徒も成長できる場でもあった。



(4) ボランティア活動の推進

昨年度、本校生徒は12種類のボランティア活動に参加した。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、参加したボランティア活動は5種類であった。しかし、参加した生徒は地域の人々との対話・協働を通して自己有用感を高めることができた。

2 課題

(1) 防災教育の推進

第2回避難訓練終了後、体調を崩して保健室で静養する生徒がいた。震災に起因するかどうかは不明であったが、多様な生徒がいることを把握しておかなければならない。そのような症状を有する生徒には、あらかじめ避難訓練があることを予告する等の配慮が必要である。

(2) 交流事業

双方向往来による青森県立名久井農業高等学校との交流は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となった。しかし、オンラインによる交流をすることも一つの手段と考える。交流方法を再考し、両校の生徒が海の価値と山の価値を学び、新たな価値を創り出す特色ある行事となることを目指したい。

(3) 震災被害の伝承

ア 碑の記憶

語り部の方々の高齢化が進み、生徒たちとのコミュニケーションがかみ合わない場面が多く見られた。あらかじめ紙面で、質問内容を提示しておけばよかった。また、生徒へ前年度のパワーポイントや壁新聞を見せたことで、内容がそれに引きずられてしまい、自らの考えが表現できていないグループがあった。

イ 総合的な探究発表会

発表は〔発表時間：5分、質疑応答：3分、移動・準備等：2分、合計10分〕で行う。この一連を4回行うため、時間的に間延びした感があった。発表回数や1回ごとの発表内における時間配分の調整が必要である。



(4) ボランティア活動の推進

外部より依頼されるボランティア活動の種類は先行き不透明である。しかし、数少ない中でも、一人でも多くの生徒が参加することができるように外部との連絡調整を図りたい。



「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：岩手県立宮古北高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、1学年1クラスの全校生徒82名の小規模校である。全体的に自己肯定感が低く、支援を必要とする生徒の割合が高い。東日本大震災の影響もあり、家庭的な複雑な問題に悩み、葛藤している生徒もみられる。

震災以降、急速な人口減少が続いている田老地区の状況に鑑み、地域に存立する学校として、次代の地域社会を担う人材育成に努力したい。

本事業「たろう魅力発信プロジェクト」は、1学年を対象とし、生徒が主体的な姿勢で地域の多様な魅力を発見するとともに、地域住民とのつながりのなかで、様々な地域の抱える課題解決を目指して活動するなかで、生徒が自分らしさを発見し、自地域肯定感が育まれることを目指したものである。

の事をあまり知らない」と回答している。自分の生まれ育った地域のことわからないようでは、地域の多様な魅力を見つけ、自地域肯定感が育まれること期待できないと考える。



II 取組の概要

1 事前学習

「たろう地域の魅力調査コース」として、7コース（水産、海、山、道の駅、三陸鉄道、防災、震災復興）を設定し、希望のコースを生徒に選択させた。

フィールドワークが充実するよう、選んだコースに設定されている事業所や産業等について、調査方法を学習し、事前に情報収集等を実施した。

また、情報を分析しながら、現状やその課題等をみつけながら、ワークシートの作成や質問事項をまとめるなどグループ単位でフィールドワークにあたっての事前学習を行った。



【三陸鉄道株式会社 訪問グループ】

2 フィールドワーク

選択した各コースに生徒が実際に足を運び、地域の方々や事業所の担当者から生の声を体感的に聞き取るなかで地域の多様な資源を知り、魅力を知ることができるよう7コースを設定し計画した。

新型コロナウイルス感染症の影響で訪問事業所の調整に困難さもあったが、宮古市田老総合事務所、漁協、各事業所、農園、NPO法人みやこベース等、関係の皆様の協力に感謝したい。

公共交通機関の利便性が低い地域事情から、借り上げバスを学校発着、各コース巡回運行とした。

事前のアンケートでは、大半の生徒は、「地元

3 身につけさせたい力

生徒が自ら行動し、その場に出向き、関係者と直接話したり、質問したりすることで、「能動的に深く知ること」ができる。このことは、生徒の行動変容や意識変革にもつながると考える。新しい発見が次の学びへの動機づけとなり、課題の発見や問題意識へも発展する。

また、知識や技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度を養うことも期待できる。

柔軟な思考力を持ち、生涯に亘って学び続ける力、柔軟な発想力などの力を持った人材は、生徒からみて受動的な教育の場では育成することは難しい。

今後は、生徒が主体的に地域の魅力を体感しながら、地域肯定感を高め、地域の課題を発見し、解決策を見出していき、能動的な学びの場へと発展させたい。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 取組の成果

本事業「たろう魅力発信プロジェクト」の目的は、活動を通して、①生徒一人ひとりの主体性の向上を図ること、②生徒個々が自分らしさを発見すること、③自地域肯定感を高めることである。

そのため、活動の成果を発表する機会を多く設定し、他学年の生徒や保護者の方々に対して発表した。



生徒が人前で話すことに慣れ、自信をつけ、やがてプレゼン力を高めさせたいと意図して、全校集会である「宮北の森」や「宮北祭」等で発表する場面を設けた。

発表の場を設けることによって、生徒が他のグループの発表を聴き、体験や情報を共有することができ、また、生徒間での学び合いのよい機会にもなった。

生徒の感想では、「地元についてあまり知らなかったのですが、今回の活動を通して深く知ることができた。」「事業所の方に丁寧に説明をしてもらいもっと知りたくなった。」「自分で考え行動する、伝える、課題について主体的に取り組むことなど、たくさんの力が身についた。」など、

前向きな感想が多かった。これらのことから当初の目的は達成できたと思われる。

2 課題

(1) 3カ年を通した取組

来年度は、今年度の反省を踏まえ、様々な事業を活用し、1学年から3学年通した計画を立案したい。

本校の教育目標である、「課題を解決する」、「発信力を高める」、「将来をデザインする」を踏まえながら、探究心・向上心旺盛で、周囲の人と協力し、課題解決に向け頑張り続けることができる生徒、また、将来をデザインし自ら進路実現できる生徒の育成に努力したい。

(2) 次代の地域社会を担う人材育成

生徒が、地域の自然や産業を知る経験は想像以上に乏しい。農林水産業をはじめ、地域に根ざした産業や地域の魅力を知ることが、同時に生徒が自分らしさを発見し、能力を開花させ、その力を伸張させることにもつながる可能性がある。

既に日本の多くの地域が、これまで人類が経験したことのない超高齢社会に突入し、生徒が生きる時代は、急激な人口減少、少子化などの困難な問題が山積する。勇猛果敢に挑戦し続け、たくましく未来を生き抜く力を持った人材の育成を目指したい。



「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：岩手県立宮古商工高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 津波防災啓発活動について

復興庁より平成31年2月「新しい東北」復興・創生顕彰を受賞し、地域の防災意識の高揚に努めるとともに、平成27年「第17回水大賞」の名誉総裁秋篠宮殿下より「災害の記憶の風化や、津波防災危機意識の啓発を伝えることが重要である。」とのお言葉をいただき、継続した活動を行ってきた。

本年度は、疑似津波実演会を計8回実施した。その内訳全てが小学校での実演会である。県内外や学校行事等のイベント全てが中止となり、大幅に実演回数が減った。このような状況の中、200回目の疑似津波実演会を1月22日に実施することができた。

表 - 1 実演回数

年度	小学校	中学校	高校	大学	イベント				合計	震災前・後
					市内	県内	県外	他		
17年						1			1	60
18年	1					4	2		7	
19年	2				3	4	2		11	
20年	3	1			3	1		2	10	
21年	5	1			4	2		2	14	
22年	8	1			4	2		2	17	
23年			3					1	4	140
24年	5	1	1	4	2		1	3	16	
25年	5	2	3		3	2	1	1	17	
26年	5		1		5	1	5	1	18	
27年	5		3	2	5			2	17	
28年	6		4	3	1	1	1	1	17	
29年	7		1	1	4	1			16	
30年	5		1		6			1	13	
1年	7								7	
2年	8				5			2	15	
合計	72	5	17	10	45	19	12	20	200	200
		104				96		200		

2 南海トラフ模型の製作について

平成28年から南海トラフ模型を製作している。250,000分の1の模型は、宮崎県日向灘沖から茨城県鹿島灘の約1,000km間で、南海トラフと相模トラフを再現した長さ4m15cm×幅1m80cm×高さ18cmの大型の模型である。

本年は、九州地方の地上0mから作業を開始した。標高100mの地図をベニヤに貼り付け、接着剤の水分が抜けてからベニヤを切断し、バリ取り作業後に0mの上に取り付けた。200mも同様に作業を行った。その後、紙粘土で段差を埋めて十分に乾かしてから、緑色の用紙に地図を印刷して貼り付け、ポリエステル樹脂を塗り、600m、1,000mと作業を進めていった。山が高くなるに

つれ、連なったところが分岐し、作業が困難になることも多く、時間を要しながら作業を進めている。九州地区の1,000m以上と離島を除けば90%前後のできあがりになった。

II 取組の概要

1 津波防災啓発活動について

(1) 宮古小学校7年振りの疑似津波実演会



図1 宮古小学校での疑似津波実演

平成25年7月に疑似津波実演会が体育館で行われて以来、令和2年7月に7年振り2度目の実演会を宮古小学校で行った。校舎が改修中のため体育館は使用できず、疑似津波実演の会場は児童昇降口、パネル展示とプレゼンテーションは音楽室で行うことになった。疑似津波実演の会場が屋外となったが、工事関係者のご協力をいただいて、静かな環境で実演を行うことができた。また、パネル展示とプレゼンテーションで使用した音楽室は、入口が狭くて角張ったところが多く、階段も通らなければならない



図2 音楽室でのパネル展示とプレゼン

ため搬入に苦労した。機材を持つての移動は緊張も伴ったが、機材の破損やケガ等もなく無事に搬入・搬出することができた。

(2) 山田小学校統合後、初の疑似津波実演会

統合して初めての疑似津波実演会は、5・6年生の児童46名が参加して、9月に行われた。内容は、プレゼンテーションとパネル紹介、疑似津波実演の3部構成である。9年前の東日本大震災の記憶がほとんどない子供たちに大津波を知ってもらうことで、津波についての意識を高めることができた。山田小学校の学区は、南北6km（直線にして）、対岸の大



図3 山田小学校統合後、初の実演会

浦まで6km（直線にして）であり、山田湾周辺一帯の旧大沢・山田北・山田南・織笠・轟木・大浦の6校分となる。広大な学区となった山田小学校の旧学区の境は、山が海まで迫っている地形も多い。

(3) 実演回数200回の達成

令和3年1月に鉾ヶ崎小学校で疑似津波実演会を行い、実演回数が200回となった。平成17年4月津波模型班が活動を開始し、宮古市内の小中学校を軸に実演活動を行い、岩手県内外のイベントにも積極的に参加し活動の場を広げてきた。震災前年には「ぼうさい甲子園」の高校の部で大賞を受賞し、マスコミで報道されたこともあり、釜石東中学校など



図4 200回目となる鉾ヶ崎小学校での実演会

初めて実演会の依頼をいただいた学校も多かった。震災前には、小中学校15校で2回の実演会を実施することができた。

平成23年3月、過去最大の地震と津波が、未曾有の被害を東北太平洋側に与えたが、実演会を実施した全ての学校において管理下であったものの、人的被害はなかった。その後の9年間に、須崎市（高知県）や岡山市、徳島市、阿南市（徳島県）、神戸市（兵庫県）、



図5 関西方面での実演会（平成26年徳島防災センター）

高槻市（大阪府）など県内外において、津波防災の啓発活動に専念し、多くの方々に津波の恐ろしさと避難の重要性、命の尊さを伝えてきた。平成25年度の「防災功労者内閣総理大臣表彰」や平成27年度の「第17回日本水大賞」など、33回の表彰を受け、全国の防災関係者からも高い評価をいただいている。

2 南海トラフ津波模型の製作について

令和元年度から引き継ぎ、今年度は九州地方の0mから100mまでの作業から開始した。当初、生徒は作業内容を理解することや模型製作に慣れるまで時間を要したが、1段目の100mまでと次の200mまでを時間をかけながら作業を行うことで、徐々に作業内容や作業の過程を理解した。作業内容は、1段目（100m以下）はベニヤ板に地図を貼り付け、接着部分が完全に

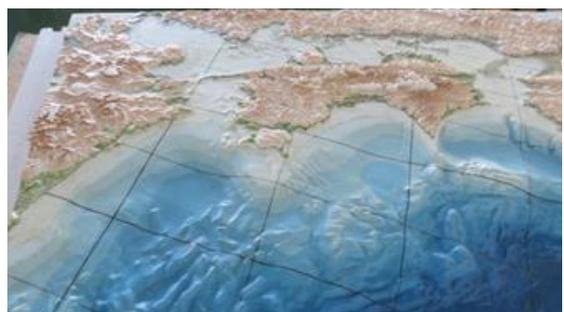


図6 九州・中国地方の製作中の様子

乾いてからトリマーで切断、切断部分にはトリマーの先端が回転して切断するためベニヤ板にバリが残る。それをヤスリで丁寧に取り去る。切り取った部品を所定位置に取り付ける。この作業の繰り返しで、1段目をステンレスの釘で固定し、その後に2段目（200 m以下）の板を固定する。重ねたベニヤは段差が生じているので紙粘土を埋め込み、なめらか傾斜にして何度も繰り返しながら、自然の地形に形を整えていく作業で特に難しい。200 m以下を緑色とし海辺との境界や居住区域としている。紙粘土で白くなっているところに緑の地図が貼り付けられる。紙粘土や接着剤の水分が無くなってからポリエ



図7 製作中の九州地方の模型

ステル樹脂を塗り次の作業に備える。200 mから600 mまでは200 m毎に400 mと600 mを先ほどの要領製作を終えてペンキで着色する。同様に600 mから1,000 mまで作業を行う。中国地方は現在1,000 mまで進んでいる。紀伊半島と四国地方は、頂上部と麓に若干の未施工箇所がある。現在は、中国地方の内陸部1,000 m以上の作業を進めている。高山は少ないが誤断したところが多数あり、修正をしながら作業を進めている。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 津波防災啓発活動について

令和2年度はコロナ一色の1年間、年度当初から予定がたたない日が続いた。予定では夏休み明けから要望を取り実演計画を立てようとしていたところに、6月早々実演依頼が来た。政府の千島・日本海溝地震が発表されて間もない時期であった。そのため急遽、実演会希望調査を行い8校の依頼を受けた。昨年より1校増で過去最大の8校通算2回目である。小学校では、宮古小学校で7年ぶりに実演会を開催することができた。山田小学校では統合後初めての開催となった。6校がひとつになり学区も一気に6倍に広がった。旧学区を見ると海まで山が連な

っているのが分かる。学区が広がり、情報の収集や安否確認、物資の搬送などにも大きな妨げが生じる可能性が高いように思われる。地域の災害の特性を交えた形で実演会を開催すること

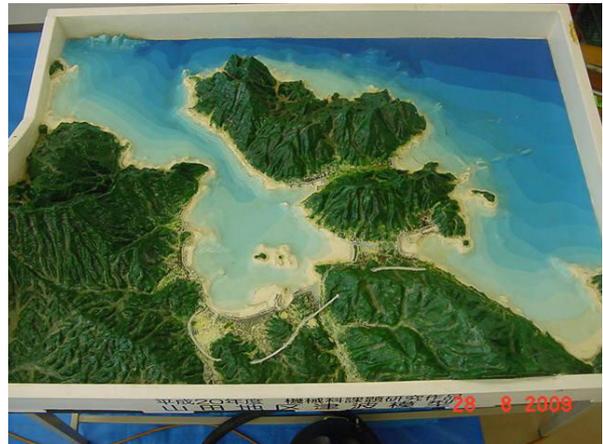


図8 平成20年度に製作した山田湾周辺模型

により子供たちが興味を示す可能性が高い。お年寄りから子供まで、避難の重要性や安全な避難行動を学ぶためにも実演会の機会を多くし、学びの場と活用できる手段について検討しなければならない。

また、行政が行う避難訓練は、地震発生後、津波警報発令、避難までの訓練は年一回行っている。自宅から避難場所や避難所まで安全に避難できるか、道のりは安全か、二次災害の危険性はないか、避難場所や避難所の置かれている地域の特性を自分の目で確認し、「ハザードマップ製作のすすめ」について疑似津波実演を体験した後に語りたと思う。

2 南海トラフ模型の製作について

超大型で縮尺比の大きい模型であり、作業が細かく大変である。特に、中国地方の内陸部や九州地方の東部付近は、低い山並みが多く、作業がはかどらないところが多い。慌てず急がずに正確に作業を進めることにより安全な作業も確保できる。来年の8月で作業開始から5年目となる。完成まで、多種多様な作業があるが、全国に披露できるような完成度の高い仕上がりを目指して作業を進めていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：岩手県立岩泉高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 岩泉町

耕地面積は少なく、林野率が高い。小本川、安家川、撰待川の流域に沿って集落を形成している。東日本大震災津波による小本地区の復興半ば、2016年台風10号（以下、台風10号）豪雨災害で町の多くが被災。また、2019年発災の台風19号でも小本地区を中心に被災した。

～ 参考値 ～

東西 51km 南北 41km（盛岡駅－北上駅間約 46km）
人口 8,870人 4,380世帯（R2.12.31現在）

2 岩泉高等学校

地域の青少年教育の必要性が高まる中、凶事・凶作の解決のために町立農業学校として1943年に設置された。現在は県立の普通科高校、岩泉・田野畑地域唯一の高校として、2013年に創立70周年を迎え、今年度は146名の生徒が在籍している。

3 復興教育について

地域の特質や課題を踏まえつつ、年間を通して継続的に防災・復興教育に取り組み、これまで発生した災害と、今後起こり得る災害について学ぶ。

また、これからの地域の復興に向けて、自身の将来と地域の現状を関連づけて考察することをおして、郷土を愛し、その復興・発展を支える意欲を涵養する。

II 取組の概要

1 避難訓練について

主体的に適切で迅速な行動選択ができる力を育成する事を目的として実施した。

(1) 火災を想定した避難訓練（5月25日）

事前に生徒に対して出火場所や避難場所を連絡しない形で実施したことにより、生徒自身が主体的に考え行動する姿勢が見られた。

(2) 地震を想定した避難訓練（11月10日）

エリアメールのアラーム音を活用したため、より緊張感のある訓練となった。



〈地震を想定した避難訓練の様子〉

2 復興教育

(1) 事前ガイダンス（10月16日）

- ア 1学年：東日本大震災津波伝承館を訪問する上で、東日本大震災や陸前高田市に関わる事前学習を行った。
- イ 2学年：インターンシップに臨む上での心構えや礼儀等のガイダンスを行った。
- ウ 3学年：産学官の連携として、岩泉町の復興について産業視点（岩泉乳業）、官視点（岩泉町役場）のそれぞれの立場から復興に関する講話を頂戴する上で、平成28年台風10号災害について振り返りを行った。

(2) 当日

ア 1学年（10月27日）

東日本大震災津波伝承館を訪問し、職員の方から様々な解説を聞くことで、被害状況や復興の現状を知ることができた。



〈1学年 東日本大震災津波伝承館〉

イ 2学年（10月27～29日）

岩泉町、田野畑村併せて30の事業所でインターンシップを行った。インターンシップを通して、就労に対する意欲を高めるとともに、地元企業の状況をより深く理解する契機となった。



〈2学年 インターンシップの様子〉

ウ 3学年（10月27日）

平成28年台風10号災害からの復興について、午前中は岩泉町の危機管理監から、午後は岩泉ホールディングス社長から、それぞれ講話を頂いた。立場の異なる視点から復興を考えることで、防災や復興に対する意識をより深めることができた。



〈3学年 岩泉ホールディングスでの講演〉

3 ジオパーク講演会

岩泉におけるジオパークの基礎知識を学ぶとともに、岩泉町の地形の成り立ちを知ることが目的として実施した。講師には以前本校での勤務経験のある柳澤忠昭氏を招聘し、地球誕生からの歴史を始め、岩泉町の地形や地質に関する講話を頂戴した。地形の成り立ちやその歴史を知ることによって、より一層防災への意識を高めることができた。



〈ジオパーク講演会の様子〉

4 救命救急講習

(1) 教職員対象（11月16日）

生徒への講習に先んじて、教職員を対象としたAEDの使用法や心肺蘇生法の講習を行った。



〈教職員対象の救命救急講習の様子〉

(2) 1,2年生対象（2月19日予定）

岩泉消防署職員と連携し、AEDの使用法や、心肺蘇生法についての講習会を行った。

5 復興教育を終えて（1年生の感想）

(1) 「いきる」「かかわる」「そなえる」について

私は、「そなえる」という教育的価値を重視します。災害に備えて準備をしていれば、自分だけではなく、大切な人の命を守ることできるからです。

(2) これからに活かすために

今回の復興教育を通して、地震や津波の恐ろしさを改めて感じました。災害が起こったときには正しい情報を得て冷静に行動することが大切であることを学びました。そして、家族や地域間で防災への意識を高めていくことが重要だと思いました。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

各種の取組を通して、これからの復興に向けて、自身の将来と地域の現状を関連づけて考察することで、郷土を愛し発展に向けて貢献しようとする意欲は向上したものと考えられる。

2 課題

地域の復興において、郷土への愛着は必要であると考えられる。しかし、そのことが若者を地域に縛りつけてしまうという懸念もある。生け簀より大きな魚は育たない事からもいえるように、今後も復興教育を通して様々な刺激を与えることで、大きな目標を持たせ、若者が大きく羽ばたく契機としていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：岩手県立久慈東高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災において、本校では平成23年3月11日に帰宅困難生徒13名が学校に宿泊し、3月12日には格技場に約70名の市民が避難してきた。また平成28年8月の台風10号や令和元年10月の台風19号により多数の生徒が被災したとともに、生徒や職員が居住する久慈市や岩泉町で甚大な被害が生じた。

このような状況から、災害発生時に自分の身を守ることに加え、地域の一住民として高校生ができる支援について考えさせたい。平成28年以降も大雨の際に河川の水位上昇が発生していることから、地域連携型指定校として近隣小中学校や地域住民と協働しながら防災意識を高め、実践的な防災行動をとるための共通理解を図ることを目標としている。

本校の環境緑化系列2年生および3年生は久慈市もぐらんど水族館内「防災展示室あーすぴあ」、宮古市役所内「宮古市市民交流センター防災プラザ イーストピアみやこ」、陸前高田市「東日本大震災津波伝承館」にて見学研修を実施し、震災当時から現在までの取り組みを学習した。また、被災時における非常食として用いられることが多い「アルファ米」と「5年保存水」を用いた防災学習を実施した。

II 取組の概要**1 地域連携に係る取り組み**

地域の防災力の向上を図るため隣接する久慈小学校、久慈中学校に呼びかけ、地域防災推進委員会を開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染症防止の観点から今年度は開催を見送った。

2 非常食を用いた防災学習

防災教育の事前学習として、本校近辺を中心とした久慈市内または各生徒の自宅近辺のハザードマップや、指定避難場所を確認した。

さらに非常食として利用されることが多い「アルファ米」と「5年保存水」、「長期保存缶詰」を用いた学習では、実際に生徒が実物に触れて防災学習を実施した。生徒を2班に分け、一方の班に取り扱いについて授業を行い、その生徒が教育係となり、もう一方の班員は初めてアルファ米を取り扱う避難者という設定で調理方法

を伝える形式で行った。調理の際には、各生徒に1食ずつを配付し2人1組となり、冷水と熱湯のそれぞれで調理・試食を行った。（写真1および2）



【写真1 アルファ米の取り扱い方法について説明を受ける本校生徒】



【写真2 アルファ米を調理する生徒】

3 久慈市・宮古市・陸前高田市における見学研修**(1) 宮古市市民交流センター防災プラザ**

2020年8月24日（月）に宮古市市民交流センター 防災プラザにて本校環境系列生徒2・3年生51名が東日本大震災当時の宮古市の様子や、復興までの歩みについて見学研修を実施した。

(2) 久慈市もぐらんど水族館内「防災展示室あーすぴあ」

2020年10月29日（木）に久慈市水族館もぐらんど水族館内にある「防災展示室あーすぴあ」にて本校環境系列生徒2年生27名が久慈市における東日本大震災の被災状況やこれまでの復興の歩みを学んだ。

(3) 陸前高田市「東日本大震災津波伝承館」

陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館（いわてTSUNAMIメモリアル）」において、本校環境緑化系列2年生27名が見学研修を行った。現地では施設職員のガイドによる説明を聞きながらの研修となった（写真3）。

本大震災当時小学生であり、事前学習で記憶が曖昧になっていたことが判明したため、

当日は各自が質問事項を持ち寄り、案内をして頂いた後でガイドの方に直接尋ねた。見学研修後の事後学習でこれまで学んだ内容をまとめ（写真4）、2020年11月26日（木）に久慈市のアンバーホールを会場に行われた「学習成果発表会」にて本校の全校生徒を対象に発信した。



【写真3 東日本大震災津波伝承館（いわてTSU NAM Iメモリアル）での見学研修の様子】



【写真4 学習内容のまとめを行っている様子】

Ⅲ 取組の成果と課題

1 地域連携に係る取り組み

地域連携型指定校としての指定は外れたが、久慈小学校、久慈中学校と継続して連携を行っている。しかしながら今年度は新型コロナウイルス感染症予防の観点から、例年行っていた久慈小学校、久慈中学校との連携事業の実施を見送ることとした。各校で機器や設備が整っていれば、連携事業の一部はオンラインで実施可能である。互いに負担が少ない形で連携を継続していくことが、連携の質を高めるためにも必要であると考えた。

今年度の久慈市においては昨年度の10月に上陸した台風19号のように目立った災害はなかったが、八幡平市において7月に大雨が発生したことから、被害が発生する可能性と常に隣り合わせであるといえる。本校での避難訓練の取り組みは地震と火災を想定した内容になっているが、今年度の避難訓練における久慈市広域連合消防本部長の講評では、本校の立地条件から、

津波被害に対しては安全な高台にあること、それに対して校舎の裏が斜面になっていることから大雨による地滑り、土砂崩れの恐れがあることを指摘して頂いた。現状に即した内容として、大雨による浸水と土砂崩れを想定した避難場所の選定、避難後の保護者連絡や引き渡しを想定した内容を取り入れていくことも必要である。

2 非常食を用いた防災学習

実物を用いて取り扱い方法をペアとなった生徒同士で教え合ったことで、興味関心を引き出すだけでは無く知識と技術の定着に至る学習となった。実際の災害現場、避難所において初めて非常食に触れる人に対して調理方法や食べ方を教えられるようになり、適切な行動を取れる生徒となることが期待される。試食した生徒からは「非常食なのに十分おいしいです。」と評判は上々だった。

3 久慈市・宮古市・陸前高田市における見学研修

今年度は久慈市、宮古市、陸前高田市で学習したため、岩手県沿岸部の北部から中部、南部の各地における被災状況の比較をすることができた。この学習を通して久慈市を中心に生活する本校生徒たちは、久慈市も被災地ではあるが久慈近郊の地域では被害が少なかったことを再認識し、その上で自分が何をすべきか、出来るのかという点についても考える貴重な体験となった。生徒からは「震災前後で大きく景色が変わっている様子を見て、もしも自分の生活する地域がこうなっていたら立ち直ることができる気がしないです。」という声があり、震災から10年が経過しようという現在も心に負った傷が癒えていない人は多いのではないかと考える生徒が多数だった。

活動内容を発信する貴重な場である学習成果発表会は例年と異なり、感染症予防の観点から本校職員生徒のみを対象として規模を縮小した上で実施した。安全面に配慮しながら広く学習内容を伝えていく方法を検討する必要がある。



【写真5 生徒同士の座席で間隔を開けた上で学習成果発表会を行っている様子】

「いわての復興教育推進事業（交流学習スクール）」成果報告書

学校名：大槌町立吉里吉里小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本事業は、紫波町立片寄小学校、紫波町立上平沢小学校と本校との3校連携による「ふるさと交流」を基盤とした、今年で36回目となるはずの活動であった。

しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、子ども達の直接の交流は全て中止とした。

例年

【前期】大槌町吉里吉里海岸での交流遊び・バーベキュー

【後期】紫波町での体験学習（そば打ち・稲刈り・競輪場での自転車）・ラフランス温泉館での交流

…等々の活動が行われており、子ども達も楽しみにしていたのであるが、コロナ禍での苦渋の決断となった。

ただ、直接の交流はできなくても、別の方法で親交を深められないかと子ども達と模索し、今年度は「ビデオレター」を作成して、海や自然について学んだことを紫波町の皆さんに伝えることにした。

II 取組の概要

1 交流方法について

- ・ビデオレター作成

2 ビデオレターの内容について

(1) ふるさと科の学習から

ア 単元名

「吉里吉里の海を守ろう」

イ 学習内容

- ・吉里吉里の海に生息する生き物
- ・環境の変化（震災前後）
- ・磯焼け（現状で抱える問題点）
- ・環境保全と改善に向けて（アマモの栽培、移植）

ウ まとめ方

- ・個々で課題設定し、調べ学習したことをリーフレットにまとめて、交流

(2) 宿泊研修から

ア 研修場所

- ・岩手県立陸中海岸青少年の家（陸中マリナランド）

イ 研修内容

- ・鯨山登山
- ・火起こし体験
- ・キャンプファイヤー
- ・工作（焼き板・万華鏡）
- ・野外炊事等

ウ まとめ方

- ・海を含む自然環境と人間の生活についての学び・感想等を個人新聞に表し交流

(3) 運動会から

ア 種目

- ・全校表現「吉里吉里大漁絵巻」

イ 内容

- ・吉里吉里に昔から伝わる歌「御祝」を地域の方々から教えていただく。船の櫂を使ってリズムをとりながら歌い、そこに「ソーラン節」を組み合わせた表現を創作し、運動会で披露。

…（1）～（3）について内容をまとめ、紫波町の2校の皆さんに吉里吉里について伝え、交流するためのビデオレターを作成。志和公民館も含めた3施設に送付し、今年度の交流を図った。

III 取組の成果と課題

1 成果

- ① ビデオレターの取組により、ふるさと科や宿泊研修、運動会の全校表現について、意味や意義を再確認することができ、復興教育について、内容をより深めることができた。
- ② 児童が学んだことを同じ小学生に伝えるという機会をもつことで、相手意識をもってビデオ作成に取り組み交流することができた。

2 課題

- ① 新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着くのを待ち、1回だけでも直接交流の機会をもちたかったが、できなかった。
- ② ぜひ来年度、それぞれの学校の5・6年生同士で交流したいが、人数が2倍になることと、新しい生活様式を取り入れながらの交流となるため、交流の仕方を工夫していく必要がある。
- ③ 上平沢小学校は、志和公民館以外の管轄の小学校と合併するようだが、今後この交流活動をどのように推進するか考えなければならない

I 事業の概要（地域の実情含む）

—震災講話—

宮古市立田老第一中学校は、岩手県宮古市北部、三陸海岸中央に位置する生徒数62名、)の小規模校である。学区である田老地区は、過去何度も津波による大きな被害に遭い、そのたびにまちの再建を遂げてきた。この苦難の連続を乗り越えてきたまちの歴史を背景に、地域の人々の本校生徒に託す願いが、校歌3番に次のように込められている。

ぼうろうてい
防浪提を仰ぎ見よ 試練の津波幾たびぞ
乗り越えたてし 我が郷土
父祖の偉業や あと継がん

この校歌の歌詞に象徴されているように、本校では東日本大震災の発災前から防災教育に力を入れるとともに、故郷の発展に貢献する人材育成に強い使命感を持って取り組んできた。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災以降、岩手県教育委員会では「いわての復興教育」を推進し、すべての学校において岩手の復興・発展に貢献する人材の育成に取り組んでいる。

本校においても、東日本大震災以前から大切にしてきた命を守る教育をさらに充実させるとともに、故郷の発展を願い、故郷の未来を思い描く取組を進めてきた。東日本大震災から10年が経過しようとしている。現在の中学生は発災時には就学前の世代であり、当時の記憶も希薄である。今後はさらに震災を知らない世代が増えることから、本校における復興教育の進め方についても見直す時期になっている。本校の実践は、震災以降、本校において積み重ねてきた実践を振り返りながら、その成果と課題を整理し、命を守る教育や故郷を愛する心を育む教育の今後の在り方を探ってきた。

II 取組の概要

(1) 震災講話

本校では毎年5月に、新入生を対象に東日本大震災時にも勤務していた本校用務員から、当時の状況について話を聞く会を開いている。津波襲来時の緊迫した状況、不自由な避難所生活、当時の中学生のボランティア活動の様子を知ること、今後の震災学習のスタートとしている。



用務員からの話を受けて、校長先生から3年間の震災学習の流れと意義について話を聞く

(2) 田老を語り伝える会

2学年では、震災について学ぶ活動を通し、自分が感じたり学んだりしたことを他校の中学生に語り伝える活動に取り組んでいる。

今年度は、新型コロナウイルスの影響で実施できなかったが、毎年7月に宿泊研修で本校を訪問する学校と交流するほか、9月には震災後に岩手県中学校長会の取組で始められた盛岡市内5つの中学校との交流事業（横軸連携）により、毎年連携校のうち1校を訪問し、「田老を語り伝える会」を開催する機会を得ている。今年度は盛岡市立米内中学校を訪問し、伝える会の他にも、避難所運営ゲームと一緒に取り組み、和気藹々とした雰囲気の中にも、日常の有難さや命の重みを改めて認識する機会となり、双方にとって充実した交流とすることができた。

「田老を語り伝える会」（米内中学校との交流）



3学年は近年、4月の修学旅行において隔年で東京都内か鎌倉市内の中学校との交流を続け、その中で「田老を語り伝える会」を開催している。

この2校との交流が始まった経緯は、平成25年に東京都内のホテルを会場に「田老を語り伝える会」を初めて開催した際に本校の呼びかけに応じて参加した学校がこの2校であったからである。今年度は新型コロナウイルスの影響で断念したが、来年度以降は再開する予定である。

「田老を語り伝える会」(H31 東京都内の中学校との交流)



3年修学旅行(4月)
桐朋中学校との交流

(3) 文化祭での生徒会企画劇の発表

以前から本校では、多くの学校で取り組んでいるように、生徒会による創作劇に取り組んできた。津波による被害をテーマに取り組むようになったのは、平成18年度の文化祭からである。その時には、昭和の大津波に襲われた当時の田老のまぢや人々の苦難の様子が描かれた。以降、当時の村長の偉業や人々が苦難を乗り越え復興を遂げてきた様子を生徒が文献で調べたり地域の人々から聞き取ったりした内容をもとに脚本化し、演じてきた。

令和2年度の文化祭では、「軌跡～未来とつなぐ9年間～」と題し、東日本大震災後から現代までの様子を生徒目線で演じた劇を披露した。

R2 生徒会企画劇

「軌跡～未来とつなぐ9年間～」より



生徒が主体的に調べ学んだことをもとに劇を作ってきたが、毎回大切にしてきたものがある。それは、暗い過去だけに目を向けるのではなく、ふるさと田老の明るい未来を描く視点である。劇の最後は、明るい希望の光と復興を担う決意を表す形で幕を閉じている。また、この企画劇は、毎年、生徒と保護者・地域人々が思いを共有する大切な場となっている。

(4) 学校外と連携した地域人材を活用した授業

今年度も、わかめの種を育てることから挑戦した。この取組も、漁協の全面的な支援の下で実施した。わかめの種を学校の水槽で育てるという、成功率が極めて低い試みであったが、失敗を繰り返しながらもなんとか成功にこぎつけた。さらに、学校の水槽で育てたワカメ種苗を実際に海の養殖棚に植えつける作業を体験した。

—養殖棚への種付け作業体験—



このように、本校の教育活動は地域の全面的な支援と協力のもとに成り立っている。また、ワカメ養殖を中心に田老ならではの産業が存在しているおかげで、本校は社会に開かれた教育活動を充実させることが可能となっている。

Ⅲ 取組の成果と課題

東日本大震災以降、学校として積み重ねてきた一連の取組により、生徒は、より現実的に命の重みを考え、防災意識が高いと同時に、郷土への愛着心も強い。令和2年度岩手県学習定着度状況調査質問紙調査(中2対象)においても、「自分の住む地域には良いところがある」に、肯定的に回答した生徒は91%に達しており、郷土に誇りを持つ生徒が多いことが調査結果からも分かる。

一方、課題として、震災当時の記憶がない生徒が大半を占めるようになっており、命の大切さをより自分のこと、より自分のまぢのこととして認識させる工夫が今後さらに必要となってくる。また、夢を持ち故郷の復興・発展を担う人材の育成に尽力しながら、人や時代が変わっても、理念を失うことなく強い使命感を持って今後も継続していかなければならないと考える。

I 事業の概要（地域の実情含む）

山田町は、2011年3月11日に発生した東日本大震災で、中心街を含む海岸部が大きな津波被害を受け、復興に取り組んでいる。あれから約10年が経過する現在は、仮設住宅がほとんどなくなり、復興公営住宅などの建設も進み、復興の途中にある。その一方で、震災の記憶風化を防ぎながら、地域の更なる発展に本校生徒も貢献することが求められている。

本校は、震災以降特に生徒数が減少し、今年度からは1学年1学級の定員となった。また、山田中学校からの入学者が例年85%以上で、子どもの頃からの知り合いに囲まれて生活しており、多様な考えや価値観に出会いにくい状況にある。

このような状況を踏まえ、復興への貢献、学び拡大、コミュニケーション力の伸張等を目標とし本事業を活用することにいった。

II 取組の概要

1 雫石高校との交流

(1) 交流の経緯

本校生徒が雫石町開催の講演会に参加し、雫石町を訪問したドイツ人高校生が、山田町を訪問し震災について学習したり、本校で空手道を体験したりする等の交流が行われてきた。

その交流を発展させ、2018年度より本校の「海の運動会」に雫石高校生が参加し、雫石高校の「雪上運動会」に本校生徒が参加して交流し体験を広げることになった。

(2) 海の運動会

8月26日、早朝より雲一つない快晴のもと、浦の浜海水浴場を舞台に「海の町・山田町にふさわしい海浜環境を活用した運動会を通じて、クラスや学年の連帯を深めるとともに、山田高校の特色ある行事とする。また、雫石高校生との交流を図り、海の魅力を伝えるとともに、防災や環境について学ぶ機会とする。」ことを目的として「第20回海の運動会」が開催された。

本行事は、1995年創立70周年を記念して始まった行事であり、途中2011年3月11日の東日本大震災により一時中断した。その後2017年に復活し、今回でちょうど20回目の開

催となった。

雫石高校との交流事業は、2018年より始まり今回で3回目となった。1年生の20名が参加し、浜辺ならではの各種競技（砂上バレーボール、海上カヌー競漕、ビーチフラッグ等）やクリーン作戦を通して交流を深めることができた。



(3) 生徒の感想

〔雫石高校 1年 佐々木 大喜 さん〕

今回の海の運動会では、とても楽しい時間を過ごすことができました。あまり山田高校さんと触れ合う機会がありませんでしたが、競技をしている時の山田高校さんを見て、「すごいなあ、カッコいいなあ」と思いました。久しぶりの海で自分はとても楽しく、いい思い出ができたと思っています。今度は雫石高校で雪上運動会ができることを願っています。

〔雫石高校 1年 村山 聖 さん〕

天気にもまれて良かったですが、めちゃくちゃ暑くて大変でした。初めてビーチフラッグをやりましたが、砂に足をとられて思うように走れませんでした。めったに海に行くことができないし、砂浜を走ることもできないのでいい経験だと思いました。カヌーも海の方へ行かないと乗ることができず、乗るまでが大変でした。山田の人はみんな運動神経が良くてうらやましいです。本当に今回はたくさんの思い出を作ることができ、いい経験ができたので良かったです。色々準備をしていただきありがとうございました。

〔山田高校 1年 藤田 悠雅 さん〕

全員で楽しむということの面白さ、大切さを学んだ。一人ひとりが楽しむことが、みんなが楽しむことにつながると思う。もちろん競技は頑張ったし、めいっぱい楽しむことができた。来年が楽

しみだし、みんなでできるということがとてもうれしい。

〔山田高校 2年 佐々木 良実 さん〕

海の運動会を通して、私がいいなあと思ったことは、雫石高校の生徒の具合が悪くて休んでいる時、その子にNさんとMさんがジュースを買ってあげたところです。その他にも、具合が悪くなっていた子のそばにいてあげたりしていた人がたくさん見られたのが、すごくいいなと思いました。来年も楽しみです。

〔山田高校 3年 堀合 明香莉 さん〕

高校生活最後の海の運動会では、3年間で一番天気が良く快晴の中でできて、the 海の運動会って感じでとても楽しかったです。コロナ禍で、こうして学校行事ができるというのは大変ありがたく、クラス対抗や個人競技ともに最後まで楽しく絆を深めることができました。山田高校にしかないこの行事は楽しいだけでなく、町のシンボルである山田の海を会場として、町と学校の協力のもとでできているので、こうして3年間できたことがとてもありがたいと思いました。



(4) 雪上運動会

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

2 平館高校との交流

(1) 交流の経緯

本交流は、震災直後の2011年5月、平館高校山岳部の生徒が、テント持参で本校敷地内に宿泊し、町内でボランティア活動を行ったのがきっかけで始まった。翌年からは、県高校校長協会横軸連携事業を経て交流学习スクールへと発展し、今年度が記念すべき10回目の交流となった。

交流内容も多岐にわたり、平館高校家庭クラブの生徒が来町し、山田町の商店街の「いちび」で、八幡平市の特産品販売、子どもやお年寄りとの交流を実施することもあった。

昨年度より、交流の形態を変え、お互いの学習成果の共有、発表技術やコミュニケーション力を育成するとともに、お互いの町の特徴を理解することを通し、それぞれの価値を共有し、また新たな価値を生み出すことに重きを置く交流となった。

(2) 調理活動

山田町は、江戸時代にオランダ船が嵐を避けるために寄港した歴史があり、また東京オリンピックのホストタウンとして、オランダ料理の普及に努めている。

そこで、外部講師を招聘して指導を受け、山田町の食材を使用したオランダ料理（ビスパネチェ、オムレツ等）を調理し、昼食会を開き交流した。平館高校からは家庭クラブ委員8名が、本校からは家庭クラブ委員及び3年フードデザイン選択生の8名、合計16名が各調理台に2名ずつを配して交流を行った。

(3) 生徒会交流

両校の生徒会執行部一人ひとりによる自己紹介を皮切りに生徒会交流が始まった。その後、各校20分の持ち時間で、パワーポイントや模造紙を活用し、生まれ育った地域のすばらしさ、学校紹介や生徒会執行部の取組状況を発表した。

休憩を挟み、フリートークにより、小規模校だからこそ抱えている課題として部活動の活性化を挙げて意見交換を行った。



(4) 交流行事

ア 平館高校家庭クラブ

「エコ活、はじめの一步！～ならではのマイバッグへ続く道～」発表

同校家庭クラブは、エコバッグ作りを通してプラスチックごみの削減に関する研究活動を進めてきた。使いやすさや地元らしさを工夫し試作を重ねながら、環境問題を自分ごととして捉え理解を深めている。

家庭クラブは、7月からのレジ袋有料化を

受け、海洋汚染につながるプラスチックごみの削減をテーマに、校外で研究を展開している。

また、研究や継承に取り組む草木染「紫根染」や、八幡平市の地熱蒸気染めをベルトなどに用いて地元らしさも取り入れているという。



イ 山田高校1年生

復興・防災学習「碑の記憶」発表

災害の歴史は、数十年おきに繰り返されている。過去の教訓はなぜ活かされなかったのか、この疑問から生まれたのが「碑の記憶」である。先人の想いをつなぐ石碑や明治から昭和初期の岩手日報社の新聞記事を題材として、生徒は研究を重ねてきた。



ウ 山田高校2年生

復興・防災学習「復活の記憶」発表

ふるさととは、どのように復活しつつあり、そしてどのような課題を抱えているのか。これは、多くの新聞記事を通して先人の想いを学んだ生徒たちが気づいた「問い」である。「復活の記憶」では、山田町の軌跡をたどり、水産業や観光資源に目を向けた探究活動を展開している。

(5) 生徒の感想

〔平館高校 2年 伊藤 亜紀 さん〕

今回の交流学習スクールを通して、私は山田高校とのつながりを初めて知りました。また、山田高校の発表を聞いて、研究していることは違っても、地域のためだったり普及活動をしてい

るということから、お互いにつながっていると感じました。調理活動では緊張したけれど、作っていくたびに話もたくさんできて交流を深めることができました。一緒に作っておいしく食べることができて良かったです。発表もミスなくできたので良かったです。

〔平館高校 1年 高橋 愛雄 さん〕

山田高校は津波という問題を考え、平館高校は岩手山の噴火という問題を考えており、どちらも自然災害という共通点がありました。私は、津波の理解はまったくありませんでした。山田高校の発表を聞いて、碑の意味について学ぶことができました。意見交換の時間では、どちらも小規模校という点や服装などの決まりという点など、共通点のある学校同士であると思いました。また、山田高校は海に近いからできる行事があり、楽しそうだなと思いました。



〔山田高校 3年 松崎 寧緒 さん〕

今年は、コロナ禍で大変な状況でしたが、平館高校の皆さんと山田とつながりのあるオランダ料理を一緒に作り交流を深めることができ楽しかったです。また、平館高校の家庭クラブの発表が全国大会に出場していることを知り驚きました。実際に発表を聞いて、エコバッグを作製していることを知りました。現在の日本の問題点を改善させるとともに、平館高校の伝統も取り入れながら作製していて素晴らしいと思いました。

〔山田高校 2年 佐々木 海音 さん〕

交流学習スクールでは、両校の現状をそれぞれが見つめ直し、意見交換をすることができました。また、平館高校の家庭クラブの発表を聞いて、次年度の総合的な探究の時間の発表に生かすことができると感じました。お互いの良いところはどんどん取り入れ、さらにより良い学校を作りあげていきたいです。コロナ禍での交流学習スクールでしたが、今後の生徒会運営をより良くしていくための取り組みでもあり、開催できたことをうれしく思います。これからも

平館高校との交流を続け、お互いの学校を高め合えるような活動をしていきたいです。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 雫石高校との交流

浦の浜海水浴場を舞台に海の町・山田町にふさわしい海浜環境を活かした第20回海の運動会を通じて、クラスや学年の連帯を深めるとともに、山田高校の特色ある行事とすることができた。また、雫石高校との交流事業は、2018年より始まり今回で3回目となった。1年生の20名が参加し、浜辺ならではの各種競技やクリーン作戦を通して交流を深めることができた。救命胴衣の付け方やカヌーの乗り方を説明し、楽しんでもらったことに喜びを感じることができ、地元の海の素晴らしさを再確認した。

しかし、1月に予定されていた雫石高校での「雪上運動会」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となり、両校の交流事業は一方通行となってしまった。

(2) 平館高校との交流

ア 調理活動

本校生徒も山田町とオランダとの関係を再確認し、オリンピックに向けてオランダ料理普及に取り組む意義を理解することができた。また、両校家庭クラブ等の生徒で構成された班ごとの調理活動を行うことにより、初めて会った人同士で協力することにより、コミュニケーション力の伸張を図ることができた。



イ 生徒会交流

両校の学校紹介や生徒会執行部の取組状況をプレゼンテーションするとともに、それぞれが抱えている課題を提示し、解決策を練るなど有意義な交流となった。また、防災学習の発表では、平館高校は火山の災害防止につ

いて、山田高校は東日本大震災による被災状況や復興について発表した。ともになじみのない自然災害についてとても新鮮さを感じながら、海の価値と山の価値を学び、両校生徒が新たな価値を創り出すことができた。

ウ 交流行事

本校全校生徒が一堂に会し、学習成果を伝え合う交流行事では、平館高校家庭クラブの活動を聞くことにより、長期間に渡って地域貢献していることに本校生徒も刺激を受けた。本校では、1・2年生1班ずつによる総合的な探究の時間で学んだことを、1年生は「碑の記憶」、2年生は「復活の記憶」と題して復興・防災学習の発表を行った。海とあまりなじみのない平館高校の生徒にとっても、東日本大震災津波による被害やその後の復旧・復興の様子を学ぶことができたと思う。

2 課題

(1) 雫石高校との交流

来年度は、「海の運動会」の実施要項を見直し、本校生徒による復興・防災学習についての発表を行うなどを検討しさらに交流を深めたい。

また、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、雫石高校での「雪上運動会」は中止となった。

しかし、オンラインによる交流をすることも一つの手段と考える。交流方法を再考し、両校にとって特色ある行事となるような取組を目指したい。

(2) 平館高校との交流

両校の所在地が離れているため、時間的に制約がある。しかし、平館高校生からも防災学習の発表をいただき、双方向による防災に関わる学び合いができればと考える。

また、平館高校には家政科学科があるので、学科生からの調理や衛生面での指導や支援を行ってもらうこと等を検討したい。



I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は1919（大正8）年宮古尋常高等小学校に高等小学校卒業を入学資格とする町立宮古実業補習学校を認可併置し開校した岩手県立宮古商業高等学校と、1973（昭和48）年に開校した宮古工業高等学校が統合し、令和2年4月に岩手県立宮古商工高等学校として開校した。設置学科は機械システム科、電気システム科、総合ビジネス科、流通ビジネス科、情報ビジネス科の5学科5学級で、それぞれの校舎を利用する県内初の校舎制が採用されている。

宮古市は東日本大震災による甚大な被害を受けながらも、地域防災拠点となる市役所庁舎「イーストピアみやこ」のオープンや、三陸沿岸道路の整備などが進み、震災以前よりも活気と魅力に溢れたまちづくりを目指して現在、歩を進めている。しかし、令和元年に発生した台風19号によって、全線運行を再開した三陸鉄道が再び一部で運行不能の状況を余儀なくされ、また新たな観光及び物流の交流ルートとして期待された「宮古一室蘭フェリー」が休止となるなど、現状は決して易しいものではない。そのような中で本校は、地域に根ざした実業高校として、社会で幅広く活躍する人材の育成を目指し、地域の復興を果たすために産学官と連携した様々な事業に継続して取り組んでいく必要があると考え実践を行った。

II 取組の概要

1 外部講師を招聘しての接客講座

令和2年10月14日（水）5校時「総合的な探究の時間」において株式会社アダストリア北日本支店グループマネージャーの高村暁穂様をお招きし、商業校舎1年生116名を対象とした接客講習講座を開催した。「これからのリアル店舗の価値とは」を演題に、コロナ禍で人との関わりが減少する中、円滑な人間関係の構築に欠かせないコミュニケーションスキルを生徒自身が体験する貴重な機会となった。特に「積極的傾聴」＝アクティブリスニングの重要性に気づき、その後のペアワークでは、「耳・目・心」で相手の話を傾聴する姿勢が見られるなど実践を通じて学びを深めた。ペアワークでは相手に対する反応のないいわゆる「石」の状態と、それ以外のパターンを実施し、生徒に比較させる

ことで、言葉以外の情報を汲み取ることや相手に聞いているというサインを送ること、表情や声のトーンで相手に安心感を持ってもらうことが大切であると学ぶことができた。残念ながら、高校入学後初めての宮商デパートは中止となってしまったが、次年度の開催に向けての心構えや接客の基礎を学ぶことができ、大変有意義な講座となった。



講演の様子

活動（ペアワーク）の様子

2 まちづくり学習会

東日本大震災による深刻な被害を受けた宮古市において、観光交流の活性化のため観光資源の集中する「浄土ヶ浜」地区の保全と整備、体験型観光の推進、観光の振興と施設の利活用促進に向けた取り組みが進められている。さらに平成25年に三陸復興国立公園の指定、三陸ジオパークの認定を受けたことから、地域の観光資源を生かした「観光ビジネス」の必要性が高まっている。昨年度より、宮古市の都市計画審議会会長である岩手県立大学総合政策学部宇佐美誠史准教授と岩手県立大学に通う大学生を招き、震災以降の宮古市の「まちづくり」について学びを深めている。目的は生徒自身のキャリア形成を行う上で地域の学びを深め、宮古地域の将来を創造する人材育成につなげることである。

今年度は地元地域を知り将来の活性化を図るための方策を考えることに主眼を置き、「まちづくり学習会」を実施した。今年度最も苦労した点は新型コロナウイルス感染拡大への対応である。観光分野（浄土ヶ浜やフェリーターミナルの利活用）をテーマにしていたグループでは活動の継続が難しく、テーマの変更を余儀なくされた。また、昨年度同様、現地調査（宮古市内での聞き取り・アンケート）を予定していたが、感染防止対策を考慮し、実施を見送った。学習活動においても、学習形態の規模を縮小など大幅な内容変更を強いられた。その中で、感染拡

大の防止を考慮しながら、実施した学習会の内容について紹介する。

(1) 令和2年度のまちづくり学習会の事業計画・内容

期 日	内 容 等
7月1日	昨年度の振り返り・ポートフォリオ作成
7月15日	中間発表会・研究テーマの再設定 (新型コロナウイルスの拡大により)
9月29日	グループワーク (調べ学習・グループ内での共有)
10月29日	物流に関する講義 講師：公益社団法人岩手県トラック協会 様
11月30日	グループワーク (調査研究)
12月10日	宮古市への移住定住パンフレット作成に向けた説明会 講師：宮古市 企画部 企画課 地域創生推進室 室長 中居裕美 様 宮古市 産業振興部 産業支援センター 商業労政係 主査 佐々木貴子 様 宮古おもてなし検定学習(商業科2・5・6班) グループワーク (調査研究)
2月18日	プレゼン作成・プレゼン準備・発表練習 (中止)
3月20日	イーストピアみやこでの発表会 研究の成果発表会、宮古市への提言等



まちづくり学習会の様子 (グループワーク)



中間発表会資料(ポスター作成) 宮古市役所内
宮古産業支援センター訪問

(2) 令和2年度 各班の研究テーマ

	商 業 科
1 班	末広町商店街の魅力UP ～ゲストハウスがもたらす効果を探る～

2 班	宮古市への移住定住パンフレット作成に向けて
3 班	宮古市魚菜市場の魅力増進 ～付加価値のついたお買い物を目指して～
4 班	宮古市を若者が住み続けられるまちにする 漁業で地域の活性化を図るために ～アカモクを使った商品開発の可能性を探る～
5 班	宮古市への移住定住パンフレット作成に向けて
6 班	宮古市への移住定住パンフレット作成に向けて
7 班	公共交通の利用促進 三陸鉄道の利用者を増やすための取り組み ～新しいイベントと商品開発の開拓を目指して～

流通経済科	
1 班	観光地へ人を呼び込む ～浄土ヶ浜遊覧船の今後の利活用～
2 班	観光地へ人を呼び込む ～宮古の海上をバーチャル配信～
3 班	観光地へ人を呼び込む ～観光地へ人を呼び込むPV作成～
4 班	公共交通の利用促進 ～通勤・通学利用者促進計画～ バス会社のイメージキャラクター作成を通して
5 班	宮古市を若者が住み続けられるまちにする 地域研究を通して宮古市の土地を知る ～他地区との比較による分析を通して～

3 今年度の特徴的な取り組みについて

(1) 第4回まちづくり学習会【物流に関する講義】

令和2年10月29日(木)の3～4校時「マーケティング」と「ビジネス経済」の授業において公益社団法人岩手県トラック協会様のご協力の下、物流に関する講義を実施した。目的は物流業界が震災当時に果たした役割を知ること、就職希望者が多い本校において物流業界に対する理解を深め、進路選択の幅を広げることである。学習会の内容については以下のとおりである。

[学習内容]

内 容	備 考
実車体験	内容：運転席の死角体験と日常点検体験 (大型トラック2台)

講 話	講師：岩手県トラック協会 青年経営研究会 菅谷副会長 様 公益社団法人全日本トラック協会制作 「TRY! TRUCK!! TRANSPORT!!!」に基づき物流業界の説明
DVD放映	公益社団法人全日本トラック協会制作 「災害物流への挑戦 ～岩手県トラック協会の事例」
講 話	講師：岩手県トラック協会佐々木宮古支部長 様 震災時の対応や地元の運送業界の実情について
グループワーク 意見交換	業界に対する理解を深めるためのグループ活動 グループごとに質疑応答等
感想発表	代表生徒2名より
クロージング	アンケート用紙の記入



乗車体験・点検作業の様子



DVD上映

グループワーク

(2) 第6回まちづくり学習会【宮古市への移住定住パンフレット作成に向けた説明会】

宮古市地域創生推進室より、令和3年度実施予定の宮古市への移住定住パンフレット作成について本校へ依頼があり、令和2年12月10日（木）にパンフレット作成に向けた説明会を実施した。講師は宮古市企画部企画課地域創生推進室室長の中居裕美様と宮古市産業振興部産業支援センター商業労政係主査佐々木貴子様のお二人で、講義形式の授業を展開した。まずは、配付資料に基づき宮古市の現状について説明を受けた。その後、今後の宮古市の地方創生と総合戦略について触れ、その中で、地域が抱える課題の一つである人口減少問題を取り上げ、今後も若年層を中心に人口が流出し続けた場合、生産年齢人口の減少による地元地域の衰退が予想されることを皆で共有した。

資料から将来の人口統計の予想推移を知る中で、将来の人口減少率や居住者数に危機感を抱いている様子であった。人口減少に歯止めをかけるために宮古市が進めるUターンやIターンがしやすい環境作りや、関係人口を構築することで現在の居住地と宮古市を行き来しながら地域の企業・プロジェクトの課題解決や新しい展開を実現する遠恋複業課事業といった新規事業についても理解を深めることができた。また、講師とのやりとりの中で、高校生の視点での将来の地域振興について意見を求められる場面も多くあり、将来の「宮古市像」について真剣に考える姿がみられた。

その後、宮古市への理解を深めるために宮古観光文化交流協会が進める宮古もてなし観光・文化検定の学習会を行った。宮古おもてなし検定は宮古の観光・文化・歴史等、地域の魅力を再認識し、郷土愛を育むことを目的としており、今年度で第14回目の試験実施となる。今回は初級である一つ星検定の内容について調べ学習を行い、難易度の高い問題については皆で教え合うなど協力して学習に励む姿がみられた。

継続した学習を通して、地域に対する理解が増すことで、4月からの本格的な移住定住パンフレットの作成に向けて手ごたえを掴んだ様子であった。最後に、パンフレットの作成について高校生が企画する内容についても一部検討していただけることを教えていただき、作成目的に沿った内容の検討を進めていくことを確認した。



宮古市への移住定住パンフレット作成に向けた説明会の様子



説明会資料

おもてなし検定学習会の様子

III 取組の成果と課題

- 1 模擬株式会社「宮商デパート」の取り組み【外部講師を招聘しての接客講座】
生徒からの感想（一部抜粋）

(1) 成果

- ・相手の気持ちに寄り添うということはこれからの学校生活でも大切と学んだので、人と人とのつながりを大切にしていきたい。
- ・いろいろな人と会話をすることで、いろいろな価値観や自分では思いつかない考えなどを見つけることができ、人との気持ちに共感することができると思った。これからもクラスの人や同じ部活動の人だけでなくたくさんの人とコミュニケーションをとって自分を成長させていきたいと思った。

(2) 課題

販売活動はあくまでも切り口であり、他人との関わりが成長へつながることをイメージさせる外部講師の授業がとても参考になったので、今後の授業展開に取り入れたい。引き続き体験学習を行うことで、学習効果が高まるのではないかと感じた。

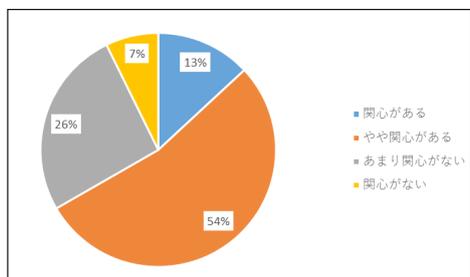
2 「まちづくり学習会」の取り組み

【ポートフォリオ作成・アンケート結果より】

対象：履修クラス 実施日：令和2年7月1日
(2学年:商業科40名 流通経済科28名 計68名)

(1) 成果

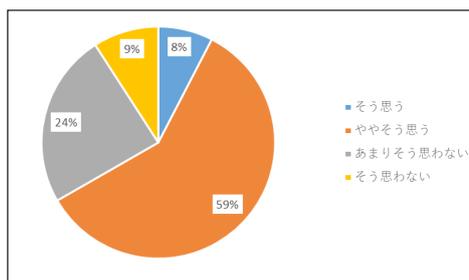
Q1 宮古市のまちづくりに興味があるか？



【興味がある・やや興味がある】→ 67%

1年間の学習会の中で地域の方々と触れ合った経験や各種講義を聞く中で、将来のまちづくりに対する関心・意欲が高まったためと考えられる。

Q2 昨年度のまちづくり学習で宮古市に関する知識が増えたと思いますか？



【そう思う・ややそう思う】→ 67%

1年間の学習会での学びを通じて宮古市に関する知識が増えたと感じる生徒が全体の67%を示した。

学年を追うごとにテーマの絞り込みや研究対象に対する調査研究の深まりがこの結果につながったと思われる。

(2) 課題

まちづくり学習会を継続する中で、地域の産業や観光資源について知る機会が少ないため、地域に対する理解が乏しい印象を受けた。地域が抱える課題を知る上でも地域に対する理解を深める必要があり、「地元学」に代表されるような地元地域を知り、地域とのかかわりを増やす教育機会を1年次から設定する必要があると感じた。この問題を解消するために、今年度初めて「宮古市おもてなし検定」に向けた学習会を導入してみたが、地域の現状や観光資源を学ぶ上で大変有効であると感じた。今後の実施について検討を行いたい。

昨年度末から新型コロナウイルス感染拡大への対応により現地調査など校外での活動が制限されるなど、生徒に身に付けさせたい力をつけさせるための授業展開が難しかったことも課題の一つであった。今後の情勢を考慮しながら、可能な範囲で外部とのかかわりを持ち、生徒自身の成長につながるような発展的な学びに高めたいと考える。

1年次から取り組んできた「まちづくり学習会」は3年次の課題研究(3単位)にて継続実施の予定である。研究活動を3年間継続しまとめと成果発表会を行い、成果や課題を共有することで、地域振興に対する想いを育むことができると考える。将来的に、3年生がまとめた研究成果や課題を下級生が継続して研究することでさらに内容のブラッシュアップも期待できることから、行政や企業からの協力をいただきながら、この事業を継続し、将来のまちづくりに高校生が参画していく仕組みを作りたい。

また、復興教育スクール(交流学習スクール)の事業評価を行う中で、いわての復興教育プログラムにおける3つの教育的価値と具体の21項目を達成できたか測定するための仕組み作りにも取り組んでみたい。継続的な取り組みのもと、生徒自身も成長をより実感できるような評価方法の検討が必要だと考える。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本県の最東端である宮古市と最西端である西和賀町は、地理的環境が大きく異なるため自然災害に対する備えや東日本大震災からの復興に関する視点も大きく異なる。地域の将来の担い手である生徒が地域の防災や振興に参画する際、地理的環境が大きく異なる地域を訪問して実地に見聞、活動した経験は、必ずや役立つものと考えられる。

当事業では、宮古水産高等学校と西和賀高等学校の生徒会執行部が互いに訪問して交流することを通して双方の地域の良さや地元の強み・弱みを知り、学校や将来の地域のリーダーとしての自覚と実践力を涵養することを目的とする。

縮機で脱気、密封する。缶を洗浄して蒸気加圧式の殺菌釜に入れ、115℃で90分間加熱後、殺菌釜に注水して冷却した。作成したラベルを缶に貼付し、オリジナル缶詰の試作品が完成した。



II 取組の概要

1 宮古水産高等学校への訪問（11月25～26日）

(1) オリジナル缶詰の考案と試作

それぞれの地域の特産物であるサバ、ワラビ、ゼンマイを原料とした缶詰を試作した。

ア 名称の考案とラベルの作成

両校の生徒で編成された班ごとにグループ活動を行って缶詰の名称を決定するとともに、その名称をもとに各自がラベルを作成した。



イ 缶詰の試作（食品製造実習）

実習に先立ち、缶詰の製造に関する講義を受けた。サバの頭部、内臓及び血合いを切除し、フィッシュカッターで約32mmに筒切りする。6号缶（直径約75mm×高さ約55mm）に筒切りのサバを入れ、ワラビ、ゼンマイの水煮をトッピングして味噌ダレを注液し、巻

(2) 実習船「海翔」乗船（漁業実習）

本県の主要な漁業の一つであるイカ釣り漁業と船内泊を体験した。

ア イカ釣り漁業実習

実習船「海翔」に乗船して夕方に宮古港を出港し、夜に漁場（宮古沖）に到着した。手釣りによるイカ釣り漁業実習では漁模様が悪く、釣果は得られなかったが、停泊中に仕掛けたカゴ漁ではタコが獲れ、船内で調理して喫食することができた。



イ 船内泊体験

イカ釣り実習の後、船内泊を体験した。船室によってベッドの形状やレイアウトが微妙に異なることに気付き、ベッドメイキングを通して船体の形状や船体における船室の位置を意識することができた。波に揺られながら過ごす一夜は、貴重な経験となった。



(3) いわたの復興教育に関する講話

宮古の被災状況と「いきる・かかわる・そなえる」と題した講話で大震災と阪神・淡路大震災との比較、津波による被災状況（動画・静止画）、津波の科学的理解と避難時の留意点、防災の知識と必需品の備蓄方法などを学ぶとともに、東日本大震災を風化させぬよう語り継ぐことの重要性を再認識した。



電信柱の先端に引っ掛かったキャビネット



(4) 宮古の復興状況と観光資源の見学

宮古水産高等学校のバスに乗車して浄土ヶ浜まで移動しながら、東日本大震災の被災状況の写真と車窓から見える同じ地点の現状とを比較し、宮古の復興状況を見学した。

浄土ヶ浜ビジターセンターの展示を見学するとともに、三陸復興国立公園浄土ヶ浜まで徒歩で移動しながら宮古の観光資源を学んだ。



2 西和賀高等学校への訪問（2月18～19日）

(1) オリジナル缶詰の完成と試食

ア オリジナル缶詰の完成

試作した缶詰にラベルを貼付し、缶詰を完成させた。

イ オリジナル缶詰の試食

完成したオリジナル缶詰を開封し、西和

賀高等学校の生徒による手作りの昼食とともに試食した。互いの地域に伝わるものとは異なる味付けや食べ方に、新たな気付きがあった。



(2) 雪明かり・雪像の制作と点灯

これまでスキー場でしか目にしたことのないような積雪状況に驚きつつも、豪雪が生活に支障を来す一方で活用次第では観光資源にもなり得ること、同じ岩手県内でも地域によって降雪量だけでなく雪質も大きく異なることに気付いた。



しばし雪と戯れた後、雪像や雪明かりを共働で制作し、日没を待った。日没後にローソクを点灯すると、炎がほのかに揺れてとても幻想的な情景となった。



(3) 湯田牛乳公社工場見学

地域の産業の一つである牛乳公社を見学した。同社の製品は、本県や秋田県の学校給食に採用されており、量販店でも販売されている。この見学を通して、生産地が消費地から離れていても確かな品質で需要を大きく伸ばすことができることに気付いた。



(4) クロスカントリースキー体験

ウィンタースポーツの一環としてクロスカントリースキーを体験した。これは大規模なゲレンデやリフトなどがなくても楽しむことができ、世界中でSDGsへの関心が高まる中で今後注目される可能性がある。この体験を通して、地域を活性化するためには地域だけに目を向けるのではなく、世界的な視点を持つことが重要であると気付いた。



(5) 交流学習の振り返り

レストハウス湯ノ沢で昼食を摂りながら、これまでの交流を振り返った。相互訪問で培った学校を超えたつながりが強くなり、双方の地域の良さや地元の強み・弱み、自校の生徒会活動の在り方などを話し合う姿が見受けられた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 東日本大震災からの復興の現状の理解

(1) 被災地域における地理的要因の理解

ア 海に面し海拔高度が低い地域の被害が大きいことを理解できた。

イ 特に川沿いの地域に被害が出ていることが理解できた。

ウ これらのことから、津波から逃れるには水平方向よりも垂直方向に避難する方が有効であることがわかった。

(2) 復興の進捗状況

ア 甚大な被害があったにも関わらず復興が進んでいる地域がある一方で、現在でも被災物が放置されている地域（宮古工業高等学校工業校舎付近など）があるなど、同一市内でも復興の進捗状況に差異があることがわかった。

イ 被災物の放置が所有者の意向なのか所有者不詳であるためなのかは不明であるが、地域全体の復興にとって大きな課題であることがわかった。

ウ 発災から間もなく10年が経過する現在でも、復興に関する大規模工事（閉伊川水門工事など）が行われていることがわかった。

2 地域の復興や町づくりへの参画

(1) 互いの地域を訪問・滞在することによる気付き

ア 沿岸部は水産資源やマリンスポーツをはじめとする観光資源がある一方で、津波や豪雨による災害の危険があることがわかった。

イ 山間部は山菜などの農産資源や林産資源、ウィンタースポーツをはじめとする観光資源がある一方で、豪雪や雪崩による災害の危険があることがわかった。

(2) 町づくりへの参画

一方の地域の食品資源は他方の地域にとって貴重なものであり、一次加工食品を単体で流通させるだけでなく、生産地の異なる素材を組み合わせることによって新たな価値を生み出せることがわかった。

(3) 地域の視点と世界的な視点

地域を活性化するためには地域だけに目を向けるのではなく、世界的な視点を持つことが重要であると気付いた。

3 総合評価

この交流学習を通して、学校や将来の地域のリーダーとしての自覚と実践力を涵養することができたと考える。

「いわての復興教育推進事業（交流学習スクール）」成果報告書

学校名：岩手県立久慈東高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は全校生徒 483 名の総合学科高校であり、北は洋野町、南は岩泉町まで、管内広域から生徒が通学している。久慈市は東日本大震災、台風 10 号、昨年度の台風 19 号など、常に災害を想定して学校生活を送ることを意識しなければならない地域である。今年度は防災・復興について学びを深めるとともに、交流を通して地域の良さに気づかせ、岩手県の復興の現状を理解し、復興の担い手としての自身の在り方について考えを深めることを目的とし、交流学習スクールに臨んだ。交流対象校である県立一戸高等学校は内陸部で復興教育スクールの指定を受け、長年先進的取り組みを続けている学校である。また、同じ総合学科高校であり、福祉を学ぶという共通点も多くあることから、自分たちの学びを岩手の復興に還元していくための手立てを探るため、1年間を通して様々な交流活動を共に行っていくこととした。

II 取組の概要

1 実践校

- 岩手県立久慈東高等学校
介護福祉系列 2年次 13名 3年次 24名
- 岩手県立一戸高等学校
介護・福祉系列 2年次 5名 3年次 12名

2 実践日時・場所

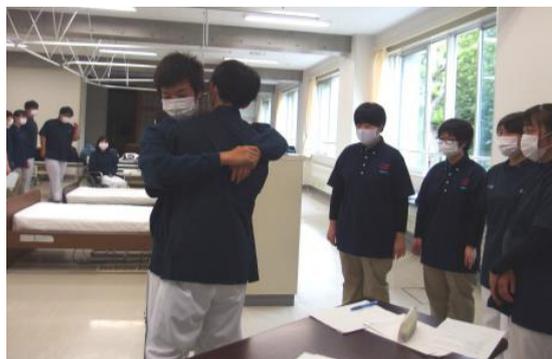
- 令和2年7月21日（火）
第1回交流会 於：久慈東高校 介護実習室
- 令和2年9月29日（火）
第2回交流会 於：一戸高校 介護実習室
- 令和2年11月3日（火・祝）
第3回交流会・野田村総合文化祭
※新型コロナウイルス感染対策のため中止
- 令和2年12月15日（火）
第4回交流会 於：一戸高校 大講義室

3 取組の概要

(1) 第1回交流会

一戸高校を久慈東高校に招き、グループワークを通して、お互いを知り合う活動を行った。久慈東高校の各系列の特色や、これまで取り組んできた復興支援等を紹介することで、

今後の活動についての意識付けを行った。今年度は「自分たちの学びを復興に」をテーマに、日頃自分たちが専門的に学ぶ福祉や介護の知識・技術を高め、震災時や復興に向かう中でのケアのあり方について意見交換を行った。第1回は事例検討・実践と、震災時に起こりうるロコモティブ・シンドロームを予防するための体操を共に学んだ。生徒の感想には「互いの介護のレベルの差を感じた」「一緒に学ぶことで新たな介護の視点に気づくことができた」「普段学んでいる知識や技術を高めることが、復興に役立つのではないかと感じた」など、協働することで生まれる気づきが多かった。



(各校で検討した介護を発表している様子)



(ロコモティブ・シンドローム予防体操を行っている様子)

(2) 第2回交流会

一戸高校において、第1回で用いた介護事例を各校でさらに深め、介護方法について検討したものを発表しあった。各校で異なる介護方法を発表したことから、なぜそのような介護を行ったのかエビデンスを明らかにすることに重きを置き、第1回交流会よりも積極的に意見交換が行われた。事例では沿岸部で被災し、子どもを頼って内陸の施設に入所し

た利用者の方を例にとりあげた。生徒達は設定した生活場面に応じ、衣服の更衣介助や、歩行介助などの介護方法を検討したが、介護技術だけではなく、そのような被災した利用者の方に関わる際、どのような配慮が必要となるか、自分たちが予め理解しておくべきことは何かなど、生活の背景まで理解しようと努めていた点が印象的であった。東日本大震災は岩手県のみならず、日本中に大きな影響を与えた出来事である。震災発生時まだ幼かった生徒達が、震災そのものや震災後の生活、復興について知り、考えることは、利用者の方の生活史を理解する上でも、自分たちの人生を考える上でも必要不可欠なことであることに気づいた生徒も多くみられた。



(各校で検討した介護方法を発表し合っている様子)

(3) 第4回交流会

一戸高校において、本校、一戸高校、一関第二高校の3年生が同一事例を用い、立案した介護計画を発表し合う、介護過程発表会を開催した。一関第二高校はリモートでの参加であったが、特例高の指定を受ける3校が合同で学ぶことは今回が初めての機会であり、今後目指すべき介護の姿について考えを深めることができた。今年度は新型コロナウイルスの流行拡大により、3校共に施設における現場実習が困難であったことから、教員が設定した事例を基にアセスメントを行い、個別援助計画を立案した。同一事例であるが、利用者の方の生活課題の捉え方は3校共に異なり、立案した計画も多岐にわたるものであった。今回の介護過程発表会では施設の実習指導者の方を講師に招き、講師をいただいたが、私たちが日々見落としがちで利用者の方の真のニーズの捉え方や、介護職が抱きがちな思い込みについて学ぶなど、生徒が得た気づきは非常に大きいものとなった。生徒の感想には「決めつけで介護をすることで、利用者の方の自立の可能性をなくしてしまうと感じた」「ポジティブに考えること、楽しんで介護をすることが利用者の方にも職員にも必要だと思った」「3校で異なった介護計画で

あることが面白かった。捉え方が様でないことを生かし、いろいろな面から利用者の方の介護を考えることが重要だと感じた」「利用者の方が1番望んでいることを形にできる介護がしたいと思った」「介護計画を立てるだけでなく、その人の人生を支えられる介護福祉士になりたい」「地域のことを理解することが、利用者の方の生活を支える上で重要だと気づいた」等、3校の交流から得た学びを、自身の今後の人生に役立てようとする前向きな感想が多くみられた。



(3校で介護過程発表会に臨んでいる様子)



(各校で立案した介護計画を発表している様子)

III 取組の成果と課題

今年度は「自分たちの学びを復興に」をテーマに、福祉を学ぶ生徒達自身の専門性を高め、日頃の学びをどのように復興に生かせるかということについて考えを深めた。新型コロナウイルスの流行により思うような活動にはならない部分も多かったが、協働することで福祉の知識・技術を高めることができただけでなく、人の役に立ち、地域社会をより良いものにしていきたいという福祉観を養うことができた点が大きな収穫となった。

課題として、継続して事業を続けるためには綿密な計画を行うこと、また各地域の実情を理解するための取り組みを計画していくことが不可欠であると考えている。形骸的な交流ではなく、人の尊厳に基づき地域福祉を推進していくことができる人材、今後の岩手の復興を担う人材としての育成を目指す交流事業を展開していきたい。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、震災直後校舎が避難所になり、その後校庭に仮設住宅が建てられた。児童には、体力の低下、精神面での不安定さ、自己肯定感の低さなど様々な影響が見られたが、地域の復興と共に学校生活も落ち着きを取り戻してきた。

そこで、地域の企業である三陸鉄道の学習を通して、三陸鉄道の被害と職員の仕事に対する姿勢や復興にかける思いを学ぶと共に、自分たちを育ててくれている郷土への愛情とそこに暮らす方々とのつながりを感じさせたいと考え、本事業に取り組んできた。

II 取組の概要

1 ねらい

- ・三陸鉄道に実際に乗り、鉄道の様子や海の様子を見ることで、地元の交通機関の良さを知り、海の美しさを実感させる。
- ・三陸鉄道の被害の様子や、地域の住民のために復興を願い尽力した社員の思いや取り組みを知り、自分たちの考え方を振り返ると共に、故郷への誇りをもたせる。
- ・復興に向けての支援について学ぶことで、人とのつながりや優しさ等を学び、自分たちの行動を振り返るきっかけとする。

2 取り組みの内容

- ア 事前学習
- イ 震災学習列車乗車体験
- ウ 見学
- エ 事後学習

3 具体的な取り組み

(1) 1・2年生

〔利用区間〕南リアス線（盛駅～吉浜駅）

- ア 事前学習
 - ・絵本「吉浜のつなみ石」の読み聞かせ
 - ・副読本により日頃の備えについて学習
- イ 震災学習列車の活用

盛駅から吉浜駅まで移動する中で、ガイドによる説明を聞いた。三陸鉄道に初めて乗る児童も多く、車窓からの景色を楽しんだり、震災当時の様子を聞いたりするなどして理解を深めた。



ウ 見学

バスで越喜来に移動し、「ど根性ポプラ」を見学。3度の津波をかぶっても枯れずに生き続けている樹齢80年以上のポプラの生命力を実感した。

エ 事後学習

震災の被害や三陸鉄道の復興に向けての取り組み、ポプラの思い出などを新聞にまとめた。



(2) 3・4年生

〔利用区間〕南リアス線（盛駅～釜石駅）

ア 事前学習

- ・副読本「三陸鉄道のたたかい」

イ 震災学習列車の活用

三鉄の車内では、震災の被害や復興にかける三陸鉄道の方々の思いを聞いた。沿線住民のために1日でも早く復旧させようとした社員の頑張りから、地域に根ざした会社であることを強く感じる事ができた。



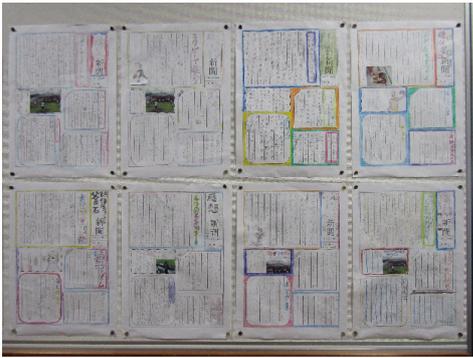
ウ 見学「鶴住居復興スタジアム」

スタジアムでは、釜石市の職員でもありラグビー選手でもある長田さんと河野さんから説明を受けながら、施設の見学を行った。スタジアムの主な特徴や、防災を象徴する場所であること、ラグビーワールドカップ開催の意義など、復興にかける様々な取り組みや関わる人たちの熱意を感じる事ができた。昼食後、広いグラウンドを思い切り駆け回り、自然と調和した新しいまちづくりが進んでいることを実感した。



エ 事後学習 〈3年生〉

三陸鉄道とスタジアムについて分かったことを個人新聞にまとめた。



〈4年生〉

大船渡市において貴重な鉄道による交通手段として位置づけられている三陸鉄道は、震災後の復旧・復興のシンボルとしても、児童にとって得難い学習材となっている。震災学習列車乗車後、改めて盛駅を訪ね、震災当時のお話を聞いたり車庫を見せていただいたりして、三陸鉄道のひみつ、自慢などについて分かったことをリーフレットにまとめた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 参加した児童の感想から

- ・三鉄はすごい！三鉄だいすき！みんなをのせる三鉄、つなみでこわれたけど、がんばったんだね。
- ・三鉄の中で、大きいじしんのことや、つなみからまもるように高いところにつくられていることをききました。わたしも、ど根性ポプラみたいにつよくなりたいです。
- ・スタジアムは自然にかこまれていて、世界中でも釜石にしかない強みだということがわかりました。
- ・三鉄が30台くらいあることや、8両が支援で作られたことがわかりました。車庫の外の線路が盛り上がっているのが工夫されていると思いました。これからも、もっと三鉄について深めていきたいです。

2 成果と課題

(1) 成果

- ・震災学習列車活用スクールへの取り組みを通して、震災後に生まれた児童にも東日本大震災の経験を伝えることができ、常に災害に対して備えようという意識付けになった。
- ・車窓からの美しい景色を堪能しながら乗車し、三陸鉄道の復興への取り組みを学習する中で、自分たちの地域にこのような素晴らしい企業があることに気づき、地域に対する誇りや愛着を育てるよい機会となった。
- ・低学年の段階から震災学習に取り組むことで、発達段階に応じた復興教育を進めることができた。

(2) 課題

- ・復興教育計画について毎年度見直しを行い、実態に即した学習を推進していくことで、震災を風化させることなく語り継いでいく。
- ・今後も地域の企業、産業や伝統・文化を支えている方々を講師として、復興や地域の歴史・将来に関わることについて学ぶ機会を設定したい。

I 事業の概要（地域の実情含む）

当学区は、大船渡市の南部に位置し海岸を間近にし、魚市場を始めとする漁業関連施設が立ち並ぶ学区である。東日本大震災では校舎1階部分が浸水。学区内の商店街や工業地帯、住宅街が浸水し、全壊、半壊の被害が多数出た。

当地域は、古くから水産業の中心として栄えてきたところであり、地域の方々の復興への思いは強いものがある。その思いと地域の方々の協力により、水産業、商店街や住宅地は復旧しつつある。

校庭に仮設住宅が建てられなかったため、校庭を走り回って身体を動かすことができたものの、仮設住宅から通っている児童も多数あり、精神面での不安定、落ち着きのない行動がみられる時期があった。また、自己肯定感も低くなっている。

そこで、地域の企業である三陸鉄道の学習を通して、三陸鉄道の被害と職員の仕事に対する姿勢や、復興にかける思いを学ぶと共に、自分たちを育ててくれている郷土への愛着とそこに暮らす方々とのつながりを感じさせたい。また、この学習を通して、自分たちの暮らしている大船渡町に対する誇りをもたせていきたい。

II 取組の概要

1 実施学年 第5学年

2 ねらい

- ・三陸鉄道に実際に乗り、鉄道の様子や海の様子を見ることで、地元の交通機関の良さを知り、海の美しさを実感させる。
- ・三陸鉄道の被害の様子や、地域の住民のために復興を願い、尽力した社員の思いや取り組みを知り、自分たちの考え方を振り返るとともに、故郷への誇りをもたせる。
- ・復興に向けての支援について学ぶことで、人とのつながりや優しさ等を学び、自分たちの行動を振り返るきっかけとする。

3 取組内容

- (1) 事前学習
- (2) 防災観光交流センター訪問
- (3) 震災学習列車
- (4) 事後学習

4 具体的な取組

(1) 事前学習

副読本、インターネット等を活用し、自然災害及び東日本大震災について調べる。

(2) 防災観光交流センター訪問

防災観光交流センターを訪問し、東日本大震災当時の前後の町の様子の変化について話を聞く。屋上から見渡す町の景色を見ながら説明を聞くことで、当時をイメージすることができた。



【防災観光交流センターから町並みを観察する子ども達】

震災前は大船渡駅前広場であったこの場所を、かさ上げして地域の人々の交流の場、学びの場とし、よりよい町作りの拠点にしようという地域の人々の願いを知る。また、大船渡高校生徒の「大船渡学」の資料をもとに、グループで防災について意見交流し、その後、「NPO 法人お話ころりん」作成の「防災パズル（避難所運営）」に取り組む。災害に備えて準備しなければならないものを友達と話し合う中で、生きるために必要なものを再確認し、パズルを使って「避難所で自分たちができること」について考えを深めることができた。



【相談し合いながら防災パズルに取り組む子ども達】

(3) 震災学習列車

三陸鉄道盛駅から釜石駅までの区間の乗車。車窓からの美しい景色を眺めながら震災当時の様子や奮闘する三陸鉄道社員についてのお話を聞く。三陸駅では、震災で亡くなった方々へ黙祷を捧げる。三陸鉄道を利用した経験のない児童が多く、岩手の海の美しさを実感するとともに、震災被害の様子、復興に尽力した三陸鉄道の社員の思いを感じ取る事ができた。



【三陸鉄道職員による津波の特性についての説明】

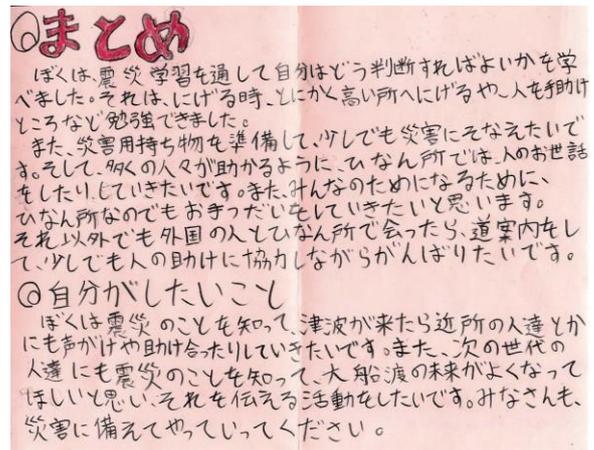
(4) 事後学習

授業参観日、児童集会等で、保護者や全校児童へ取組を紹介する。

Ⅲ 取組の成果と課題

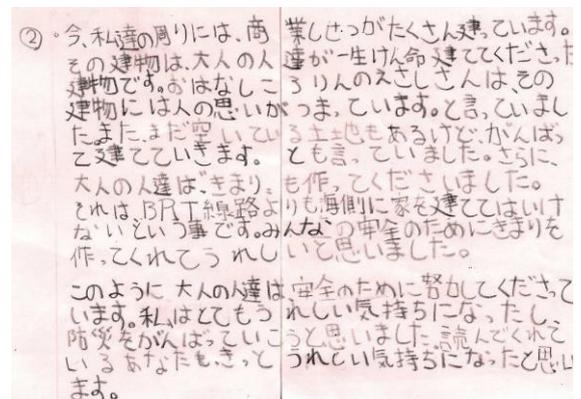
1 成果

- かつて学区内を通過していた鉄道を知らない子ども達が今回、三陸鉄道を利用することで郷土の自然の美しさを知ることができた。
- 地域の防災関連施設を利用することで、震災の脅威と、防災の大切さ、復興への地域の人々の思いを知るとともに、地域への愛着を深めることができた。



【児童のリーフレットから①】

※災害への備えの大切さ、避難所での役割の自覚とともに、伝えていくことへの意欲が伝わる。



【児童のリーフレットから②】

※私たちの将来のことを考えた町作りをしている地域の人々への感謝と、防災意識の高まりが感じられる。

2 課題

- 3年生で実施している「椿学習」・4年生で実施した「東日本震災津波伝承館の見学」及び「震災当時の校長先生の講話」など、学校全体での指導計画の見直しをしていく必要がある。また、地元商店街をはじめとした地域の人々の思いに触れる機会をより多く設定することで、地域に対する愛着と誇り、町作りへの思いを感じさせたい。
- 学習の流れが途切れ途切れにならないように順番を工夫し、「災害を知る」、「復興へ向かう様子」、「災害に備える」、「未来へ」という学習の流れができるように指導計画を改善する必要がある。

I 事業の概要（地域の実情含む）

山田小学校は、昨年度閉校した大沢小学校、山田北小学校、山田南小学校、織笠小学校、轟木小学校、大浦小学校の6校が統合した新設校である。学区が広範囲となっており、スクールバスを利用している児童も多く、児童の学校生活環境は大きく変化した。そのような中で、児童はたくさんの友達と学び合い、新たな人間関係を築き、充実した日々を過ごしている。

平成23年3月11日の東日本大震災津波により甚大な被害を受けた本町だが、震災から9年以上経過した現在は、復興が進み、町の様子は日々変化している。それに伴い、震災の記憶がほとんどない児童が当時の状況や復興に向けた人々の思いなどを知る機会は少なくなっている。

そのような状況の中、海に面した地域、海から離れた地域、いろいろな地域から集まった児童が一緒になって震災について学習し、実際に震災を体験した方々から学ぶ活動を行うことによって、「いきる」「かかわる」「そなえる」という教育的価値を育て、郷土の発展を支える「人づくり」を目指して本事業を実施する。

II 取組の概要

1 事前学習

(1) オリエンテーション

学習の見通しをもたせるためにオリエンテーションを行い、これから何を学ぶのかについて考えた。

(2) いわての復興教育副読本の活用

震災当時の状況を知らない児童が震災学習列車での活動当日に実りある学習ができるよう、副読本を活用した。震災の様子が分かるページや、鶉住居小学校の避難訓練のページを活用して事前学習を進めた。

(3) 調べ学習

副読本を活用した学習を通して疑問に思ったことや、詳しく調べたいことを、インターネット等を使用して事前に調べる活動を行った。そこで分かったことをもとに、震災学習列車での質問内容を考えた。

2 震災学習列車

(1) 震災学習列車

陸中山田駅から鶉住居駅までの区間において、三陸鉄道に乗車し、三陸鉄道の職員から震災当時の様子等について説明を受けた。当時織笠駅があった場所では、全員で黙とうを行った。

職員が説明に用いたパネルを見つめながら説明に耳を傾け、震災当時の様子を想像しながら窓の外の風景を眺め、真剣に学習する態度が見られた。



(2) いのちをつなぐ未来館見学

ア 館内見学

ガイドの案内により、館内展示資料の説明を受けた。児童はメモを取りながら目的意識をもって説明を聞き、まとめの学習に向けて必要な情報を収集することができた。

イ 語り部

いのちをつなぐ未来館の職員が、自分が実際に体験したことを児童に語ってもらう活動を行った。実際に体験した方の話は重みがあり、震災当時の記憶のない児童は、語り部の話に聞き入っていた。語り部の話から、児童は、津波の怖さや避難の大切さを知ることができた。

ウ 防災ウォークラリー

うのすまい・トモスの敷地内に、防災に関するクイズを設置してもらい、児童はグループごとに、クイズがどこにあるのか探して問題を解く活動を行った。

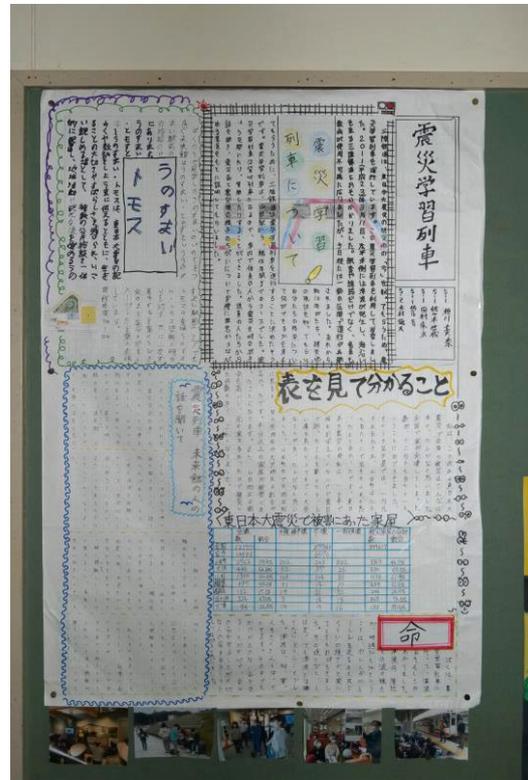
児童は、時間内に全ての問題を解き終わることを目指し、楽しみながらも防災に関する大事なことを学ぶことができた。



3 事後学習

(1) ステージ発表

震災学習列車及びいのちをつなぐ未来館で学んだことや考えたことを新聞やポスター、クイズなどにまとめるとともに、ステージ発表という方法で学習のまとめを行った。



(2) 感謝の手紙

お世話になった三陸鉄道震災学習列車事業部といのちをつなぐ未来館の職員に、学んだことや、感謝の気持ちを表した手紙を書いて送った。

(児童の手紙より抜粋)

ア 三陸鉄道震災学習列車事業部

- ・ぼくが一番覚えているのは、クウェートという国から、お金にすると約400億円もの寄付をいただき、新しい列車を作ったということです。このことは、しっかりと覚えていたいです。将来、他の国の人を助けられるようになりたいです。
- ・列車に乗りながら、震災のときのことを想像して、津波の怖さを考えました。山田で生きていくので、自分の身をしっかりと守りたいです。家に帰って家族にも話しました。
- ・黙とうのとき、目をつむった瞬間から息が苦しくなりました。その苦しみは、亡くなった人々の苦しみだと分かりました。これからは、自分で自分の命を守りながら、人の命も守れるようになりたいです。
- ・一番心に残ったことは、織笠駅があった場所で黙とうしたこと。この場所でいろいろな人が犠牲になっていて、私は国語で学習した「たずね人」を思い出しました。弟は震災のことが分からないので、紙芝居を作って、完成したら読んであげたいです。
- ・当時本当にあった津波のことをたくさん教えてくださって、分からなかったことを知ることができました。当時あったことを思い出しながら話していて、辛かったと思いましたが、最後まで話してください、ありがとうございました。

イ いのちをつなぐ未来館

- ・語り部のお姉さんの実際に体験した話を聞いて、津波の怖さや、避難訓練の大切さを知ることができました。いつ来るか分からない津波に備えて、避難準備をすることが大切だと分かりました。
- ・三原則の「想定を信じるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」を教えていただき、ありがとうございました。震災で亡くなった方々の分もがんばって生きようと思いました。
- ・これからは、自分の命を守れるように、この震災のことを忘れずにいたいです。

- ・私は映像を見たとき、波が速くて、強くて、勢いがすごくて、びっくりしました。これから、もし、大きい津波が来たときは、最善を尽くして、正しい行動をとれるようにがんばりたいです。
- ・一番恐ろしいと思ったことは、川崎さん(語り部)もおっしゃっていた、一步でも逃げるのが遅いと死んでいたかもしれないことです。みんなの予想を上回る大震災でたくさんの方が犠牲になったと考えると恐ろしいです。震災に備えて何ができるか考えてみたいです。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 三陸鉄道の職員や、いのちをつなぐ未来館の職員など、実際に震災を経験した方々の話は児童の心に響くものがあり、児童は人とかかわりを通して「いきる・かかわる・そなえる」について真剣に学ぶことができた。
- (2) 「自ら課題を見つけ、学び、考え、判断する力を育てる」「学び方やものの見方・考え方を養い、主体的・創造的・協同的に取り組む態度を育てる」という本校の総合的な学習の時間のねらいに合った取組であった。児童は課題発見能力、情報収集能力、表現能力等を高めることができた。
- (3) 震災による辛い経験をしてきた保護者もたくさんいることから、ステージ発表で何をどのように取り上げるべきか悩んだが、児童の発表は保護者に対しても将来に目を向けることができる前向きな内容となり、間もなく10年目を迎える節目にふさわしいものとすることができた。

2 課題

- (1) 調べ学習を行う際、震災のを中心に進めていったが、児童の発達段階に即していたか考える必要があった。自分がこれからどういう方向で防災や人、社会とかかわっていけるのかについて考えさせるなど、今後に向けて学習内容の検討が必要である。
- (2) 学校経営の柱となるような取組の一つであり、中途半端な活動にならないよう、限られた時数の中で何を考えさせ、どのような活動を行うべきか、ねらいを意識し、指導計画を十分に検討する必要がある。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、東日本大震災により校舎1階と体育館が浸水。その後、5年間、仮設校舎で不自由な学校生活を送った。平成28年、現在の新校舎への移転を機に大牛内分校と統合し、今年度で5年目を迎える。学区は台風10号豪雨の被害も受けており、度重なる災害に見舞われてきた。しかし、大きな災害の犠牲となった地域にありながら、児童の災害に対する意識は高いとはいえない。災害のリスクが高い地域に住む本校児童に対し、防災学習の充実を図り、災害への心構えを身に付けさせることが課題であった。

そこで、本年度は、本事業を活用した学習を震災を体験していない3・4年生の防災学習に位置付けた。児童の災害についての理解を深めさせ、自分で自分の命を守る態度を高めると共に、災害から力強く復興してきた自分達のふるさとへの愛着がより深まることを期して本事業を実施した。

II 取組の概要

1 ねらい

震災学習列車活用スクールを活用した防災・復興学習を通して、災害に対する理解を深め、防災への心構えを高める。

2 取り組みの内容

(1) 事前学習

ア 副読本・震災資料室の資料の活用

復興副読本や校舎4階の震災資料室にある資料を基にして地震の起こる仕組みや当時の被災状況等について調べた。資料から小本地区の被害の様子を知り、津波の威力や津波被害の大きさについてとらえることができた。また、震災当時、全国から届いた励ましのメッセージから全国から心あたたまる支援をいただいていたことを知った。



イ 家族にインタビュー

震災当時の状況や避難所生活の様子、当時の思い等について家族に聞き取りを行った。停電により電気や電話が使えず、不自由な生活を強いられたことやテレビや電話からの情報を得られず不安であったことなど、当時の家族の状況をつかむことができた。

ウ 防災倉庫や防災センターの見学

校舎4階は避難所として利用されるため、4階に防災倉庫を備えている。防災倉庫に備蓄されている備品について調べることで、避難所として活用される学校の施設としての役割について気付くことができた。さらに学校の近くにある防災センターを見学し、災害時に備えた施設のつくりや工夫、備品について調べることを通して、地域で災害についての備えを行っていることの必要性について学ぶことができた。



エ ゲストティーチャーによる講話

地域の方をゲストティーチャーに迎え、震災当時に抱いた思いや震災体験から学んだ教訓について話を聞いた。児童は、震災当時の話から津波の怖さや震災津波を体験した方々のつらさに思いを寄せ、命を守ることの大切さについて考えを深めることができた。



《児童の感想から》

- ・今日は津波の経験や一番心配だったこと、つらかったことなどがたくさん聞きました。そして、家族が大切ということが話の中で一番心に残ったので、大切にしたいです。
- ・今日は、お話を聞いて石碑の「命を守れ」の意味や自分の命を守るため、あきらめず一生懸命がんばることが大事だと思いました。津波はものすごく強いから、津波を見る前に命を守るために逃げるのが大切だと思いました。

オ 津波から生き残った松に名前を付ける活動

町役場復興課からの依頼を受け、小本地区に残る津波被害から生き残った1本の松に名前を付ける活動に取り組んだ。家族で生き残った松について話題にし、家族で松の名前を考える活動は、地域の復興について考えるよい機会となった。松の木の名称は決定後、3月に披露され、名称が書かれた看板が設置される。



(2) 震災学習列車活用スクール

ア 三陸鉄道員による説明

三陸鉄道で野田村から田老駅まで乗車。三陸鉄道員から震災当時の各駅付近の被災状況について説明を聞く。津波により防潮堤が作られ、海岸の景勝が変わってしまった様子を直接目にし、津波被害の大きさを感じ取ることができた。

また、災害の被害を防ぐための工夫についても学ぶことができた。



イ 防災ガイドによる話

田老の学ぶ防災ガイドの方から田老地区の防災の工夫や田老の復興状況についての説明を聞く。津波被害から逃れたガイドの佐々木さんは、「津波の時は高台に逃げること、自分の命は自分で守ること」を切々と訴えた。津波の教訓を児童に語り継いでも

らいたいという強い願いが伝わる話であった。さらに、震災遺構の田老観光ホテルの見学、津波映像の視聴を通して、児童は、津波の威力や津波の怖さを体感し、震災の恐ろしさと命の大切さについて再認識することができた。



《児童の振り返りから》

①見学で心に残ったこと

・ホテルでは、6階に社長さんが残って、カメラを回して動画をとっていたことが心に残りました。理由は、波はもう来ているけど、こわさを伝えたいから残っていたのが、すごいと思いました。

②震災について学んできた中から、誰にどんなことを伝えたいか

○家族や地域の人たち、友達に伝えたい
津波はこわいと思うことは大事だけど、自分の命は自分で守らないといけないからどこか高い所ににげて、年をとった人の手伝いや自分にできることをしてみてくださいと伝えたい。

○家族に伝えたい

小さなことでも気を付ける大切さを伝えたい。理由は、佐々木さんが車は前から入るよりも後ろから入った方が出やすいことや、くつもかかとを自分の方に向けておいた方がいいなどと言っていたので、ぼくもそういう小さな事でも逃げやすくなると思ったから。

(3) 事後指導

ア 学習発表会で学んだことを発表

防災学習やそれまで行ってきた地域学習を通して、児童は地域のよさにふれた劇を学習発表会で発表した。地域のよさを伝える替え歌の歌詞を自分達で考え、全校や保護者に向けて発信した。



《保護者からの感想から》

- ・小本のいい所をよく学習して発表できていたと思います。歌の歌詞も上手に作っていて、これからも歌い続けてほしいと思いました。
- ・学習したことを劇にして、見る側も勉強になったし、小本バージョンの歌もすごく感動しました。もう一度聞きたいと思ったし、学級通信でもいいので、歌詞を教えてください。
- ・精一杯表現する3・4年生の姿にとっても感心しました。震災について改めて考えることが出来るお話だったと思います。

イ 全校防防災学習の実施

全校で地震津波災害についての学習を行い、登校時に地震・津波が起きた時の行動の仕方や避難場所について登校班毎に確認した。実際に地震や津波が起きた時に自分はどういう行動をとればよいのかを考え、災害時に対する心構えを高めることができた。



《児童の感想から》

- ・今日は、橋の上をわたっていたら、小本トンネル前広場ににげて、橋をわたった後だったら小本駅、学校の近くだったら学校ににげる、この3つのことを学びました。家の人と話し合いをして作戦を考えたいです。(4年徒歩通学児童)
- ・今日学習をして、津波はこわい物だと知っていたけれど、えいぞうを見てさらにおどろきました。どこにひなんするかも今日かくにんすることが出来たので、いつ災害がおきてもいいように気をぬかず、まわりにけいかいして、今すべきことをしっかり出来るようにしたいです。(4年スクールバス利用児童)

ウ 新聞に学習の成果をまとめる

学習を通して知ったことや考えたこと等をグループで壁新聞にまとめて掲示した。震災について学んだことを振り返り、新聞にまとめる活動を通して、いつ起こるかわからない災害に備え、命を守るための行動の仕方や地域の防災について考えを深めることができた。

《児童の感想から》

- ・これらの学習を通して、もし、また津波が来たら家の近くの高い山があるからそこに逃げたいと思います。
- ・ぼくは、この学習を通して、津波のことや地域のことを知れたので、よかったです。これからは、自分で安全なところやきけんなところを見つけないです。
- ・調べたり見たりしたけど、小本にはたくさんいい所があったので、これからもどんどん増やしていきたいです。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- ・津波災害を受けた学区の地域と他地域とを比較しながら被害の様子や復興状況について学ぶことができた。
- ・三陸鉄道で沿岸地域を移動しての学習を通して、多くの沿岸地域が津波の被害を受け、防潮堤等、津波襲来に備えた工夫がなされていることを直接目で見て学ぶことができた。
- ・三陸鉄道の方からの話や田老地区の震災ガイドの話を通して、災害時、命を守るためにどのように行動すればよいのか、学んだことを伝えたいという思いを深めることができた。
- ・学習を通して、自分達の住む地域を災害から守り、地域のよさを大切に受け継いでいこうとする意欲を高めることができた。

2 課題

- ・今年度3・4年複式学級の総合的な学習の時間に本事業を活用した防災学習を位置付けたが、防災・復興学習に関する系統性のある年間計画を整備していく必要がある。
- ・津波災害を想定した実際的な避難訓練の実施や児童が自ら判断し避難行動をとることができるような防災学習を計画的に行い、児童の防災意識を一層高めていきたい。

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 地域や学校の被災や復興の状況

当学区は、鉾ヶ崎地区を中心に多くの世帯が被災し、甚大な被害を受けた。

震災直後、本校の体育館や校舎が避難所となったり、校庭に仮設住宅が建てられたりした。その後、仮設住宅が撤去され、平成29年8月に校庭が復旧するまで校庭が使用できず、6年間、体育祭の取り組みや部活動などは、他施設を借用して実施した。

当地域は、水産加工場等も多くあり、古くから栄えてきたところであり、地域の方々の復興への思いは強いものがある。その思いと地域の方々の協力により、道路や住宅地が整備され、復旧しつつある。

2 生徒の実態

本校は被災地域にあり、震災を記憶している生徒もいるが、生徒は明るく元気に登校しており、合唱・あいさつ・清掃を三本柱として、意欲的に活動している。ここ数年、地域学習とキャリア教育の一環として、地域の方々からお話を伺っている。

そこで、地域の企業である三陸鉄道の学習を通して、三陸鉄道の被害と職員の仕事に対する姿勢や、復興にかける思いを学ぶと共に、自分たちを育ててくれている郷土への愛着とそこに暮らす方々とのつながりを感じさせたい。また、この学習を通して、自分たちの暮らしている宮古に対する誇りをもたせていきたい。

II 取組の概要

1 ねらい

- (1) 三陸鉄道に実際に乗り、鉄道の様子や海の様子を見ることで、地元の交通機関の良さを知り、海の美しさを実感する。
- (2) 三陸鉄道の被害の様子や、地域の住民のために復興を願い、尽力した社員の思いや取り組みを知り、自分たちの考え方を振り返るとともに、故郷への誇りをもつ。

復興に向けての支援について学ぶことで、人とのつながりや優しさ等を学び、自分たちの行動を振り返るきっかけとする。

2 学習の内容

(1) 事前学習

ア オリエンテーション

震災学習列車活用スクールを通して、被災地域である自分たちの地域のこと、宮古市のことを見つめ直し、復興に向けての取り組みや災害時の対応について考えるなど、ねらいや学習の流れをつかむ。それを受けて、個々の学習課題を立てた。

イ 訪問先について理解する

訪問先である鶴住居地区の施設、「いのちをつなぐ未来館」「鶴住居復興スタジアム」「祈りのパーク」について、どのような思いでこの施設が建てられたのか、どのようなことを発信しているのかなどを学んだ。関連する動画なども活用し、理解を深めた。

ウ 「いきる かかわる そなえる」での学習 (ア) いきる

① 「普代水門と太田名部防潮堤」

「普代村の普代水門と太田名部防潮堤が、日本大震災において住宅地や集落中心部への津波到達を防いだ事実、元村長・和村幸得の言動の意義を学ぶことを通して、地域の先人の津波防災にかける熱意や、津波防災のための地域政治のあり方、自然災害から地域と人命を守る防災施設・公共事業の重要性について考える」を目標に、命を守るために自分ができること、しなければいけないことは何かについて考え、話し合った。

(イ) そなえる

③ 「未来をつくる—東日本大震災伝承館—」

『陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアル』の意義と展示内容を学び、特に『ゾーン3-4』の展示『未来を作る』の内容をとらえることを通して、津波災害の大きさと、津波伝承の意義を考える』を目標に、災害の教訓を生かすためには、何が必要かについて考え、話し合った。

(2) 震災学習列車当日

ア 三鉄に乗車し、三鉄の社員の方から話を聞く

当初全校生徒92名が2両編成の列車に乗車する予定だったが、コロナ感染予防対策のため三鉄に乗車したのは2、3年生のみと

なった。それぞれの車両に三鉄の社員の方が乗車し、パネルを用いて、震災当時のこと、震災直後のこと、震災からの復興の様子、多くの方からの支援があって今があるといったお話を聞いた。最後に、「自分の命は自分で守る。自分の命を守ることは、人の命を守ることにつながる。だから、避難訓練は真剣に取り組んでほしい。」と、今後私たちが実践していくことについても話していただいた。

イ 語り部さんの話を聞く

「いのちをつなぐ未来館」では、語り部の菊池のどかさんから震災当時の話を聞き、釜石東



中学校生徒たちとの避難の様子を知った。お話の中で、「避難所で中学生や高校生がいろいろな人を助けることができた、中学生でもできることはたくさんある。」ということが語られた。

ウ 釜石鶴住居復興スタジアムに行き、復興について考える



スタジアム内を案内していただき、施設の概要について説明を受けた。メインスタンドの大きな屋根幕は、鳥の羽根や船の帆をイメージして造られており、震災からの大きな羽ばたきや新たな船出とし、復興を目指した新たなスタートをイメージしていること、有事の際の緊急避難場所を整備していることなどを知ることで、復興への思いや防災の取り組みを感じることができた。

(3) 事後の学習

ア 「いきる かかわる そなえる」での学習

(ア) かかわる

⑫ 「家族を信じて 自分の命は自分で守る」

「釜石市民からの『10のメッセージ』」を読み取ることを通して、防災行動として『自分の命は自分で守る』ことの意味を考える。あわせて英語の文章を読み取り、要点を把握し、その内容について自分の考えを表現する」を目標に、関連資料「釜石市防災市民憲章」も併せて読み、命を守るための行動について考えた。

イ 震災に関する「命」を考える学習

- ・復元納棺師「笹原留似子さん」のビデオ及びメッセージ動画を見た。
- ・震災で亡くなった方の家族の思い、その思いに寄り添う笹原さんの姿を知り、命の尊さ、生き方について考えた。

ウ 震災学習列車の振り返り

今までの「いきる かかわる そなえる」を活用した学習、震災学習列車での講話等を踏まえ、学んだこと、考えたこと、これからの生き方に生かすことなどをレポートにまとめた。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- ・「いきる かかわる そなえる」を事前・事後の学習に据えることで、震災に関わる学習の流れを考えることができた。
- ・三陸鉄道に乗車し、車窓から震災の爪痕や復興の様子を見ることができた。また、職員の方から話を聞くことで、津波の怖さ、命を守るために大切なこと、復興には多くの人々の支援があったことなどを知り、震災への理解を深めた。
- ・事前から事後までの学習を通して、避難訓練の大切さや、家族との避難方法の確認をすること、防災用品の備えをすることの必要性など、防災についての意識が高まった。
- ・東日本大震災での教訓を語り継ぎ、復興の担い手として地域の復興に貢献していこうという思いをもつことができた。
- ・震災学習を通して、日々を大切に生きることや命の尊さについて考えを深めることができた。

2 課題

- ・今後震災を経験していない生徒が増えていく中で、東日本大震災での教訓を語り継ぐことや地域の復興に貢献していこうとする思いを、どのようにもたせるかが課題である。
- ・津波や地震だけではなく、風水害等の災害も近年増えてきているので、災害時にどう対応するかといった防災に関する知識や関心を持ち、理解を深め、今回学習したことを生徒個々が災害への備えとして一般化していくことが必要である。
- ・被災した親たちの状況を踏まえた中で、親も含めた心の復興教育が課題である。

I 事業の概要（地域の実情含む）

山田町は、2011年3月11日に発生した東日本大震災で、中心街を含む海岸部が大きな津波被害を受け、復興に取り組んでいる。あれから約10年が経過する現在は、仮設住宅がほとんどなくなり、復興公営住宅などの建設も進み、復興の途中にある。

この地域は、明治三陸大津波、昭和三陸大津波、チリ地震津波と、近代以降三度にわたる甚大な人的被害を出したにもかかわらず、四度目のそして最大の地震津波を経験することになった。今後、これら幾度にわたる地震や津波被害による被災体験を忘れずに後世へ語り継ぎ、安全に生活を送り、地域の持続的な発展に努めなければならない。



本校は東日本大震災発生時、町指定の避難所として最大約1,300名の方々が利用する。

しかし、昨今は東日本大震災の風化が叫ばれている。現在の高校生は、約10年前は就学前後の年齢であり、当時の状況を詳細に思い出す記憶がないのである。そこで、生まれ育った地域における東日本大震災での教訓を学び直し、今後の安全な生活、山田町の発展に寄与する人材を育成する必要がある。

今年度、1年生は総合的な探究の時間を使い、復興・防災学習を行った。その一環として、震災学習列車で近隣の被災地を巡って復興状況を学び、釜石市鶴住居町の「いのちをつなぐ未来館」を見学し、震災当時の状況や今後の安全についての講話を受けた。

この列車を活用した学習を皮切りに、過去の津波に関する新聞を使った学習、地域の石碑を紐解き、新聞作成やグーグルマップ作成に取り組み、多角的に復興や防災についての探究活動を実践した。

II 取組の概要

1 震災学習列車を活用した被災地見学

三陸鉄道リアス線宮古駅で震災学習列車に乗り、鶴住居駅へ向けて出発した。車中にて、三陸鉄道担当者より、震災時の状況、鉄道復活への道のり、現在の沿線の状況、津波対策等の説明を受けた。また、被災状況を見ることができる場所で一旦停車または徐行運転をしてくれた。



2 釜石市防災学習施設「いのちをつなぐ未来館」Tsunami Memorial Hall 見学

釜石市鶴住居町の「いのちをつなぐ未来館」を訪問し、館内の展示見学を行いながら、東日本大震災当時の状況の説明を受けた。また、震災当時、釜石市立釜石東中学校3年生で、実際に小学生の手を引いて避難した職員から、「釜石の奇跡」と呼ばれるようになった避難や日頃の安全への意識、復興状況についての講話をいただいた。



3 生徒の感想

〔1年A組 畠山 瑞姫 さん〕

三陸鉄道に乗車して話を聞き感じたことは、震災が起こった時にどのような行動を取り、列車に乗っている人たちを避難させるのかをしっかりと考えていることです。震災の時、18人の乗客が三陸鉄道に乗っており、全員無事ということを知り、その場の状況をきちんと把握して行動を取っているのだと学びました。また、三陸鉄道はたくさんの人たちに利用されていると改めて思いました。今後、私自身が語り部として、山田の良さを多くの人たちに伝える大切さや東日本大震災という大きな出来事を伝えることが大事であると思えました。

〔1年B組 山内 羅菜 さん〕

いのちをつなぐ未来館で講演を聞いて、地震や津波がどれだけ辛いものなのかを改めて実感することができました。展示物を見た時に、津波で流された時計、ネクタイピン、1年生が使う黄色い帽子、指輪などがあり、とても胸が痛くなりました。どれもとても大切なものであり、津波で流されて辛く悲しいと思います。また、何万人もの人が津波の被害に遭っていると思います。この中で生活することになると自分は耐えることができないかもしれません。しかし、助け合って生活をしている方々には並大抵では済まされない努力があり、自分も頑張らなければならないと思います。

III 取組の成果と課題

1 成果

(1) 震災学習列車

三陸鉄道の車窓より、鉄道沿線における被災地での被害状況や復興について、実際に見ながら説明を受けた。改めて、地震や津波の怖さを確認するとともに、復興への取組について学習することができた。

1年生は、震災時に小学校入学直前だったことや車での移動が常套手段であること等の理由で、本校の多くの生徒が三陸鉄道を利用する経験が少ない。

※三陸鉄道による通学生

1年生 2.7% 2年生 7.3% 3年生 0.9% 全校 10.9% そのような環境の生徒が、三陸鉄道に乗車することにより、この鉄道設備が地元の生活や経済活動に大きな影響を持つ資源であることを実感することができた。また、鉄道施設の復旧・復興、そして運行には多くの人々の努力の賜であることを理解することができた。

(2) いのちをつなぐ未来館

災害から未来の命を守るための防災学習を推進する館内職員より、東日本大震災の出来事、教訓、釜石での防災学習の取組を紹介する展示スペースを回りながら説明を受けた。また、実際に震災を乗り越えた職員が、自身の避難経験を交えて震災について語ってくれた。幼い頃から自分たちが学んできた防災教育の実践は、後に「釜石の奇跡」と称されるようになり、改めて「津波てんでんこ」のごとく避難の大切さを実感することができたと言う。

今後の日常生活の中での防災への意識向上、他人への思いやり、安心して生活できる地域づくり等への示唆をしてくれた。また、地元山田町を越えての防災学習をすることにより、震災についての識見や判断力を深めることができた。

2 課題

(1) 震災学習列車

今年度も、三陸鉄道リアス線宮古駅から鶴住居駅までの行程での防災学習であった。

陸中山田駅から大船渡市の盛駅など、より広い範囲での震災学習列車の利用が可能であれば、様々な地域の復興を学習することができ、今後の地域づくりに資することができる。

また、広範囲の地域を見学することができれば、三陸ジオパーク内を走っているので、地形を学び、今後の地域発展のアイデアと結びつけ学習を深めることができる。

(2) いのちをつなぐ未来館

この地域は、過去に幾多の大地震や津波を経験したにもかかわらず多くの犠牲者を出してきた。そこで、1年生はテーマを「碑の記憶」として探究活動に取り組み、先人たちが刻んだ碑を紐解いて二度と津波による犠牲者を出さないようにするため、自分たちが語り部となり強いメッセージを発信したいと考えている。

そこで、当館の語り部と協働し、語り部としての心構えや発信方法等の研修を受け、伝えるべき言葉の文化を大切にしながら、東日本大震災を風化させないためにも後世へつなげていきたい。



「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」成果報告書

学校名：岩手県立久慈高等学校長内校

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災から9年が経過するが、生徒の多くは当時、まだ若い年頃でその記憶が薄いようである。しかし、今後もこの沿岸地域で生きていくことを考えれば、改めて未曾有の大災害についての認識を新たにし、後世に伝えていく意識を高めていくことが重要であると考え。また、地震や津波の他、近年は毎年のように台風による被害を受けるようになった。実際、平成28年の台風10号襲来時には、校舎が床上浸水の憂き目に遭った。更に、令和元年の台風19号の際には、近隣地域の浸水被害を目の当たりにし、生徒たちは災害に対する関心を高めつつある。この事業を一つの機会として、日常から地域の防災に貢献しようとする意識を高めてほしい。

今回の事業は、始めに「震災学習列車の活用」と「岩泉ホールディングスでの講話」を組み合わせた実地学習を行い、その後二週にわたり、事後学習としての災害学習を実施することとした。

II 取組の概要

1 震災学習列車

久慈駅で乗車し1時間10分ほどで田野畑駅に到着、その間、三陸鉄道職員の方々の説明を聞きながら、車窓から復興の様子を観察した。説明では、一般的な報道では語られることのなかった、被災地の実際の様子が詳細に語られた。当時、現場にいないと分からない真実味のあるエピソードを耳にし、生徒たちも真剣に聞き入っていた。



2 岩泉ホールディングスでの講話

田野畑駅からバスで移動し、30分程度で岩泉ホールディングスに到着、その後1時間程度、社長ご自身からの講話をいただいた。平成28年

の台風10号により被災した同社が、様々な困難を乗り越えて再生したこと、業績が悪化していたにもかかわらず従業員の雇用を守り抜いたことなどを知り、地場産業や住民生活の発展に貢献しようとする熱意に触れ、多くの生徒が感化されたようである。



3 事後学習

11月24日と12月1日の二週にわたり、校内での防災学習を行った。岩手県地域防災サポーターとしての実績を持つ本校講師、千葉遥香先生による講話である。

前回の震災学習列車や岩泉ホールディングスでの講話に関連づけた内容の他、地震・津波や台風被害のメカニズムを、近隣地域の事例や自らの被災経験も交えて科学的に解説するとともに、自然災害との望ましい共生のあり方など、今後の人生に生かして欲しい内容を取り上げて生徒の理解を深めた。



◎生徒の感想

【夜間部4年次生】

今回の災害学習を通して、自分にできることがまだまだたくさんあると思いました。また、もしもの時に備えることの大切さを改めて感じさせられました。災害時には、自分の命を守ることが最優先なのは分かるけど、心と時間に少しでも余裕があれば、助けを求めている人に声をかける勇気を持ちたいと思いました。

【昼間部2年次生】

実際に被害に遭われた方々の、真実の体験談を聞くことができたのはとても貴重な経験でした。これまでの自分が、災害に対する意識があまり高くなかったことに気づかされました。今後は、日頃から備えることに気を配りたいと思います。また、今回学んだことは、私たちが後の世代に伝える事が大切だと感じました。

【夜間部2年次生】

自分はこれまで、震災や台風被害などで大きな被害を受けた事がなく、正直を言えば、他人事のように考えていました。ただ、今回の学習で、同じ岩手県でこんな悲惨なことが起こっていた事を知り、とても驚きました。これからは、もっと自分から災害について考えていきたいです。震災や台風の被害の時に高校生たちが地元の人々のために役立っていたエピソードを聞き、もしもの時には、自分も他人のために何かを頑張りたいと思いました。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 学習実施前は関心の薄い生徒も少なからず見られたが、学校から飛び出し、日常とは異なる環境において見聞したことで、新鮮な気持ちで素直に説明や講話の内容をよく聞き、より深い理解につなげることができた。
- (2) 震災や津波、台風被害などをそれぞれ単体で見るのではなく、共通性や特異性などを踏まえ災害を総合的に見つめる視点を意識させ、その重要性を感じ取らせることができた。
- (3) これまで数多の災害に遭遇してきたが、その度に、多くの名もなき人々の協働、尽力により復旧が成され、地域が守られてきたことを伝え、今後、自らが地域の復興や防災の担い手になるという使命感を喚起することができた。
- (4) 身近な事例を積極的に取り入れることにより、今後も頻繁に発生するであろう災害との付き合い方を、主体的に考えさせることができた。

2 課題

- (1) 一連の学習機会により、災害復興や防災に関する意識を総合的に高めることはできたが、それを維持させることが困難である。熱しやすく冷めやすい生徒たちには、継続的に働きかける必要があるだろう。そのためには、単発的な行事として終わらせるのではなく、「総合的な学習の時間」や「防災避難訓練」などに関連づけて、年間を通しての指導計画を確立する必要がある。

- (2) 日常とは異なる場面で、新たに知り得た事象について「感じる事」はできても、それを踏まえて具体的に「行動に移す事」が難しい生徒が多い。災害や復興に関するもののみならず、日常から様々な形で生活経験の場を設定し、自立して考え行動する機会を与えることが重要であると考えます。
- (3) 事前、事後で、生徒の意識がどのように変化したかを測るなどの調査を計画的に行うべきであった。



◎参考資料（事後アンケート調査）

【内容】

『これまでの復興教育での学びから、あなた自身は「いきる」「かかわる」「そなえる」のそれぞれにおいて、どんな項目を重要視しようと思いますか？』

【回答】（サンプル数 35、複数回答可）

「いきる」

・かけがえのない生命	18
・自然との共生	11
・価値ある自分	0
・夢や希望の大切さとやり抜く強さ	4
・自分の成長	4
・心の健康	6
・体の健康	6

「かかわる」

・家族のきずな	6
・仲間とのつながり	10
・地域のとのつながり	9
・ボランティア・救援活動	14
・自分と地域社会	2
・復旧・復興のあゆみ	2
・災害に備える地域づくり	6

「そなえる」

・自然災害の様子と被害の状況	5
・自然災害発生のメカニズム	4
・自然災害の歴史	6
・災害のライフライン	0
・災害時の、情報の収集・活用・伝達	7
・学校・家庭・地域等での日頃の備え	17
・身を守り、生き抜くための技能	10

項目ごとの回答数の不均衡を考慮して、今後の指導のあり方を模索していきたい。

I 事業の概要（地域の実情含む）

八幡平市は、岩手山・十和田八幡平国立公園を有し火山活動が見られる地域である。

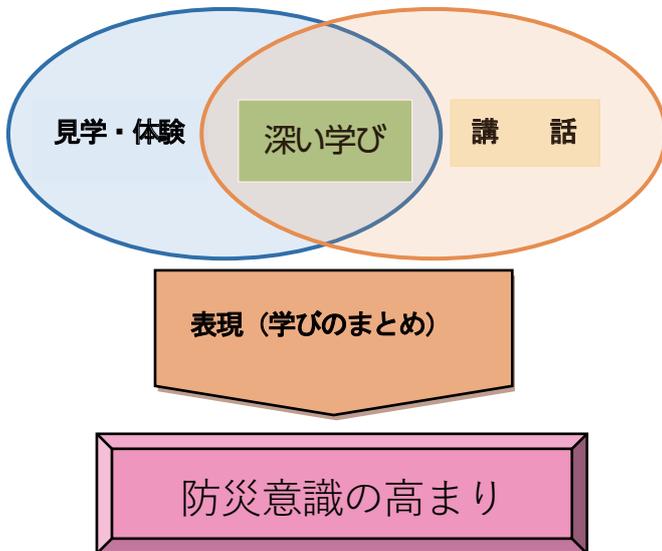
本校は、岩手山の噴火に対する防災学習が不可欠な立地であり、緊急時に避難所として開所される。

そこで、地域で想定される火山噴火の災害やその備えについて知り、また、緊急時における避難の仕方を知ることによって「防災意識を高める」ことにつなげていきたいと考える。

また、火山噴火のみならず、津波災害について知ることで、災害に対しての備えを多角的に理解し、「自分の命は自分で守る」ことの大切さを理解させたい。

II 取組の概要

防災意識を高める学習モデル図



○「防災意識を高める学習モデル図」について

上の図は、防災意識の高まりを目指すための学習モデル図である。見学や体験の活動、講話を聞く活動をそれぞれ別々に行うのではなく、リンクして行うことで、効果的な深い学びを行うことができる。また、活動で培った「深い学び」をはがき新聞にまとめ、表現することで防災意識が高まっていくことにつながると考える。

1 焼き走り溶岩流見学と火山防災に関わる講話

見学

（1）焼き走り溶岩流フィールドワーク

5・6年児童を対象に、岩手県地域防災アドバイザーを講師に迎えて、焼き走り溶岩流のフィールドワークを行った。

階段を上がって、焼き走り溶岩流に向かうと、冷えて固まった岩石がゴロゴロしていた。講師の先生より、焼き走り溶岩流は縦3～4km、横1km、面積約150haであり、国の特別天然記念物に指定されている等の説明を受けた。説明後、子ども達は岩石を実際に手に取り観察を行い、「小さな穴が開いている」「よく見ると、色は赤茶色や濃い灰色など様々な色になっている」「縞のような模様が見られるものもある」「持ってみると、思ったよりも軽い」「大きいものは、どれくらいの大きさなのだろう」などの感想が出された。



講話

（2）講話「岩手山と火山防災」

フィールドワーク後に大きく以下の3点について講話をいただいた。

ア 岩手山は活火山

岩手山は、日本に多くある活火山の一つであり、縄文時代より噴火を繰り返してきた。焼き走り溶岩流は、約290年前の噴火によってできたと言われている。記録に残る最も新しい噴火は、1919年。噴火ではないが、1995年頃から岩手山の活動が活発になった。さらに、1998年4月29日には1日285回の火山性地震が観測されたが、噴火には至らなかった。

イ 岩手山の火山防災について

1998年に、岩手山の活動が活発化したことから、関係者による火山防災対策がはじまった。1998年7月1日に、登山者の安全を守るために、7つの登山口を立ち入り禁止とした。さらに、火山活動の調査が行われるようになった。

た。調査は腕章をつけ、温度計で地熱を測定し、目で変化を観察する形で進められた。調査を通して、次のような変化が見られた。

① 地温の上昇② 笹枯れの発生③ 噴気孔の発現火山活動が収まっても、元の状態に戻るには、20年くらいかかる。

ウ 北海道有珠山の噴火の様子

2000年に噴火した北海道有珠山の様子から、岩手山が噴火したら、どうなるかを想像してみしてほしい。

有珠山の噴火では、熱泥流により道路や学校の校舎が壊されるなどの被害があった。

この後、有珠山噴火の際の火山灰を観察した。水を加えた火山灰をさわってみると、ネバネバしていた。講師の先生より水を含んだ火山灰の積もった道路では、自動車も滑り、走行不能になることを説明してもらった。

訓練後、講評とアドバイスをいただいた。

- ①建物に一時的に避難する。
 - ②大人がいたら、大人と一緒に行動する。多くの人がいるところに逃げる。
 - ③何が降ってくるかわからないので、帽子やヘルメットをかぶる。タオルでもよい。
- 噴火の際の避難の仕方のポイントをおさえた内容で、学びの多い避難訓練となった。



講話

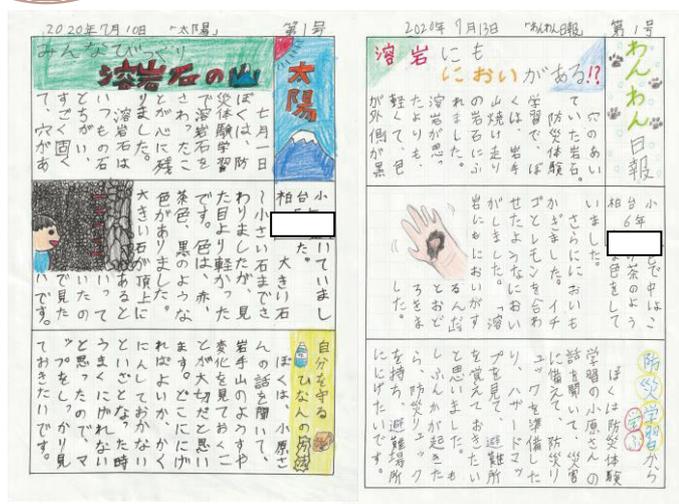
(2) 講話「岩手山監視カメラ」について

3～6年児童を対象に、盛岡地方気象台火山防災官を講師に迎えて、監視カメラに関わり講話をいただいた。以下の3点に大きくまとめられる。

- ①岩手山の火山観測体制は、地震計、監視カメラ、GNSS、傾斜計、空撮計、ひずみ計等がある。
- ②1999年12月、柏台小学校に監視カメラが設置された。その後、黒倉山火口監視カメラが設置され、現在、岩手山は二カ所の監視カメラにより、火山観測が行われている。
- ③柏台小に設置されている監視カメラの画像は、仙台管区気象台地域火山監視・警報センターに送られ、24時間監視が行われている。

表現

(3) はがき新聞による学びのまとめ



2 避難訓練と監視カメラに関わる講話

見学

(1) 岩手山噴火想定避難訓練

全校児童を対象に、県の地域防災アドバイザーを講師に迎え、火山噴火想定避難訓練を行った。

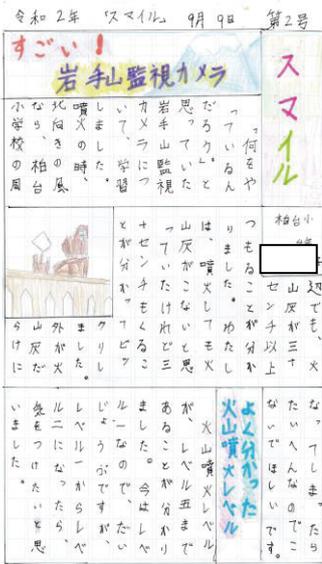
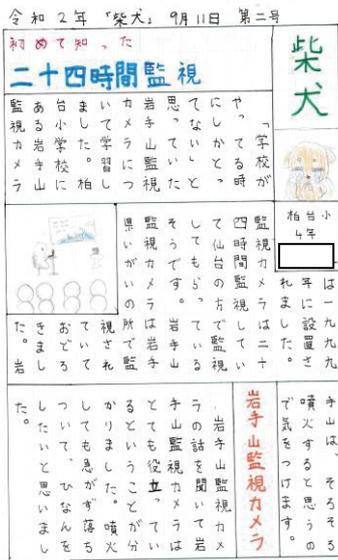
子ども達は、噴火による噴石や火山灰の被害を考え、岩手山から一番遠い一階にある図工室に避難した。子ども達は、整然と避難し、図工室にいる先生の指示に従い、学級毎にまとまって安座した。校庭から全員が図工室に避難するまで約2分だった。



表現

(3) はがき新聞による学びのまとめ

復興(内陸)



5・6年児童を対象に、岩手大学地域防災研究センター客員准教授を講師に迎えて、津波防災マップに関わる講話をいただいた。

防災マップのブルーに塗られている部分が、東日本大震災で津波が来たところを表している。緑の矢印が当時の市役所の場所。海から遠いにも関わらず、津波は防潮堤を越え、ここの4階まで押し寄せた。

ブルーの部分は、平らな平地になっていて、標高4mほどだった。ブルーの部分には、気仙川がある。津波は、気仙川を遡上し、8kmも上り被害を与えた。津波は海のそばだけではなく、川のそばにも来る。川は、津波の通路になるのである。

赤で番号が振っているところは避難場所。津波が来たブルーのところにはない。避難場所一覧にある黄色の部分は、標高を表している。

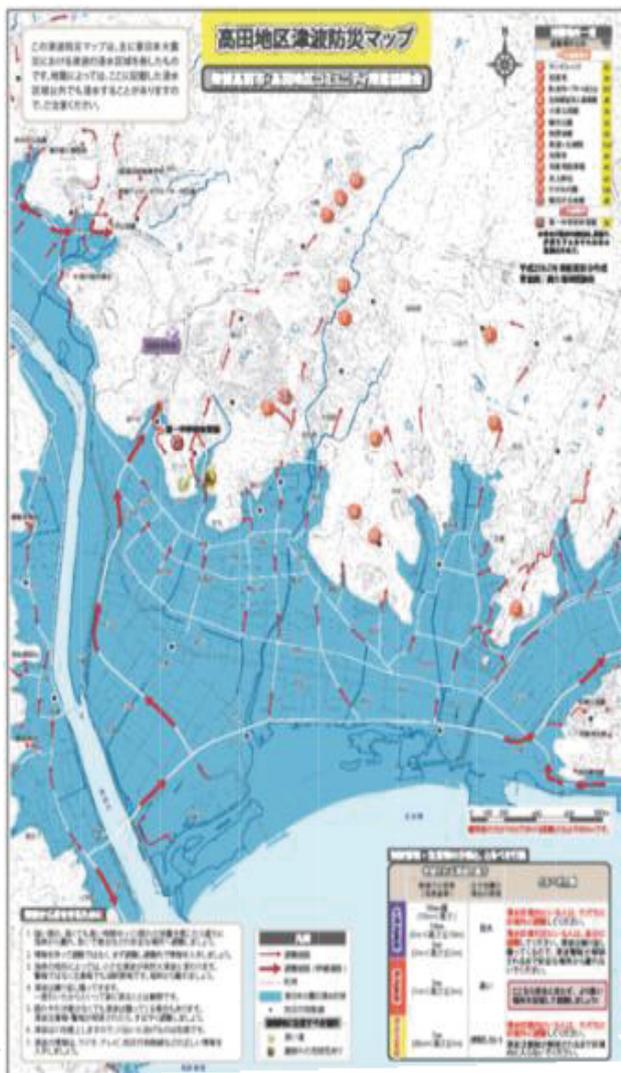
津波災害マップは、地区ごとに作成している。実際に津波が来たところから、どう逃げるかを示している。

津波は30分で来る。大きなゆれがあつたら、気仙大橋を渡って高台に逃げるとよい。高台を示すピクトグラムもある。一番大事なことは、勝手な行動をしないこと。指示に従うこと。

3 防災マップの講話と津波伝承館の見学

講話

(1) 津波防災マップの講話



見学

(2) 津波伝承館の見学

10月28日に6年生が修学旅行で、津波伝承館に見学に行った。

東日本大震災津波伝承館は、大きく4つのゾーンに分かれている。津波災害を歴史的・科学的視点からひもとく「歴史をひもとく」ゾーン。被災した実際の物、被災の現場をとらえた写真等から事実を見つめる「事実を知る」ゾーン。逃げる、助ける、支えるなど震災時の行動をひもとく「教訓を学ぶ」ゾーン。そして、「復興を共に進める」ゾーン。

また、伝承館から歩いて数分の所に「奇跡の一本松」がある。

見学した子ども達は、以下のような感想を持った。「津波による大きな被害を目の当たりにして、改めて被害の大きさを感じた。」『津波てんでん

こ』の意味を初めて知った。津波が襲ってきたら、みんなのことを信じて、それぞれで早く高台に避難する大切さを学ぶことができた。」



表現

(3) はがき新聞による学びのまとめ

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- 見学や体験の活動、講話を聞く活動をそれぞれ別々に行うのではなく、リンクして行うことで、より効果的な学習活動が展開され、深い学びにつなげることができた。
- まとめの活動をはがき新聞で行うことで、活動で学んだことを、焦点化して振り返ることができ、効果的な学びを行うことができた。
- 岩手山噴火を想定した避難訓練を行ったことにより、噴火の際の避難方法を体得することができた。また、火災や地震との避難の仕方と異なることを知ることができた。
- 火山噴火のみならず、津波災害についての学びも行うことで、災害に対しての備えをより多角的に理解し、どんな災害においても、「自分の命は自分で守る」という共通の認識を学ぶことができた。

2 課題

- 今回の取り組みの成果と課題をもとに計画を見直し、他の教育活動とのバランスに配慮しながら継続していく必要がある。
- 今後も家庭や地域、関係機関と連携をとり、より実際に即した防災教育の充実を図っていく必要がある。

復興（内陸）

4 沿岸部の学校との学びの成果の交流

沿岸部の宮古市立田老第一小学校と学びの成果の交流を行った。田老第一小学校の6年生が、総合的な学習の時間に「わたしたちのまちの今、そして未来」をテーマに学習を行った。各自で復興の課題を設定し、「命を守るために私達ができること」「新三陸道の現状と未来」などの題材で、スクラップ記事などを用いて調べたことを作品にまとめた。

今回実践交流として、お互いの実践でまとめた作品やはがき新聞を読み合い、感想を交流した。

本校の6年生は、修学旅行で津波の被災地見学をして学習したこともあり、より真剣に自分事としてとらえ感想をまとめた。火山被害も津波被害もどんな災害においても、自分の命は自分で守ることの大切さを再認識することができた。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、八幡平市の豊かな自然が育んだ産業と環境について学ぶ「農と輝の大地の学習」に取り組んでいる。この学習を通して地域における農業や職場体験活動を行うほか、自然愛護少年団活動を通して、八幡平市の自然を愛護する心と郷土を理解し発展させようとする人材の育成に努めている。

一方、本校は、岩手山麓に位置する学校として、「岩手山の噴火の歴史」と「火山災害への対策」の理解も重要であると考えている。そこで、本年度は地域の実情を踏まえた「火山の噴火と防災対策」に関する復興防災教育に取り組みたいと考えた。

II 取組の概要

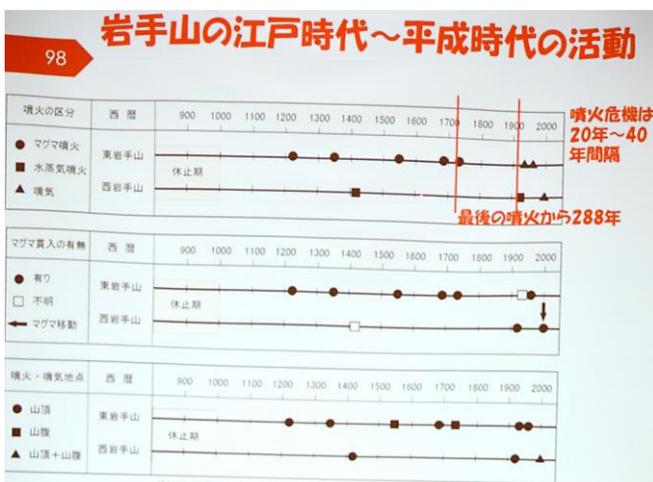
1 学校防災アドバイザー「岩手大学客員教授 土井宣夫先生」による防災講習会

(1) 講義内容

- ア 地球の歴史とマグマによる火山活動
- イ 岩手山の縄文時代の山体崩壊と火砕流
- ウ 岩手山の火山活動の歴史 江戸～縄文
- エ 岩手山観測とハザードマップ
- オ 学校が避難所になる

(2) 助言

- ア 岩手山噴火の前兆現象と具体的な避難行動
 - イ 中学生と職員が学校を知り尽くした避難所案内人となる
- 「助けられる人」ではなく「助ける人」



過去の記録から、岩手山の噴火の危険度は20～40年周期で高まる。最後の噴火からは約290年経っている。

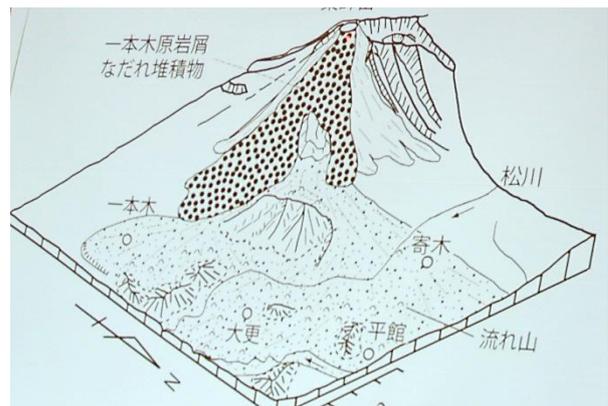
火山災害の特徴

- ▶ 東北火山は長い休止期の後に活動
- ▶ 活動期間は1か月以上。長期化しやすい(10年以上の場合も)
- ▶ 多様な噴火現象。高温・高速・埋没・ガスで被災。

注意しなければならない岩手山の火山災害と特徴



東岩手山の噴火口



6800年前の山体崩壊とその痕跡地形である流山

(3) 生徒の感想

- ・自分が生きている限りではまだ岩手山の噴火を見たことがなかったので安心だと思っていたけれど、あと20年後の2040年頃に再び噴火する可能性があるという聞いて驚いた。気を引き締めて生活していきたい。
- ・火砕流は時速100km/hというかな

り速いスピードで襲ってくる。そして、500度から600度近い高温なため危険であること、噴火を予知することは今もこれからも確実にできないことがわかった。

- いつ噴火してしまうかわからないので、噴火したらどうするか、改めて家族と話し合いたい。
- 防災マップを確認し、噴火が起こる前の事前の準備をしっかりと、もし噴火があっても冷静に行動できるようにしたい。
- もし火山噴火があり避難したときには、助けられるのではなく、助ける側になりたいと思います。
- もし、岩手山が噴火したら、自分から率先して避難所を案内したい。



21年前、活動が活発化し山肌から蒸気が噴き出す様子



土井先生の話に驚き、聞き入る1年生の様子

2 八幡平市役所防災安全課職員による避難所運営実習

(1) 実習内容

- ア 防災全般についての説明と防災用語
- イ 行うべき防災活動
- ウ コロナ禍での具体的な避難所運営
総務班・健康確認班・受付班・保健衛生班
管理班・避難班に分かれた実践行動

避難所班編成・任務等

班名	学年	人数	任務	資材
総務班	3年	4人	○避難者の把握 ○避難所内の統かつ	長机×1 パイプ椅子×2 ホワイトボード×1 ボードマーカー 筆記具
健康確認班		8人	○避難者の誘導 ○健康状態の確認 ○受付・問診票へ体温の記入 ○避難場所の指示	長机×1 パイプ椅子×2 受付票×64 筆記具 フェイスシールド×4
受付班(一般)		8人	○受付・問診票へ記入させる ○避難者の誘導 ○避難者への指示	長机×2 パイプ椅子×4 筆記具
受付班(感染疑者)		6人		長机×1 パイプ椅子×2 つい立×4 フェイスシールド×4 筆記具
保健衛生班		16人	○手指、筆記具の消毒 ○体温測定 ○健康状態の把握	長机×1 非接触型体温計×3 消毒液×5 タオル×5 フェイスシールド×8
管理班		10人	○パーティション、テントの組み立て	パーティション×4 テント×1
避難班		2年・1年	64人	○地区住民として避難者役

避難所開設に必要な役割と分担の一覧表

(2) 助言

- ア 災害は、いつ、どこで起きるかわからない
- イ 災害をなくすことはできない
- ウ 「自助、共助、公助」で日ごろの備えが大事
- エ 「支えられる人」から「支える人」になろう

八幡平市立松尾中学校
記入日：令和2年11月27日(金)

防災講習会プリント

3年 A組 1番 氏名

【講習会テーマ】
「火山の噴火と防災対策について」
～暮らししている地域で起こりうる災害から自他の命を守るために～

※ 回答は簡潔書きでもかまいません

1. 火山噴火の防災対策で心がけていることは何ですか。火山噴火が起きたことを想定して気をつけることは何だと思いますか。

・避難所への経路の確認

【MEMO】
噴火は100km 600℃以上 火砕流や火砕砕片が降りかかる
噴火は山肌から蒸気が噴き出す様子
岩手山は何回も噴火して山頂が溶けてしまった
火山灰が降り注ぐ
※ 回答は簡潔書きでもかまいません

2. 今回の講習で、「印象に残っていること」「ためになったこと」「今後生かしていきたいこと」それぞれ書いてください。

【印象に残っていること】
・火砕流が自分で思っているより、もっと危険なものということ。
・私達も助ける人になれるということ。

【ためになったこと】
・避難(下宿)自分たちが行動するべきこと。
・火砕流よくわかったこと。
【今後生かしていきたいこと】
・もし、岩手山が噴火したら、自分から率先して避難所を案内したい。

★提出：11月30日(月)朝、学校担任



避難所開設実習での役割と具体的な行動と注意点の確認



コロナ禍における個人情報と健康状態の確認



症状別による避難者の仕分けと隔離



避難者のためのテント設置とパーテーション設置

(3) 生徒の感想

- ・防災学習の避難所運営は初めての体験でした。実際に避難所運営してみたらしらしてみたら、結構大変でした。本当になったときはもっと大

変だし、焦ってしまうと思うけど、落ち着いて行動することが大切だと思いました。・防災学習の避難所運営をやってみて、一人一人がやるべきことをやらないとまとまらないことがわかりました。今後は、率先して行動できるようにしていきたいです。

- ・防災訓練では、初めて運営する側となり、仕事の大変さがわかりました。災害が起きたら動ける人になりたい。
- ・今日、防災学習の避難所運営がありました。災害はいつ起きるかわからないので、しっかりと備える必要があると思いました。実際の動きを通して、たくさん学ぶことができました。
- ・受付班の実習だったけど、すごく大変でした。これが、もし本番だったらもっと大変だし、動く勇気があると思いました。そう考えると、今、コロナで医療従事している方には感謝しかないと思いました。



個人情報をもとにした避難者数の把握と掲示

防災講習会プリント

3年A組 18番 氏名 _____

【講習会テーマ】
「防災活動と避難所運営について」
～暮らししている地域で起こりうる災害から自他の命を守るために～

※ 回答は簡潔書きでもかまいません

【事前】 朝の短学活で日本災害食「カンパン」を食べて、防災活動の避難所運営について知っていることを書きなさい。また避難所運営でどういう行動を心がけるか書いてください。

自分からはお菓子に近い感じでしたが、このような状況がある場合は大きな違いは分かりませんが、非常食が水も備蓄すること、用事をよく考えておくことも考えて行動すること。

【講師】 ☆講師：市役所防災安全課 防災対策専門員 瀬川正雄先生

【MEMO】
実習・体験
・想定外
・大規模
・予測は困難
・水・食料・工材・地震・管理

※ 回答は簡潔書きでもかまいません

2. 今回の講習で、「印象に残っていること」「印象になったこと」「今後どのように生かしていきたいか」、それぞれ書いてください。

【印象に残っていること】
・自備から災害に備えて準備することや、災害に備えて家族と話し合ふことの大変さ。
・避難所の運営には、たくさんの人の連携が必要ということ。
【ためになったこと】
・避難情報の種類を改めて詳しく知ることができたこと。
・避難所の運営にはたくさんの役割が必要ということ。

【今後生かしていきたいこと】
・避難所運営を体験できたので、災害が起きたときには、自分から積極的に行動し、地域の人々のために動けるようになりたい。

★製出：12月11日(金) 朝、学級担任

- (4) 生徒が今後の生活に生かしていきたいこと
- どんな状でも、自分にできることを探し、進んで行動するように心がける。
 - 自分で積極的に行動し、自分のことも、周囲の人も助けられるようにする。
 - 自分の仕事に責任を持ち、自分には何ができるかを考えて生活する。
 - 中学生という人材は大きな原動力になるので、積極的に動く。
 - 自分たちが、地域の人役に立てるように頑張る。
 - 積極的に行動し、地域の人のために動けるようになりたい。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 取組の成果

- (1) 学校防災アドバイザーによる防災講習会により、火砕流の危険性、岩手山噴火の前兆現象と避難準備の開始など、生徒の「岩手山の噴火と防災対策」への意識の高まりが感じられた。
- (2) 八幡平市役所防災安全課職員による避難所運営実習では、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた避難所運営を学ぶことができた。
- (3) 避難所開設は、単に被災者を受け入れるのではなく、避難者の個人情報と状況の把握、状況に合わせた区分け、物品の管理と補充、居住スペースの確保など様々な役割分担を理解できた。
- (4) 生徒自身が「助けられる人ではなく、助ける人」「支えられる人から支える人」という強い認識を持つことができた。

2 取組の課題

- (1) 盛岡地方気象台職員などの様々な分野のアドバイザーによる防災講習会を継続的にを行い、「火山の噴火と防災対策」の知識を高めていきたい。
- (2) 冬季に火山活動が活発化した場合、マグマの熱による火山泥流が発生する可能性が高く、大規模泥流の場合には本校も被災区域に含まれる。より身近な火山災害として火山泥流についての学習も詳しく進めていきたい。
- (3) 学校だけではなく、地域住民と連携協力した「避難訓練」「避難所運営訓練」ができるように努めていきたい。
- (4) 今後は防災学習と地域の歴史や地理、産業を関連付けた地域理解の学習を今まで以上に進めていく必要がある。



避難者と担当者に分かれ、相互の立場での体験



ハザードマップをもとに地域と学校周辺の災害の確認



年代表の感想発表各学



生徒代表による講習への感謝と今後の防災学習への決意発表

「いわての復興教育スクール〈内陸〉」（学校安全総合支援事業）成果報告書

学校名：矢巾町立煙山小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

矢巾町は、県中央に位置し、田園地帯が広がる自然豊かな環境にある田園都市であり、自然災害については比較的安全な地域である。

一方、一昨年の岩手医科大学付属病院の矢巾町移転に伴い、学区の交通量や他市町村からの人の出入りが飛躍的に増えており、安全・防犯に関する懸念が大きくなってきている。

そこで、防災・安全・防犯等の面から児童の「自らの危険性を判断する力の育成」を重点にして本事業に取り組んだ。

II 取組の概要

1 副読本「いきる かかわる そなえる」の活用計画作成

学校の教育活動として復興教育に組織的に取り組み、目標達成に必要な教育内容を教科横断的な視点で有機的に指導できるよう、副読本「いきる かかわる そなえる」の内容と、各教科・学級活動・総合的学習の時間などのねらいがどのように関連しているかを表した一覧表を作成している。初版、改訂版のどちらも活用計画を作成し、併用することで復興教育の充実を図っている。

例えば、5年生の社会科「情報を伝える人々とわたしたち」の学習では、副読本「いきる かかわる そなえる」の『正確な情報を得て、デマにまどわされない』の活用ができるように計画されている。災害時に正しい情報を得るにはどのようにメディアを活用するか考えさせる中で、いつもはテレビやスマートフォンで情報を得ているが、災害時には停電が起こる可能性があることや、インターネットには嘘の情報もあることから、普段あまり使わないラジオの良さを見出すことができ、目的や状況によってメディアを使い分ける意識が高まった。

また、毎年3月11日を「防災を考える日」として、各学年の発達段階に合わせ、「いきる かかわる そなえる」のどのページを扱い、どんな内容を指導するのか計画に位置付けることで、震災の教訓を語り継ぐことができるようにしている。

教育的価値	題名	具体的21項目	活用学年			教科・領域との関連	
			4	5	6	学年	教科領域
メッセージ	ありがとうの手紙		0				
いきる 生命の大切さ・心のあり方・心身	1 もう一簇、花いっぱい船越に	① かけがえのない生命	0		5・6	道徳	ほろい(まがひ)の物語に登場する人々の生き生きとした姿、自然の恵み、命の大切さ
	2 不安やいらだちをわらげた光	① かけがえのない生命	0		5・6	道徳	① 勤労、公共の精神
	3 川は空物	② 自然との共生	0		5・6	道徳	① 自然愛護
	4 宝楽熱帯雨林文化村の黒森神楽を伝承する	③ 価値ある自分	0		5・6	道徳	② 誇り、自信の精神 伝統文化の継承、誇りをもつ態度
	5 いまも花巻に生きている賢治さん	④ 希望と努力、努力と強い意志	0		5・6	道徳	A 希望と努力、努力と強い意志
	6 奥州市から世界へびたつた大谷穂平選手	④ 希望と努力、努力と強い意志	0		5・6	道徳	A 希望と努力、努力と強い意志
	7 さきまな分野で活躍した盛岡の先人たち	⑤ 自分の成長	0		4	社会	(4) ア(イ) 歴史と人々の生活
	8 ふだんの生活に密着している盛岡の先人教育	⑤ 自分の成長	0		5・6	道徳	B 個性の伸長 希望と努力、努力と強い意志
	9 目に見えない「心の思い」を話してみよう	⑥ 心の健康	0		5・6	道徳	B 相互理解、寛容
	10 まちの歴史を語り継ぐ	⑥ 心の健康	0		5・6	道徳	B 相互理解、寛容
			0		4	社会	(5) ア(ア) 地理的環境と人々の生活

【副読本（4～6年生用）の活用計画の一例】

2 安全マップの作成

児童の「危機回避・危機予測」の力を高めることをねらいとし、防災アドバイザー 岩手県立大学 宇佐美誠史准教授を招いて、5年生を対象に安全マップ作りを行った。

(1) 事前学習

身の周りには、交通安全、防犯、災害などの危険があることや、日頃からできる対策、危険な目にあってしまった時の対処などについて、宇佐美准教授から教えていただいた。具体的な画像を使いながら、クイズ形式で身近な危険箇所を紹介していただき、児童は身近な危険に対する認識を楽しみながら深めることができた。





(2) フィールドワーク

事前学習で学んだ事を生かし、実際の通学路にはどのような危険箇所や、避難場所、助けを求められる場所があるかを探した。学校を中心として東西南北の4コースに分かれ（各コース3グループ～4グループ）、グループごとに写真記録係や危険発見係、地図係などの役割分担をしながらフィールドワークを行った。

児童は事前学習で学んだポイントをもとに、交通量が多い道路、ガードレールのない歩道、犯罪が起こりそうな場所、大雨の際に水があふれそうな場所など、通い慣れた通学路にも多くの危険があることに気付くことができた。

宇佐美准教授にも同行していただき、児童が気付かない危険などについて、その場でアドバイスしていただいたことで、児童の危険を判断する力が高められた。



(3) 安全マップづくり

フィールドワークで写真に撮った場所を、交通安全・不審者・災害・避難場所に分類して色を分け、地図にシールを貼っていった。また、写真を撮った場所がなぜ危険なのか、どのように身を守るのかなどをカードに書いてまとめた。4コースに分かれて探した危険箇所・避難場所が、1枚の大きな地図にまとまった。



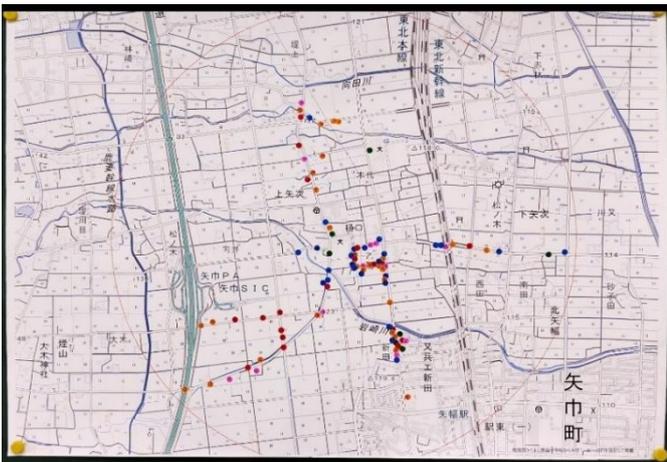
【危険箇所カードの一例】





(3) 被災地訪問での学びを下級生へ

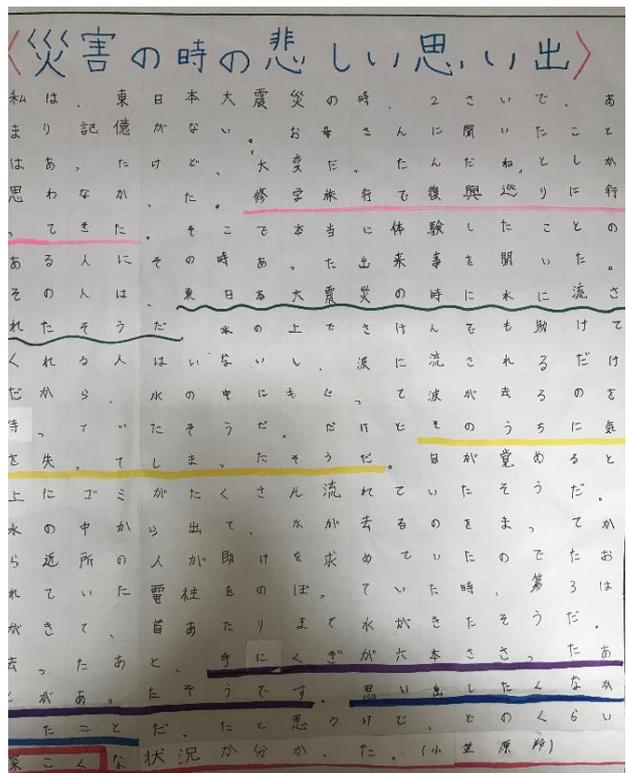
今年度の修学旅行は、新型コロナウイルス感染防止のため、県内の被災地を訪れるコースとなった。6年生は、釜石市の復興スタジアムを訪れたり、被災者の方の話を聞いたりして、内陸で生活する中では知ることのなかった震災の様子について学ぶことができた。震災当時はまだ幼かったり、生まれていなかったりして震災をよく知らない児童が増えている中、震災を自分の口で語れる人を増やし、語り継いでいくことは大切である。そこで、被災地訪問で学んだ被害状況や復興の様子などを、6年生から5年生へ伝える場を設定した。5年生は真剣な表情で発表を聞き、震災について初めて知ったことなどカードいっぱい感想を書き、発表していた。

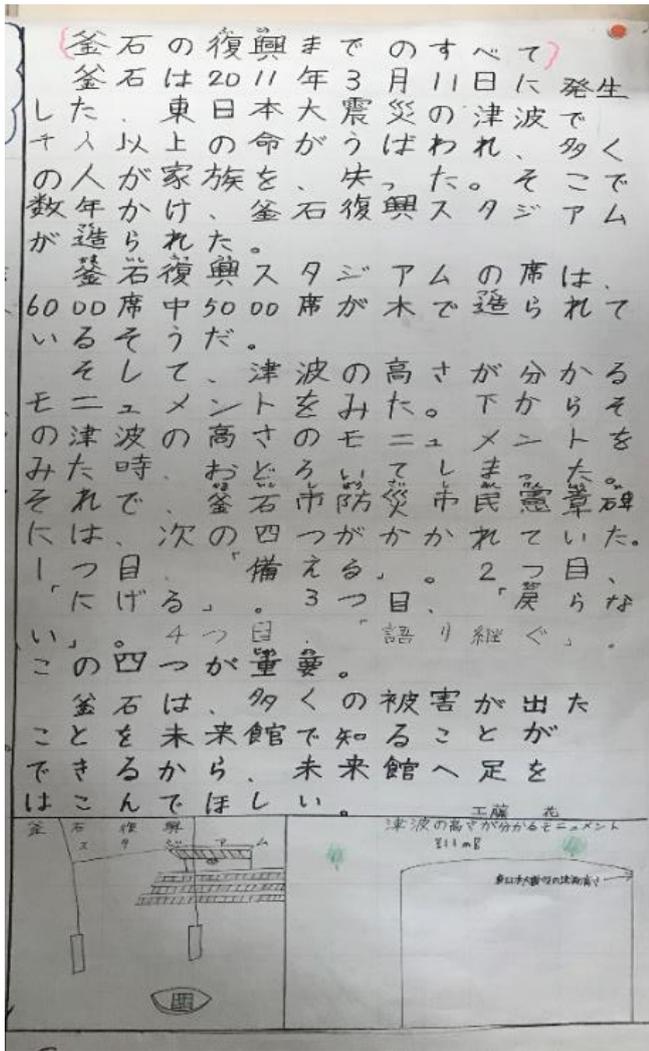


【完成した「通学路安全マップ」】

(4) 発表交流

自分が歩かなかったコースにどのような危険があるか知るため、グループ毎に発表を行った。地図を指しながら、どこにどのような危険があると考えたか、どのように身を守ることができるかを説明することができた。また、4コースの危険を1つの地図にまとめて交流したことで、地域によって危険箇所の違いがあることや、自分たちの学校の周りにはどんな危険が多いかに気付いて発表する児童もおり、児童の安全意識の高まりを感じた。





〔5年生の感想〕

- ・命を守るには、「にげる、もどらない、そなえる、語りつぐ」が大切だと分かりました。東日本大震災を、語りつぎたいです。
- ・「にげる、もどらない、そなえる、語りつぐ」の4つの言葉の「にげる」では、にげることは、はずかしくないと思いました。
- ・津波が来て、自分で判断して生き残ったと聞いて、すごいと思いました。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 副読本「いきる かかわる そなえる」の活用計画作成

○活用計画を作成することで、復興教育を教育活動の中で組織的に行うことができ、各教科などと横断的な視点をもつことで復興教育の広がりが見られ、これまでの教育活動の補完・充実につながった。

▲副読本「いきる かかわる そなえる」の内容が、各教科等とどのように関連付けられるかは示されているものの、具体的な活用の仕方が分からないという声がある。復興教育について、どの時期（単元）に、どのような教育活動を行い、どんな姿を目指すのかという構想を明確にして共通理解を図らなければならない。

2 安全マップづくり

○事前学習で具体的な画像やクイズで身の周りの危険について教えていただいたことや、フィールドワークで専門的な助言をいただいたことにより、児童は様々な視点から危険箇所を見付けることができ、「危機回避・危機予測」の力が高まった。

▲制作した安全マップの効果的な掲示と、次年度入学した1年生に危険箇所を教えるなどの利用の仕方を考え、学びを発信することができるようにしなければならない。

3 被災地訪問での学びを下級生へ

○東日本大震災を知らない児童が増えている中、被災地を訪れ、自分の目で見たものや耳で聞いたことを、自分の口で後輩へ語り継ぐことができた。

○被災地の話を6年生から聞いた5年生も、被災地への関心や防災への意識が高まった。

▲今年度は新型コロナウイルスのため例外的に被災地を訪問したが、そこで高まった震災や防災、復興への意識の継続を図りたい。そのために、復興教育における防災学習の、各学年の年間計画の見直しが必要である。

「いわての復興教育スクール〈内陸〉」（学校安全総合支援事業）成果報告書

学校名：矢巾町立矢巾東小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、盛岡市中心部より南に13km、矢幅駅より北東に位置し、盛岡市とも隣接する豊かな田園が広がる農村地帯である。近年、国道4号線及び矢巾スマートインターチェンジ開通などの交通網の整備とともに、県央経済圏の中に組み込まれ、新興住宅地の造成に伴い、盛岡のベットタウンの様相が加速してきている。また、令和元年度には岩手医科大学附属病院が完成・移転したことに伴い、交通量の増加等地域環境が激変している。

本校では、学校教育目標の具現化に向けた取組の一つとして、「いわて復興教育プログラム」に基づいた教育内容の改善に取り組んでいる。復興教育の3つの教育的価値「いきる」「そなえる」「かかわる」と関連付けて、地域や身近な課題の解決に向け、各教科等で身につけた知識・技能を横断的に活用する力を身に付けさせ、夢や希望をもって社会を創造する意識の育成を目指している。

II 取組の概要

1 地域の関係機関と連携した生活（交通）安全の取組（児童会活動）



平成30年3月の矢巾スマートインターチェンジの開通及び令和元年9月の岩手医大附属病院の移転開業による交通量の増加や車の流れの変化に伴い、本校学区において、通学路を含めた学校での児童の安全確保、特に交通安全については喫緊の課題である。日頃は、本校教職員だけでなく、地域のスクールガードボランティアの方々とともに、児童の登下校の見守り活動を行っている。しかし、児童としては、「守

られている」という意識が強く、児童自らが、自分の生命・安全を「守ろう」という意識が弱いと感じる。

そこで、「横断歩道・チェック・ストップ運動 in 矢巾町」や「秋の全国交通安全運動結団式」にあわせて、「地域の安全を皆で守る日」の活動を設定し、児童会リーダーを中心に交通安全を呼びかける取組を行うことで、交通安全への意識を全校児童や保護者、地域に広げていきたいと考えた。



(1) 交差点での交通安全の呼びかけ

ア 児童会執行部児童が、岩手医大周辺の交通量の多い交差点に立ち、交通安全を呼びかけた。子ども達は、おそろいの「矢巾東小安全守り隊」ベストの上から、毎日登下校時に着用している「ピカッポたすき（反射材付きたすき）」を掛けて参加した。

イ 当日は、矢巾町長を始め、矢巾町役場の関係者や矢巾中央交番、地域の交通安全協会の方々等たくさんの地域の方々とともに地域の交通安全意識を高めるための活動に取り組んだ。

(2) 秋の全国交通安全運動結団式への参加

ア 交差点での呼びかけ活動が終わった後、会場を本校校庭に移して行われた秋の交通安全運動の結団式へも参加した。

イ 結団式の中では、本校児童会会長より、「交通安全の誓い」を發表し、交通ルールを守ることや「ピカッポたすき」を正しく着用することを誓った。



2 復興教育を学習の中核に位置づけた修学旅行（第6学年）

例年通り6月に予定していた修学旅行（仙台方面）が、コロナ禍の影響で2学期に延期となった。そこで、6学年担任団を中心に、修学旅行における学習のねらいについて、カリキュラムマネジメントの視点から見直しを図った。その結果、復興教育に重点を置いた学びの場を設定することとし、検討を重ね、以下のような実施計画を立案し、実施した。

（1）ねらい

- ア 岩手県内の被災地域である釜石市や宮古市、久慈市などの三陸沿岸の現地学習を通して、まちの復興に向けて取り組んでいる人々の想いを知るとともに、めざましい発展を遂げる矢巾町とを重ね合わせ、自分たちの未来のまちづくりへの関心を高める。
- イ 総合的な学習の時間で調べたことを実際の場で確かめ、理解を深める。
- ウ 集団行動を通して社会的道徳の理解を深め、進んできまりを守る態度を養うとともに、集団の一員としての望ましい行動様式を身に付ける。
- エ 事故を未然に防ぐ注意力と安全に対する配慮の実践化を図る。
- オ 児童と教師とが行動を共にすることで、お互いの人間関係をより一層密にし、充実した学校生活への発展の機会とする。

（2）期日

令和2年11月5日（木）～6日（金）

（3）目的地

岩手県釜石市・宮古市・久慈市（三陸沿岸方面）

（4）テーマ

ふるさと 岩手を見つめる

（5）学習内容

復興教育として行う見学・体験活動について、以下の4点を計画し、実施した。

<1日目>

- ア 釜石鶴住居震災プログラム【見学・体験】
 - ・学級毎に、「いのちをつなぐ未来館見学」「祈りのパーク見学」「鶴住居小・釜石東中児童生徒の避難路追体験」の3つの活動を実施した。
 - ・児童は、職員の方々の説明や案内で、震災当時の様子を追体験することができた。



イ 釜石鶴住居復興スタジアム【見学・体験】

- ・被災した鶴住居小学校・釜石東中学校の跡地に、復興の願いを込めて建設された釜石鶴住居復興スタジアムを見学した。
- ・当日は釜石シーウェイブスR.F.C.の選手と一緒にラグビーをしたり、親しく交流したりすることができ、震災後の大変な状況から、ラグビーワールドカップが開催されるまでに至った復興の過程を強く実感することができた。



< 2日目 >

ウ みやこ浄ヶ浜遊覧船乗船【見学・体験】

- ・令和3年1月で一旦営業を終えた浄土ヶ浜遊覧船に乗船した。
- ・ウミネコへの餌付け体験をしたり、海の上から三陸海岸の美しい景色を堪能したりすることができた。



エ 三陸鉄道貸切列車乗車【見学・体験】

- ・普代駅から久慈駅まで、三陸鉄道の貸切列車に乗車した。
- ・車窓から眺める美しい三陸の海景色は、一人ひとりの心にたくさんの思い出とともに深く刻まれた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 本校の喫緊の課題である交通安全の取組について、地域の関係者と一緒に活動することができたことで、児童が地域の一員としての自覚をもつことができたと同時に、交通安全の取組を「自分事」として考えさせることができた。
- (2) 近年、復興教育副読本等での間接的な学習にとどまってしまうことが多かったが、復興教育を中核に据えた修学旅行を実施することができたことで、児童一人ひとりが、震災当時の様子を追体験することができたと同時に、復興に向かう人々の想いや、三陸沿岸の自然、文化等に触れ、自分たちのふるさと矢巾町のよさについても考えることができた。
- (3) コロナ禍の状況をチャンスと捉え、例年通り岩手県外への旅程で行われる傾向のある修学旅行について、復興教育の視点から見直す事ができたことで、本校の学校教育目標の具現化に向けた取組である「いわて復興教育プログラム」に基づいた教育内容の改善を行うことができた。

2 課題

- (1) 今年度は、コロナ禍のため、高学年中心の実践となってしまったので、学習や活動を通して学んだ知識や身に付けた力を、全校や地域に広げたり、具体的な実践に生かしたりしていくための手立てを工夫する必要がある。
- (2) コロナ禍の中、様々な教育活動の見直しや改善に取り組んできたが、次年度以降も取組を継続していくために、年間指導計画や指導内容の見直しを行う必要がある。
- (3) 地域の実態に合わせた持続的で発展的な防災安全・生活安全・交通安全等の取組を、学校だけではなく、保護者、地域、関係機関などが一体となって取り組んでいく体制を構築する必要がある。

【資料】6年児童の感想

修学旅行での学習をまとめたパンフレットから、児童の感想をいくつか紹介する。

○「釜石」「宮古」と命の大切さ

私は、釜石や宮古に行って、改めて命の大切さを学びました。釜石では、あの日釜石の人たちが通った避難経路を体験しました。その道を歩いているとき、後ろを振り返ってみました。そこには釜石のまちの景色があって、とてもきれいでした。こんなきれいなまちが、あの日津波にのまれるなんて…と思いました。そこで、私は自分の地域が津波にのまれたところを想像してみたら、とてもこわくなったし、涙が出てきそうになりました。このとき、命の大切さについて改めて実感しました。学んだことや考えたことを、これからの生活や学校の授業などに生かしたいです。また、起きた出来事はとても大変だったけど、釜石の人たちは、今とてもたくましく自分たちのまちの復興をがんばっているということを、兄弟や自分よりも下の子達に伝えていきたいと思いました。



○負けない釜石

ぼくは、釜石の人達が、震災に負けずに前を向いている姿を学びました。そして、なぜそこまで負けずに笑顔でいられるのだろうかと考えました。それは、釜石に行ったとき、釜石の人達全員が震災がなかったかと思うほど、明るく笑顔だったからです。また、なぜそこまで負けずにいられるのだろうかと考え、たずねてみると、「このような震災が、また起こったときのため、伝えていかなければならない。」ということを知り、納得しました。

このように、震災に負けずに前を向き、復興し続けたから、ラグビーワールドカップも開かれ、この9年間で、あそこまで変わることができました。だから、負けない釜石は、本当に強くて、すごいです。ぼくは、これから、とても辛いことや大きいかべがあったとしても、あきらめず、釜石の人達のように、負けずに前を向いて乗り越えていきたいです。

○考えて実行

私は、この修学旅行で「考えて実行する」ということを学びました。特に、1日目の震災プログラムで、震災当時の釜石の小学生は、津波が来るかもしれないと思い、高台に避難したという話を聞いて、命を守るために必死に考えたのではないかと思います。また、それを見た地域の人も高台に向かい助かったと聞き、自分の命だけでなく周りの人の命も救った事がとてもすごいと思いました。震災当時の釜石の小学生のように、私も自分で考えて実行できるようになりたいと思いました。そして、残りの小学校生活で、周りの人に左右されずに、自分の意見を言える力をつけていきたいです。



○海とつながっている

三陸鉄道に乗っているとき、車窓から海が見えました。キラキラと日光が水面に反射してとてもきれいでした。海を見ていると、何か力強さを感じました。それはなぜかという、海に修学旅行で出会った人々の笑顔が浮かんできたからです。あの日とても辛い思いをしてから、今日までたくさん失ってきたはずなのに、ぼくたちに、みんな笑顔で接してくれたことを思い出しました。三陸の人は海とつながっているのかな、と思いました。改めて、三陸のすばらしさを知ることができました。

○修学旅行で学んだこと

1つめは、1日1日を大切に過ごすということです。今は、新型コロナウイルスがはやっていて、いつ何が起こるのか分からない状況なので、1日1日を大切に過ごしたいです。

2つめは、辛いけれど、その辛いことを次の世代の人に伝えていくことです。祈りのパークを案内してくれた方は、東日本大震災で辛い思いをしたけれど、私たちにたくさんその想いを伝えてくれました。だから、私達も次の世代に伝えていきたいです。

I 事業の概要（地域の実情含む）

宮古市立津軽石中学校との合唱交流会を通して、以下の生徒の資質・能力を育むことをねらいとする。

- (1) 合唱の交流を図ることで相手校の良さを知るとともに、今後の自分たちの活動への意欲を高める機会とする。
- (2) 交流に向けた取組を通じ、郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成を図る。
- (3) 生徒一人ひとりが他者や社会との関わりを考える機会とする。

II 取組の概要

＜津軽石中学校との合唱交流会＞

- (1) 実施日 令和2年9月9日（水）
- (2) 場所 宮古市立津軽石中学校
- (3) 参加者 教員、生徒会執行部、矢巾北中学校特設合唱部（計57名）
- (4) 内容

①事前学習

生徒会執行部と特設合唱部が集まり、津軽石中学校と合唱交流をする目的を共有した。

＜生徒会執行部の目的＞

他校の文化や生徒会の取組を自分たちの活動と比較することで、今後の活動への意欲を高めるとともに、自分たちの学校の文化を紹介するにあたって、人に伝えるために必要な工夫を学ぶこと。

＜特設合唱部の目的＞

津軽石中学校と合唱練習を通して交流し、相手校のよさを知りながら親交を深めるとともに、自分たちの合唱への取り組み方の視野を広げること。



合唱交流会の目的を確認する

当日までの約1週間は、生徒会執行部と特設合唱部で協力しながら、合唱練習や学校紹介の流れを確認した。矢巾北中学校の紹介では、体育祭など年間を通して様々な場面で披露する矢北の応援を紹介することに決め、練習に取り組んだ。取組の進行はすべて生徒が行い、工夫すべきところなどを自分たちで考えて動き、お互いに意見を出し合いながらパフォーマンスをつくりあげていった。



リーダーを中心に合唱と応援の練習に取り組む



生徒会執行部と特設合唱部で互いの役割を確認する

②合唱交流会

ア 学校紹介及び合唱披露

<合唱交流会次第>

- 1 開会の言葉
- 2 校長挨拶
- 3 生徒会代表挨拶
- 4 学校紹介及び合唱披露
- 5 合唱合同練習
- 6 感想発表
- 7 閉会の言葉

※コロナウィルス感染症予防対策について

- ・会場は、窓を開放して常に換気をする。
- ・マスクを着用する。
- ・入口で手を消毒する。
- ・可能な限りソーシャルディスタンスをとる。
- ・発熱、健康状態を事前に確認する。



津軽石中学校生徒による「いのちの歌」合唱披露

学校紹介では、津軽石中学校は、生徒会執行部が郷土芸能の様子をVTRで紹介し、合唱「いのちの歌」を披露した。矢巾北中学校は体育祭での応援合戦の様子をVTRで見せた後に実際に応援を披露した。



矢巾北中学校の学校紹介



矢巾北中学校生徒による応援披露

イ 合同合唱練習

合同合唱練習では、各パートに分かれて練習を行った。各パートリーダーが進行や音取り、リズム取りを担当した。他の生徒は矢巾北中学校と津軽石中学校で交互に並び、ポイントになる部分や歌い方を矢巾北の特設合唱部が隣でアドバイスをしながら練習を進めていった。

パート練習後、全体で合わせて合唱を行い、今回の交流会でお互いに学んだことを各パートで交流した。



ソプラノパートの合唱合同練習



アルトパートの合唱合同練習



男声パートの合同合唱練習



全体での合唱

Ⅲ 取組の成果と課題

合唱交流会を通して学んだこととして、以下に生徒の感想を載せる。

矢巾北中学校生徒会会長 きくちゆいな
菊池結菜

皐月祭が終わってすぐ私たち生徒会執行部は、特設合唱部と共に、学校の代表として、津軽石中学校のみなさんと交流をしてきました。津軽石中学校は、矢巾北中学校よりも全校生徒数が少ない学校です。そのため、学校行事などでは学年関係なく全校で協力して取り組んでいました。さらに、津軽石に伝わる伝統芸能の伝承を取り組みの一つとして行っており、地域のみなさんとの結びつきが強いと感じました。今回の学校交流では、津軽石中学校からたくさんのことを学び、矢巾北中学校のよさや課題に気づくことができました。

矢巾北中学校の課題としては、地域のみなさんとの交流の少なさが挙げられます。私たちは、伝統芸能の伝承などの取り組みは行っていませんが、今後地域のボランティア活動に参加するなど、地域のみなさんと協力して取り組みを行うことで、地域のみなさんとの結びつきを強めることができると思います。

また、この交流では改めて先輩方が残してきてくださった伝統の素晴らしさを感じることもできました。特に、交流のメインであった合唱で「魂をゆさぶる表現活動」

のよさを感じました。今後は、この交流で気づいた矢巾北中学校のよさや課題を次の活動や生活で活かしていきたいと思います。

矢巾北中学校特設合唱部 しどきわ
宍戸咲羽

私たち特設合唱部は、生徒会執行部と共に矢巾北中学校の代表として、津軽石中学校の皆さんと学校交流をしてきました。津軽石中学校は、矢巾北中学校よりも全校生徒数が少ない学校でした。そのため、合唱交流では、一人一人が責任感をもって声を出し、透明感のある明るい声がとてもきれいで印象に残っています。

私は、今回の学校交流を通して、津軽石中学校の皆さんからたくさんのことを学び、改めて「魂をゆさぶる表現活動」の一つである合唱を津軽石中学校の皆さんとともに練習させていただき、人の心と心をつなぐことのできる合唱・音楽の力を改めて実感しました。津軽石中学校の皆さんと共に歌った合唱の体育館に響いた音と時間は、あの瞬間にあの仲間としかつくり出すことのできない大切な経験となりました。

今回の学校交流で学んだことをこれからの活動につなげていきたいと思います。

(1) 成果

ア 事前学習において目的を明確にし、生徒会と特設合唱部それぞれが役割意識をもって取り組むことが出来た。

イ 参加した生徒は、自分たちと津軽石中学校の文化や取組を比較し、地域との交流活動や学年を越えて協力することなど、今後力を入れるべき活動を考えることが出来た。

(2) 課題

ア 地域との交流や異学年との活動など、津軽石中学校から学んだことを学校全体で共有し、矢巾北中学校の様々な活動に具体的に活かしていきたい。

I 事業の概要（地域の実情含む）

宮野目中学校区は、国道4号線を中心に交通量が多く、また、歩道未整備の道路や、踏切もある。学区が広域であり、自転車通学者もあることから、安全面への配慮が必要である。通学は、自家用車での送迎が多く、自立や体力作りの側面から徒歩通学を奨励している。そのため、児童生徒の交通安全意識を高めることは重要である。

そこで、本校では、児童一人一人が通学路の危険に気付き、自ら危険性を判断し、予防する力を育てたいという趣旨から「日常の安全を守る」をテーマに、地域との連携を図りながら様々な活動に取り組むこととした。

II 取組の概要

I 集団徒歩通学

毎週木曜日、地区ごとに班を編制し、集団徒歩通学に取り組んだ。高学年が低学年に、通学路における危険な場所や道路の渡り方などを教える中で、全校の安全に登校する意識が高まった。

また、2学期からは、「登校班旗」を作成し、班長が旗を持って登校した。旗を持つことで、班長はリーダーとしての責任を自覚し、班員は、班としてのまとまりを意識するようになり、安全意識の向上に結びついた。



2 安全マップ作り

防犯アドバイザーの岩手県立大学宇佐美誠史准教授の指導のもと、3年生が安全マップ作りに取り組んだ。

(1) 安全教室

(9月17日)

宇佐美先生から、身近な危険について、「交通安全」「不審者」「危険な場所や建物」という3つの視点についてクイズ形式で指導していただいた。

児童の「交通安全」への意識は高く、クイズでは悩まず解答できた。しかし、「不審者」「危険な場所や建物」の視点のクイズでは、悩む場面もあったことから、日常生活の中で、不審者や危険な場所に対する危機意識はあまり高くないことが分かった。

また、安全な場所として「子ども110番の家」についても教えていただいた。名前は知っていても、実際に訪ねたことのある児童は一人もいなかったため、不審者に遭ったことを想定した演習では、「子ども110番の家」の役割を学ぶよい機会になった。

この安全教室を通して、危険な場所を予測したり、危険を回避したりすることに気付く意識を育てることができた。



その後の学習では、安全教室で付けた力を使って、校舎内に危険な場所がないかどうかを探し、見付けたところにクイズ形式のポスターを掲示し、全校に危険回避を呼びかけた。



(2) 安全マップ作成事前学習 (10月16日)

宇佐美先生から、安全マップの作り方やフィールドワークで危険な場所を探すポイントについて指導していただいた。

ア 交通から見て、安全ではない

イ 不審者がいるかもしれない

ウ 道路やその周囲、建物などの危険という3つのポイントを写真や絵を使って具体的に指導していただき、ポイントがよく分かった。

教えていただいたことをもとに、演習として、絵を見て実際に危険箇所を見付ける活動にも取り組み、3つのポイントに沿って危険な場所を見付けることができた。

また、フィールドワークの際は、ただみんなで行くのではなく、発見係、記録係、写真係、危険がないかチェックする係などを決め、係を交代しながら進んでいくとよいことや、写真は、全体の様子が分かるように撮ることが大切であることなども教えていただいた。

安全マップを見るのも作るのも初めての3年生だったが、今回の学習で、児童も教師も、安全マップ作りについてのイメージをもつことができた。



(3) フィールドワーク (10月20日)

通学路ごとに7グループに分かれ、危険箇所や子ども110番の家を探すフィールドワークを行った。



児童は、事前学習で学んだポイントをもとに、役割分担をしながら危険な場所を探していた。どこがどのように危険なのかを話し合いながらメモを取ったり、どのように写真を撮れば危険な場所が伝わるかを相談したりしながら、意欲的に活動を進めていた。

協力していただいた大人の方々には、主に児童の安全を見守ってもらったが、児童が気付かない危険箇所については、積極的に指導していただいた。児童が気付いた「通学路の見通しが悪い細い道」が、制限速度の表示がないため、時速60kmの走行が可能であることを教えてもらい、自分たちが考えた以上に危険な場所であることに驚くグループもあった。

普段何気なく通っている通学路でも、安全を意識しながら歩くと、危険な箇所や空き家などがあること、歩道であるのに子どもの顔の高さ

に木の枝が出ている場所があることなどに気付くことができた。

また、安全な場所である「子ども110番の家」を探したり、「交番」に行って通学路で危険な場所はないかをインタビューしたりするなど、安全に対する意識も高めることができた。子ども110番の家は、留守だったため、話を聞くことができず残念だった。

<協力者>

防犯アドバイザー、地域見守り隊、保護者

(4) 安全マップ作り (10月27日)

フィールドワークで見つけた危険な場所を拡大地図に書き写し、危険な理由をカードに書き込む作業を行った。

大きな地図とフィールドワークで使用した地図を照らし合わせたり、危険な場所の写真を選んだりする活動は、3年生にとっては大変な作業だったが、地図を詳しく見て、相談しながら取り組んだ。

今まで、グループごとに取り組んでいた活動だったが、今回、各グループの作った安全マップを合わせることで、地域の安全マップが完成し、児童は達成感を味わうこともできた。

どのグループのマップにも、危険な場所がたくさんあることに驚くとともに、身の周りの危険な場所に目を向けることの大切さに気付くことができた。



(5) 発表会 (11月13日)

授業参観日に、保護者に向けて安全マップを紹介する発表会を行った。



グループごとに、自分たちが調べた場所の危険なところやその理由について発表し、たくさんの保護者の方々に、聞いていただくことができた。通学路の安全について親子で考えるよい機会となった。

発表会の最後には、安全マップを作る中で児童が感じたこととして、「予想していたよりも危険な場所がたくさんあることが分かった。これからは、今まで以上に危険に目を向け、安全に生活していきたい。」「自分たちが注意することで危険を防ぐことができる場所もあるが、大人の力でなければ改善できないところもたくさんある。そういうところは、ぜひ、改善してほしい。」と保護者に呼びかけた。

危険予測、危険回避に対する児童の気付きが多く、身の周りの危険に対する意識の高まりを感じた発表会となった。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 集団徒歩通学のとき、「登校班旗」を活用したことで、リーダーの責任感、班としての連帯意識が高まり、より安全に登校しようという安全意識の高まりにつながった。
- (2) 安全マップ作りでは、5回の学習活動全てに、防犯アドバイザーの県立大学宇佐美先生に参加していただき、ご指導を受けることができた。活動の趣旨やポイントが明確になり、見通しをもって活動することができた。
- (3) 実際に自分たちで危険な場所や安全な場所を調べ、発信したことで、児童の危険や安全に対する意識が高まった。
- (4) 授業参観日に保護者に発信したことで、通学路の安全について親子で確認するよい機会になった。
- (5) マップで表す方法・手順を学んだことで、今後のいろいろな学習の活動やまとめに生かすことができる。

2 課題

- (1) 継続した取組とするために、年間指導計画の見直しを行う。
- (2) 作成したマップの有効活用の仕方を検討していく。
- (3) 地域、関係機関との連携を図りながら、継続的・発展的に防災教育に取り組んでいく。

【資料】

活動の感想

<校内探検>

- ・ 学校の中の危険な場所を探しました。私は、廊下の運動着袋のひもが危険だと思いました。どんな絵を描けば分かりやすいかを考えるのが大変でした。全校のみんなに見て欲しいです。

<フィールドワーク>

- ・ 危ないところがいっぱいありました。ぼくのコースは、まっすぐな道だけど、細かい所も探してみると、高い塀や用水路などが危険だと思いました。でも、危ない所だけではなく、子ども110番の家や交番など安全な所もあるということも分かりました。

<安全マップ作り>

- ・ 大きな地図にシールを貼ったり、表に写真を貼って、どんなところが危ないかを書いたりするのは難しかったけど、みんなで協力して作ることができて楽しかったです。

<発表会>

- ・ 緊張したけど、自分たちが調べた危険なところを、大きな声で家の人に発表することができてよかったです。(児童)
- ・ 子どもたちが、危険なところをたくさん見付けていて驚きました。(保護者)
- ・ 普段車で通っているからあまり気にしていませんでした。空き家があることも知りませんでした。交通安全だけでなく、不審者にも気を付けていかなければならないことが、親としても分かりました。(保護者)

<活動全体を通して>

- ・ 私は、普段危ないところなどを気にしていなかったけど、意識して周りを見ると、いっぱい危険があることが分かりました。下の学年の人に「ここは危ないよ。」と教えてあげたいです。
- ・ 校内探検やフィールドワークをして、自分もつと身の回りに気を付けようと思いました。自分たちで見つけた危険なところはしっかり気を付けたいし、これからも、危険なところを見付けて気を付けて生活していきたいです。

I 事業の概要（地域の実情含む）

宮野目中学校は、花巻市街中心より北に約4km、北上川西側の平野部に位置する。学区は東西に4.6km、南北に4.1kmの範囲で、学校周辺は水田地帯の純農村地域であったが、近年国道沿いに各種店舗等の進出が目立つとともに宅地化も進んでいる。

宮野目学区の中心を国道4号線が走り、西に東北本線と東北自動車道、東に空の玄関であるいわて花巻空港がある。現在、三陸道と東北自動車道とのジャンクションや花巻空港ICも完成し、また多くの工業団地があり交通の要所としての地域変貌が著しい。

そこで、交通安全や防災に対する基本的な知識や技能を身に付け、自ら判断して行動できる力を育てるとともに地域に貢献しようとする態度を育てるために、本事業に取り組むこととした。

II 取組の概要

I 地域と連携した活動について

(1) 少年交通安全委員の取組について

宮野目地区では花巻地区交通安全協会宮野目分会の活動として、宮野目小学校、宮野目中学校と連携して少年交通安全委員の活動を行っている。この活動は平成3年より継続して活動をしており30年目を迎える。中学校では主に生活向上委員会がこの活動に当たっている。

ア 少年交通安全委員任命式及び締め括り式

4月：任命式

少年交通安全委員として任命され、1年間地域の交通安全のために活動することを確認した。

2月：締め括り式

少年交通安全委員の1年間の取組の成果と課題を確認した。



イ 夏の交通事故防止県民運動・一服一休運動

(ア) 内容

宮野目地区交通安全協会、宮野目地区交通安全母の会と合同で、4号線の信号で停車している車に交通安全を呼びかけ、粗品を配る活動。





(イ) 活動の様子

交通量が多い4号線で活動することにより、安全意識が必要な道路であることを理解するとともに、交通安全協会と合同で行うことにより連帯意識を高めることができた。

ウ だるま目入れ式

4月： 1年間の交通安全を呼びかけ、事故のない1年にするように決意した。

2月： 1年間の交通安全の反省をし、事故のない1年であったかどうかの確認をし、来年度も引き続き安全に生活することを決意した。



(2) 「見守り隊」の活動

ア ねらい

小学校集団登校の安全確保と交流を図り、地域に貢献する意識を育てる。

イ 内容

小学校の集団登校が行われる木曜日に、中学生の中からボランティアを募り登校の様子を見守りながら交通安全の呼びかけを行う。

ウ 生徒の様子

地区に小学校1つ中学校1つであるため顔を知っている児童が多く、笑顔で挨拶をして交流を図ることができた。制服姿の中学生が頼もしく感じられ、地域の方々からも、好感をもたれている。



学校前交差点



小学校の校門前

2 交通安全や防災に関する基本的な知識や技能を身に付ける活動。

(1) 救急法講習会【11月12日】

ア ねらい

災害や事故があったときに身近なもので処置をする方法を学ぶ。

イ 内容

花巻消防署職員から、①三角巾の使用法、②止血法、③患者の運搬法の3つの講習を受ける。





ウ 生徒の様子

昨年度は生徒全員に心肺蘇生法の講習を行った。心肺蘇生法は小学校でも実施しており経験があるが、このような実習は初めての生徒が多かった。グループ分けを行い、全員が体験できるように配慮してもらったので、すべての生徒が三角巾の使用法、止血法、患者の運搬法を体験することができた。また、事故や災害があったときに、身近なもので処置する技能を身に付けることができた。

(2) 情報モラル研修会【11月25日】

ア ねらい

日常生活の中に潜む危険を認識し、防犯意識を高め、危険が迫ったときにどのように対応すればよいかを学ぶ。

イ 内容

花巻警察署生活安全課の方から指導を受けた。本来は、危険が迫ったときにどのように対応するか、また、不審者に対する対応などを行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染防止のために内容を情報モラル対応に変更した。

ウ 生徒の様子

情報モラルについては多くの生徒が直接体験することなので、最近実際に起こった事例を基に真剣に考えることができた。



(3) 職員による防犯研修会【12月25日】

刺股の使い方を学習し、利点と注意点を確認した。緊急連絡体制とともに、刺股を扱うのには力が必要で、場合によっては複数で対応しなければならないことを確認することができた。



(4) 交通安全教室【4月9日】

1年生を対象として、地区交通安全指導員及び宮野目交番の協力を得て、交通法規の学習や自転車の乗り方についての講習を行った。





2 課題

- (1) 宮野目地区交通安全協会で30年間活動していることを継続して協力していく。
- (2) 定期的に救急法講習会や防犯研修会を行い、指導されたことを忘れず、いざというときに実践できるようにする。
- (3) 新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかった活動を、状況を見ながら実施できるようにする。

(5) 防犯マップを小学生と確認する活動

当初は宮野目小学校の児童が作成した防災マップを共有し交流する予定であったが、新型コロナウイルス感染症蔓延のため中止せざるをえなかった。来年度以降機会があれば、交流を図っていききたい。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 宮野目地区中学校区は旧宮野目村からのコミュニティがしっかりしている。その現れとしての交通安全協会の活動がある。その一翼を中学生が担うことで地域愛や地域に対する感謝の心をもつことの大切さを確認することができた。
- (2) 見守り隊の活動では、ボランティアを募ることにより自主的な活動となり、地域に貢献する気持ちを育てることができた。
- (3) 救急法講習会や防犯講習会で、防災に関する基本的な知識や技能を身に付けることができた。

I 事業の概要（地域の実情含む）

金ケ崎町は、南は奥州市・水沢と胆沢、東は北上川を挟んで江刺、北西は北上市に接し、地勢は西部の奥羽山系の駒ヶ岳を有する山岳高地から東部の平坦地との間に1,300 m以上の標高差がある。昭和50年代、金ケ崎中部工業団地に企業が誘致され人口が増加し、現在まで安定的に推移している。

町内5つの小学校のうち一番在籍児童数が多い金ケ崎小学校は、町の東寄り、役場や駅の西側に位置し363名の児童が在籍している。

金ケ崎小では、復興教育において、郷土を愛し、いわての復興・発展を担い、支える人材となる児童の育成を目指している。また、震災津波の経験や体験からの学びを生かし、命の大切さを考えさせ、自分を大切にすることの意識の向上を図るなど、復興教育の充実をめざした取組を、連携している金ケ崎中学校を手本にして推進している。

II 取組の概要

1 小中をつなぐ連携事業

(1) 復興教育計画

「復興教育の視点から関連をもたせ指導をすること」、「全校での取組を推進すること」、「副読本を活用すること」、「『そなえる』活動を各学年で推進すること」の4つの柱を中心に行うこととした。

(2) 6年生での取組

修学旅行で陸前高田市を訪問し、被災地に思いを馳せることとした。新型コロナウイルス感染症予防のため、6月の予定を11月とし、規模を縮小しての実施とした。



(3) 事例 修学旅行

「いきる・かかわる・そなえる」をキーワードとして、岩手の復興を考える機会とした。「東日本震災津波伝承館」の見学と「震災学習列車（盛駅から釜石駅）」の乗車から子どもたちに考えてもらうこととした。



(4) 修学旅行で学んだこと

自分たちが住んでいる岩手で起こったことを改めて知る機会となった。また、地震について詳しく知る機会となった。感想などから「これくらいなら大丈夫と思わないことが大切」と視点が変わる感想が多くみられた。



(5) 中学校との連携

9月の中学校の学習（陸前高田市）、11月の本校の修学旅行を終えたのちに、交流会をもとうとしたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、やむを得ず中止とした。そのため、作成した資料の交流のみとなった。



(6) これから

12歳の子ども達は、震災当時の記憶はほとんど無い。記憶が無いからこそ、様々な想像を巡らせていた。相手に思いを寄せて、「そなえる」ことの大切さと難しさを考えていた。今後は、学んだことを自分がどう発信するかということにつなげて、地域や中学校と連携していくことが必要と感じた。

2 教科横断的な取組

(1) 道徳

6年生では、2学期に重点を置き、4つの内容項目の中で、復興教育につながる題材を学習した。被災地訪問を意識して道徳教育を生かすという視点をもって授業を行った。子どもたちは、修学旅行に行く前と後では、感想に命にかかわることを振り返ることが多くなった。

(2) 学校行事

避難訓練では、その都度命の大切さについて指導した。子どもたちに気付かせるように先生方が意識した言葉がけを継続したことで、6年生は今まで以上に真剣に取り組む姿が見られた。

3 学校運営上の見直し

(1) 危機管理マニュアルの見直し

コロナ対応に迫られた今年度だったこともあり、復興教育にも関連をもたせて危機管理マニュアルを見直す機会をもてた。学校教育計画のマニュアルを繰り返し見ること、もっとこうしようという意識を教職員から自然発生的に意見が出るようになった。

(2) いじめ防止基本方針の見直し

道徳教育を通じて、命の大切さや相手の立場に立って親切にすることなどについて再確認することができた。教育委員会からの指示もあり、いじめ防止基本方針の見直しも図るタイミングであったことから、校内で内容の確認を行った。

(3) 道徳教育の重点の見直し

命にかかわることを、児童とともに学ぶ中で新年度に向けて道徳教育の重点項目を見直ししようという声が職員から上がってきた。復興教育を通して、道徳教育の重点を見直し、子ども達にどのようなことを考えさせて、どんな子どもたちを育成するのかを考える機会となった。

(4) 避難訓練の意識向上

10月の避難訓練では、予告なしでの火災を想定した訓練を行った。修学旅行の取組を開始しており、防災について意識が高まっていたためか、今まで以上に真剣に取り組む姿が6年生に見られた。1月下旬に予定している避難訓練（地震・火災）については、「いきる・かかわる・そなえる」の観点で振り返りを行いたいと考えている。

III 取組の成果と課題

1 成果

- ・復興教育という枠組みを生かし、教科横断的に取り組む意識をもつことができた。
- ・学校運営上で行っていることを、復興教育の視点で見直しをすることができた。特に危機管理マニュアルを見直すよききっかけになった。
- ・修学旅行の取組を大きな視野で捉え、6年生の学習の柱とすることができ、また、学校全体でよりよい方向を探ることができた。
- ・被災地の見学等を通して、命の大切さや自分が今できることを考えることができた。
- ・まだ実施していないが、修学旅行以降、避難訓練は大切という声が聞こえてきている。予防が大切という意識改革を図ることができた。

2 課題

- ・復興教育という枠組みを活用し、教科横断的な視点をもって、学校としての取組を明確にすることで、よどみなく郷土を愛し、岩手の復興・発展を担い支える人材を育成できると考える。そのために、各学年の取組を年間計画に位置付け、系統性をもたせた指導を進めていきたい。
- ・今年度は、コロナ対応のために実施できなかったが、金ヶ崎中学校との連携を推進したい。中学校で行っている地域学習につなげられるように小学校での地元を知る活動を行いたい。



「いわての復興教育スクール〈内陸〉」（学校安全総合支援事業）成果報告書

学校名：金ケ崎町立金ケ崎中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

金ケ崎町は、南は奥州市・水沢と胆沢、東は北上川を挟んで江刺、北西は北上市に接し、地勢は西部の奥羽山系の駒ヶ岳を有する山岳高地から東部の平坦地との間に1,300 m以上の標高差がある。昭和50年代、金ケ崎中部工業団地に企業が誘致され人口が増加し、現在まで安定的に推移している。

一町一中学校である金ケ崎中学校は、町の東寄り、中部工業団地西側に位置し、5つの小学校から生徒が集まり、417名の生徒が在籍している。地域が広く、生徒の通学では5路線のスクールバスを活用している。

金ケ崎中では、郷土を愛し、その復興・発展を支えるひとつづくりを目指し、学校と地域が連携したキャリア教育の充実を図っている。また、震災津波の経験や体験からの学びを生かし、命の大切さや自分の価値を認識させ、自分を大切にする意識の向上を図るなど、復興教育の充実をめざした取組を推進している。

II 取組の概要

1 学校と地域が連携したキャリア教育の充実

(1) 第1学年 農業学習

町内で広く営まれている農作業について、講話による事前学習と地域農家等での作業体験学習を通して学ぶことにより、地域とのつながりを感じさせる機会としている。

ア 農業講話〔8月26日(水)〕

金ケ崎町教委教育長、千葉祐悦先生から金ケ崎町の農業や産業に関わる講話をいただき、地域の実態や金ケ崎町の未来について学ぶ機会となった。



イ 地域農家等での作業体験〔9月9日(水)〕

1学年141名が1班6人のグループ24班に分かれ、町内の8事業所の協力を得て、酪農、畑作、花の栽培、流通の仕



組みや販売等の学習を行った。

体験を通し、生徒たちは働くことの大変さと喜びを学ぶ機会となった。



(2) 第2学年 職業学習

自らの進路を主体的に切り拓いていく「生きる力」の育成を目指し、地域の企業や事業所、隣接する工業団地の企業と連携して、取組の充実を図る。

ア ワークショップ〔7月3日(金)〕

町内18の様々な事業所によるワークショップを開催し、働くことの意義等を学び、職業観の育成を図った。



イ 体験学習〔7月7日(火)、8日(水)〕

町内に工業団地がある特性を生かし、職場訪問による体験学習を実施した。今年度から北上川ものづくりNWの支援を得て、4企業で実施した。



(3) 第3学年 地域学習『まち歩き』〔7月7日(火)〕

自分たちが暮らしている地域を、目で見て（地域の現状を知る）、耳で聞き（地域の方との交流を通して歴史を知り、課題を考える）、そして、学習を通して自分の将来や進路について考えると共に、地域における役割を考えるきっかけをつくる。

ア 地域学習

出身小学校区の施設等を訪問する『まち歩き』を実施し、自分たちが暮らしている地域を、中3の視点で見直すことで、ふるさとの将来、自分の将来を考える機会となった。



イ 防災学習

地域の、過去の災害や避難所を知ることで、今後、主体的に防災活動に取り組もうとする意識の向上が図られた。



(4) 全学年 ボランティア体験学習〔7月下旬3日間〕

町内の福祉施設、診療所、保育施設などを訪問し、ボランティア活動を通して、職業体験や地域理解の充実を図る。※令和2年度は、コロナ対応のため中止

2 命の大切さや自分を大切にすることを意識の向上を図る取組

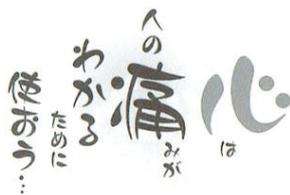
(1) 第2学年 復興教育講演会〔9月8日(火)〕

東日本大震災を体験した方から直接話を聴くことで、当時の状況や教訓を学ぶ機会とする。

今年度は、震災当時、釜石市立唐丹中学校の校長を務めていた藤館茂先生に貴重な体験をお話しいただいた。

藤館先生の講演から

「みんなが一つの家族になって～『誰かのために』と思えたら～



(2) 第2学年 被災地見学、奉仕活動〔9月10日(木)〕

陸前高田市を訪問し、当時の状況、被災の実態等を直接見聞きすることで復興の軌跡を知る。また、奉仕活動を通して、日常の有難さを感じ、今後、自らが復興の一助となる気持ちを育てる。

ア 被災地訪問

陸前高田市の旧気仙中や東日本大震災伝承館等の被災地見学を通して、生徒たちは改めて、想像を絶する震災の規模や当時の大変な状況を感じ取ることができた。



イ ボランティア活動



『滝の星仮設住宅』を訪問し、建物周辺の草取りに139名全員で取り組んだ。復興講演会や被災地見学を通して強く感じたことがあるようで、「自分たちも復興のための何かの力になりたい」という強い思いが表れた活動となった。

III 取組の成果と課題

1 成果

- 学校と地域が連携したキャリア教育を進めることで、郷土を愛し、その発展を支えようとする意識の向上を図ることができた。また、勤労観・職業観を養い、自らの進路を切り拓いていく「生きる力」の育成の一助となった。
- 震災津波の経験や体験からの講話や被災地の見学等を通して、命の大切さや自分の価値を認識させ、自分自身を大切にしようとする意識の向上を図ることができた。
- 自分の身は自分で守るという意識を高めるため消火器の使用や煙の体験などを取り入れた避難訓練の充実も図ることができた。



2 課題

- 今後も、各学年の取組を年間計画に位置付け、系統性をもたせた指導を進めていきたい。
- 今年度は、コロナ対応のために実施できなかったが、町内の小学校と連携を図ることで、継続的に地域の良さを考え、学ぶことができる子どもに育てたい。そして、自分のふるさとへの誇りと愛着がもてるよう取組の充実を図りたい。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校学区は川沿いの山間部に位置し、洪水浸水想定区域や土砂災害の危険地域が多くあり、自然災害から自らの生命や身体を守るための正しい判断や対処についての学習を推進する必要があると考えた。また本校は、浄法寺中学校と学区が全く同じであり、同じ学校安全の実践が必要なことから、中学校と連携し学校安全推進体制の構築を目指すこととした。

事業目標は以下の通りである。

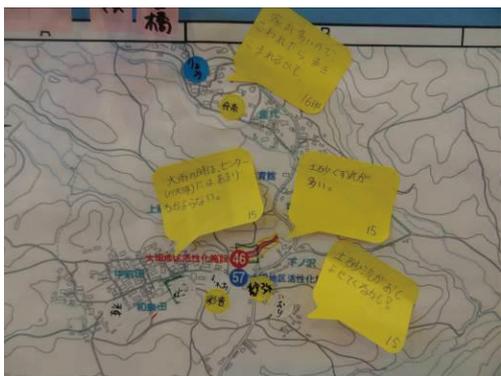
- 1 過去に起きた自然災害や地域の様子、学校で起こりうる危険を知り、その際に自他の身を守り生き抜くためのスキルを身につける。
- 2 地域や保護者、関係機関、中学校と連携しながら、地域の様子や危険箇所を知り、災害や安全な避難方法について理解を深め、防災・防犯意識を高めるとともに安全な行動をとるための判断力を高める。

II 取組の概要

1 防災学習①（防災マップ）【児童・教職員】

6月26日

昨年に引き続き、防災マップ上の自宅場所にシールを貼付し、自分の住む地域の様子や危険箇所を確認することができた。登校班ごとに活動したことで、同じ地区内の災害が起こりやすい地理的特徴や危険箇所について理解し「土砂崩れが起こりそうな道をバスが通っている」「自宅が洪水浸水想定区である。大雨の時は避難が必要かもしれない」など話し合うことができ、自宅滞在時または登下校時での安全意識及び防災意識を高めることができた。



2 防犯訓練【教職員】

7月22日

学校で起こりうる危険として、校内に不審者や暴漢が侵入してきた際の対処方法や児童を守るための避難誘導の仕方について、二戸警察署署員を講師とし、教職員15名が訓練を行った。

訓練後は、訓練の評価をさせていただきながら「教室での机椅子を利用した効果的なバリエーションの作り方」「早期に対応できるように不審者をより早く遠くのうちに発見すること」「不審者のいる場所、どちらに向かっているか等を全職員が共有できるような役割を決めておくこと」「不審者だと早く見分けられるような目を持つこと」など、不審者侵入を未然に防ぐための防犯対策や警察官が到着するまでに行う効果的な対処方法を学ぶことができた。



3 校内研修「土砂災害・洪水の危険」講話・演習【教職員】

7月27日

浄法寺地区防災マップを活用して分かった地域での起こりうる災害について、さらに指導する立場にある教職員の知識を高める必要があると考え、学校防災アドバイザーである岩手大学地域防災研究センター客員教授越野修三氏を講師に研修を行った。近年の豪雨災害やその要因として考えられる線状降水帯、バックウォーター現象について、また岩手県における土砂災害や洪水の危険、身を守るための日頃の備えについて学んだ。

アドバイザーからは、教職員自身が二戸市のハザードを知り、危機管理意識を高めること、「正常化の偏見」「経験の逆効果」等、避難行動の心理的メカニズムを知り、日頃の備え、情報の収集、正確な行動で災害に対応できる人材を育成すること、子どもの行動が地域の大人の意識を変えることで地域の防災力が上がる等指導助言をいただいた。児童や家庭の防災意識を高めるには、どのような訓練や学習が効果的であるか考える機会となった。また2学期以降の防災学習に関する授業構想をもつことができ、有意義な研修であった。



4 避難所運営訓練「HUG」研修【教職員】

8月4日

拠点校浄法寺中学校の事前研修に本校教員5名も参加し、地域防災サポーターの塚本清孝先生を講師に、学校施設を利用した避難所運営についての説明、基本的な避難所開設からの初期対応訓練、避難所運営ゲーム「HUG」の指導について、研修・演習を行った。「HUG」について小学校でも実践できるとお聞きし、どのように実践につなげられるか考えていきたいと感じた。

10月30日に行われた浄法寺中学校全校生徒による避難所運営訓練「HUG」演習には、小学校より1名参加し研修させていただいた。

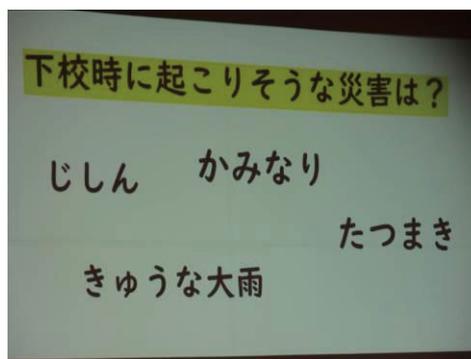
5 防災学習②(災害から身を守ろう)【児童・教職員】

9月1日

下校時に浄法寺地区で起こりそうな災害を想起し、突然の大雨や雷から命をまもる行動を全校児童で確認した。

前日が大雨であったことや当日全校での避難訓練の後だったこともあり、児童は真剣に学習に取り組んだ。児童からは「雷や大雨の時は建物の中が一番安全なことが分かった」「積乱雲が合図ということが分かった」との感想があった。

学習後は教室に戻り、学年ごとの発達段階に合わせた事後指導が担任より行われた。



6 防災学習③ (命を守る避難と「そなえ」)【児童】

11月18日

(1) ねらい

生き延びるための避難と家庭での備えについて理解し、防災知識と防災意識の向上を図る。

(2) 事前準備

- ①避難場所事前調査
- ②二戸市備蓄調査



③非常持ち出し品、備蓄品展示



(3) 活動内容

5・6年を対象に、二戸市防災安全課の災害時備蓄や避難場所・避難所について知り、災害時生き延びるための「我が家のそなえ」について考えた。事前の調査で避難所へ避難すると回答の多かった6年生は3日分、在宅避難の多い5年生は7日分の備えを考えることとした。

その際、生きるために必要な水や食べ物だけでなく、復興教育副読本「いきる・かかわる・そなえる」を活用し、ライフラインが止まった際に必要なものや避難所でのコロナ感染予防・寒さ対策に関わるものについても考え、それぞれの家族構成や家族の状況に合わせて「我が家の非常持ち出し品」チェックシートに記入した。個人での活動後、グループや全体で交流し、不足のものを書き足したり家族によつての備えの違いについて理解したりすることができた。



(4) 活動の様子

水や食べ物が必要であるとほとんどの児童が理解していたが、水は一人1日3L、3日分9L

(4人家族で2Lペットボトル×18本) 必要なこと、食べ物もできるだけ調理が簡単なもの・調理しなくてもいいものがよいこと、お年寄りや赤ちゃんに合わせた備え、衛生用品や防寒対策品など、思った以上に備えが必要であることに大変驚いていた。

また、コロナ感染対策のために避難場所や避難所の収容人数が地区人口に比べ不足していることを知り、自宅が安全であれば避難場所や避難所へ避難しない「在宅避難」もあり得るということ、備えについてだけでなく家族で話し合う必要がある、家族で準備したいという感想を持った。

必要なもの	どのくらいあるか (個数)
1 水	60リットル
2 米	1260リットル
3 ソファかん	10こ
4 そばかん	10こ
5 お茶	63L
6 マスフ	3リットル
7 ティッシュペーパー	6箱
8 乾電池	18個
9 乾菜	18袋
10 毛布	7枚
11 かいちゅうたん	3こ
12 かいちゅうたん	3こ
13 おかし	10こ
14 カップめん	10こ
15 ハンカチ	7枚
16 コップ	7こ
17 ランチョウ	10こ
18 かん	7こ
19 おせつこ	1こ
20 たいりょう	2こ

今日の防災学習を振り返りましょう。

今まで「用意してなかった物の必要なこと」がわかったので「万が一のために用意しておかなければいけないな」と思いました。非常持ち出し品と備えをする物はまた別だということも初めて学びました。もしも、災害が起きたときのために、家族全員で石巻に避難しようと思えました。

III 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 防災学習や研修等により、児童や教職員の防災に対する意識と知識が高まった。専門的知識を持ったアドバイザーや警察署の指導をいただきながら、浄法寺地区に起こりうる災害について知り、その災害の起こり方や避難のしかたを学び、避難の際の備えについて考えることができた。
- (2) 浄法寺中学校と地域・関係機関等と連携した防災・学校安全推進体制を構築することができた。
- (3) 復興教育副読本（改訂版）を活用することができた。初版とも合わせ今後も活用していく意識を持つことができた。

2 課題

- (1) 学校安全、防災についての学習を年間計画に位置づけ、今後も継続していく必要がある。
- (2) 小中連携による避難訓練や防災学習など、実践できるものから計画していく。
- (3) 校内での防災意識や避難についての知識は身につけることができたが、今年度は三密を回避するために、学校安全について地域や保護者と地域の様子の情報交換を行ったり児童と一緒に防災学習をしたりすることができず、地域全体の意識の向上につなげることができなかった。



(5) その他

非常持ち出し品や備蓄品をホールに展示することで、全校児童の興味関心をひくこととなった。そして「自分たちも『そなえ』についての学習がしたい」と4年生も防災学習を行い、知識を高めることができた。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校学区は川沿いの山間部に位置しているとともに、本校が土砂災害の危険地域に建設されているため、自然災害から自らの生命や身体を守るための正しい判断や対処について学習を推進する必要がある。

そこで事業目標は、過去に起きた自然災害や地域の様子、学校で起こりうる危険を知り、その際に自他の身を守り生き抜くための技能を身につけること、また地域や保護者、関係機関、小学校と連携しながら地域の様子や危険箇所を知り、災害や安全な避難方法について理解を深め、防災・防犯意識を高めるとともに安全な行動をとるための判断力を習得することとした。

拠点校としては、地域、家庭、同学区である浄法寺小学校と連携したモデル地域に取組の様子を情報提供し、取組の充実を図りながら、持続的な防災、学校安全推進体制の構築を目指した。

II 取組の概要

1 防災マップの活用（小中学校連携）7月～8月

浄法寺小学校の児童たちが防災マップ上で自宅を確認し、自宅場所にシール添付する活動を行った。その防災マップを中学校でお借りし、1学期末に地区集会を行った際、自宅場所を確認してシール添付を行った。

生徒達は、近所に住む児童生徒の自宅を改めて確認しながら、防災マップで自宅付近や地区内の災害が起こりやすい地理的特徴を知り、災害に遭いやすい危険箇所はどこかを同地区の生徒同士で話し合った。また、避難場所や避難方法についても確認した。中学校では、初めて防災マップを活用して地域ごとに災害を想定し、防災への意識を高めることができた。

その後、防災マップは全校生徒が目につきやすい校舎内玄関ホールに一定期間掲示し、マップを目にすることで、防災への意識喚起を図った。



2 防災講話「豪雨・土砂災害の対応」7月16日

浄法寺地区防災マップで地域の災害を想定したことにより、今回は土砂災害の対応と備えを学習する必要があると考え、学校防災アドバイザー派遣事業を活用して岩手大学の越野修三先生をお招きし、本校2学年生徒が講話を聞いた。

近年の豪雨災害の様子（線状降水帯により、バックウォーター現象や土石流で川がせき止められ、被害が拡大する）、豪雨・土砂災害での共通した問題点（災害リスク認識の甘さ、災害リスクが公表されていない地域でも被災する可能性がある、地域防災力の格差、高齢者の被災）という内容をお話し頂いた。

被害規模の大きさが分かる写真や気象レーダー等の豊富な資料を使って全国各地で発生している豪雨災害の説明を聞き、浄法寺地区でも、いつ同規模な災害が発生するか油断ならないという危険を知り、危機意識をもって災害に対応しなければならないと生徒は改めて実感した。

1時間の雨量や雨の降り方、強さの程度を知り、地理の特徴によって土砂災害の起こり方も様々であることを覚えておくことが、正しい判断をして避難できることを学んだ。

また、「正常化の偏見」をなくし、迅速な認知・適切な判断・正確な行動を行い、身を守る心の備えをしておくべきだということを確認し合った。講話を聞いた生徒たちからは、家族と災害時の避難を話し合い、早めの行動を心がけたいという感想が多かった。



3 土砂災害を想定「避難訓練」 10月1日

7月16日の講話で、「実践的な訓練なくして災害対応はできない。」という話を頂き、今年度2回目の避難訓練では豪雨による校舎裏山の土砂災害を想定し、地区内のJホールへ徒歩で避難する訓練を行った。

当初、連携校である浄法寺小学校と同日日程で訓練を行う予定であったが、豪雨想定では、避難経路中、小学生たちは川を渡ることから、同じ避難所には集合することは無理であると考え、本校独自で行うことに変更した。

訓練では一旦、校舎外の駐車場に集合し、学年ごとに整列して移動を行った。ホールに到着後、実践的な避難想定として、地区ごとに整列し直し、避難体制で保護者の迎えを待つ訓練を行った。

校長から、「訓練ではあるが、豪雨であることを念頭に置き、避難途中も道路が歩きづらいことや周囲に危険箇所がないか、気を付けながら移動するべきである。」とする等、実践的な避難を想定した訓練ができた。



4 大雨洪水ワークショップ 10月6日 学校防災派遣アドバイザーとして盛岡地方気

象台調査官の三上康治先生、気象情報官の齊藤伸次先生をお招きし、大雨災害時の避難をグループごとに話し合っで決めるワークショップに取り組んだ。

7月での豪雨災害の講話で、避難には「迅速な認知・適切な判断・正確な行動」という行動のパッケージ化が必要であることを学んだが、災害時には気象情報を受け、実際に避難までの行動をどう進めていくかという体験活動を行った。班ごとに様々なタイプの家族を担当し、避難までの行動を話し合った。障がいをもつ家族がいる、小さい子供がいるなど家族構成は様々で、自家用車の有無、住まいの違いに合わせて無事に家族を避難させるためにはどう避難すれば安全か、意見を出し合った。

また避難経路が決まった後に、次の気象情報として土砂災害が伝えられ、新たに避難経路を考え直す試練も加わった。活動後、使用したワークシートや地図等を模造紙に添付し、各班が考えた避難方法を発表し合い、学習内容を伝え合った。それぞれの家族構成等の条件に合わせ、何種類もの避難経路があるということ、生徒達は改めて感じていた。何がその条件によって最善の避難タイミングで方法なのか、考えることが必要であることを学んだワークショップだった。



5 文化祭での「防災学習」発表 10月24日

2学年がこれまで学習を進めてきた「防災学習」を文化祭で発表した。自然災害からふるさと浄法寺を守るため、災害についての知識を深め、危機意識を持ち防災にどう取り組むか、積み上げてきた学習をまとめ、スライドを活用して分かりやすく発表した。

当日は来校した地域や保護者の方々に、身近な災害である土砂災害の起こり方から避難の時期や方法等、防災について大切なことを伝えることができた。また全校生徒で防災学習を確認し、次回全校で

取り組む避難所運営訓練HUGに向けて学習準備を行った。



6 職員による避難所運営訓練「HUG」の研修 8月4日

本事業での学習体制で、最後の体験活動となる訓練を「HUG」と定め、全校生徒対象の活動とするため、事前に職員での研修を夏休み中に行うことにした。連携校の浄法寺小学校からは5名の参加があり、計12名で行った。

地域防災サポーターの塚本清孝先生にお越し頂き、学校施設を利用した避難所運営についての説明、基本的な避難所開設からの初期対応訓練、避難所運営ゲーム「HUG」の指導についてお話を頂いた。

アドバイザーの塚本先生から「何のためにHUGを使うのか」学習目標を明確にすること、進行上で生まれる生徒間のリーダーシップや役割分担を大切にすること、また参加者同士での振り返り、共有、反省をもつことということを指導助言された。

特に、活動はゲーム感覚にならず、「カードは人である」という意識で扱わせるように指導された。職員全体で活動の概要と目標を確認することができた。



7 全校生徒による避難所運営訓練「HUG」演習 10月30日

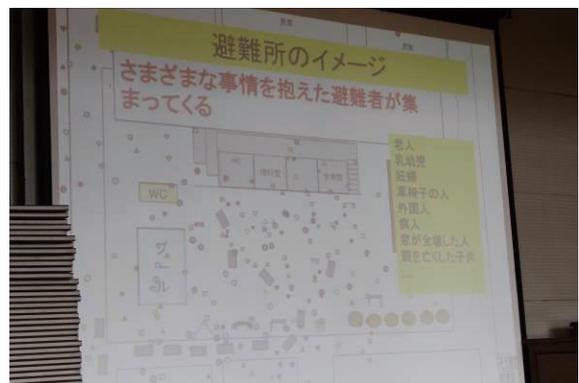
8月4日の職員研修後、全校生徒対象の訓練に

向け、アドバイザーの塚本清孝先生と何度も打ち合わせを重ねながら準備を進めた。全校生徒72名を1グループ6名、計12グループに分け、グループには必ず各学年の生徒が入る縦割り編成とした。全生徒が避難所運営側で活動できるように、またカードを一定のスピードで読み続けるために、カード読み上げ係は職員の担当とした。

HUGの概要や進め方の説明後、グループごとに活動が始まり、はじめは、カード（避難者）がスピーディーに読み上げられて来所することに戸惑っていた生徒たちであったが、徐々に避難者の配置を自分たちで決め、必死に対応していた。

この訓練のねらいは、避難所を運営する立場を経験することで、その苦労を知り理解すること、また次々と迫る課題にパニックになりながらも誠実に対応していくこと、リーダーシップや役割分担を自分たちで担っていくことである。教師はあくまで寄り添い、助言はせず、自分たちの力で考え、生徒の自主性に任せることに気を付けた。

その後、他のグループの配置や掲示物の様子を共有し合い、成功例や工夫点など他からも学び合う時間を取った。その後、グループで「避難所で出来る手伝い」をテーマに話し合い、全体に発表して共有した。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

今年度、学校教育で防災学習を重点的に取り組むことができ、これから生きる生徒たちや地域の方々に防災への意識が高まったと思う。また、次のような一連の流れに沿った過程で学習を進めることができた。

①浄法寺に発生しやすい土砂災害に目を向けて、アドバイザーの先生から豪雨や土砂災害の特徴等専門的な知識を得ることができた。

②「正常化の偏見」をなくし、認知・判断・行動を迅速に行うという防災対策を生徒たちに意識化させることができた。

③さらに実践的な避難訓練を行うことで、学習した災害を意識しながら、避難体験を実施することができた。

④気象情報から避難の時期や方法を考えるワークショップにより、より適切な判断を選択するために生徒一人一人が真剣に意見を出し合えた。

⑤HUGでは、避難所運営側の活動を体験することで、それぞれの立場や苦勞を理解することができた。異学年のグループ活動では、上級生がリーダーシップを発揮し、全員が協力し合って活動できた。「避難所で自分ができること」の意見交流では、実際に出来ることを考え、課題を想定し、その課題解決までを話し合うこともできた。

地域に起こりやすい土砂災害に注目し、その防災対策から実際に起こってしまった時の避難方法まで流れに沿って学習を進めたことで、学習内容がきちんと整理された形で生徒の知識となり、定着したと思われる。生徒の感想からも、防災へのより高い意識と、災害に対する心の準備が養われたことが見て取れた。たくさんのアドバイザーの先生方から 専門的な防災内容のご講話を頂き、「自分たちの命を守る」ために真剣に災害に向き合い、意見を出し合って考えることができた貴重な体験活動となった。

2 課題

「豪雨・土砂災害の対応」のお話をアドバイザーの先生方から聞き、生徒たちは「自分の家は大丈夫だろう」と思っていたことが実は偏見であり、その安易な考えを打ち払う意識改革が必要だと感じた。

また、中学生は、助けられる立場から子供や高

齢者を助ける立場であることをしっかりと認識し、行動に移していかなければならない。

災害など突然発生する異常事態に、「自分のできること」を考え、人のために動ける行動を身に付けるためには、日常的に「自分に何ができるか」を意識して生活していなければならないと思う。自分たちの住む地域の災害リスクを全校生徒が確認し、毎年災害に備える活動を継続することで意識を高めることが今後必要であると感じた。

I 事業の概要（地域の実情含む）

- 1 本校では総合的な学習（3学年）、総合的な探究（1・2学年）で「ふるさと軽米」というテーマで地元軽米町について理解を深め、展望を考えるなどの学習を進めている。この取組みは、次世代の軽米町を担う人材の育成を目指した地域連携型中高一貫教育の中に盛り込まれている。
- 2 軽米町では平成11年に総雨量230ミリの豪雨による雪谷川の氾濫によって町の中心部が水没や流出するなど壊滅的な被害を受けた経緯がある。そのような過去の災害（雪谷川の氾濫等）について振り返りながら調査し、その後の町の防災や安全対策について学んでいく。
- 3 軽米中学校と共同で地域の清掃活動を行いながら、地域との関わりを深め、避難所までの経路や学校周辺の危険箇所の確認を行い、地域防災の共通認識を図る。
- 4 東日本大震災津波被災地を訪問し、住民や自治体との交流とボランティア活動をとおり、防災意識を高める。
- 5 校内の避難経路の確認のほか、消火訓練、降下訓練を取り入れた防災訓練を行い、災害時の安全や避難所の運営方法について共通の認識を図る。

II 取組の概要

本校では「いわての復興教育」で掲げている3つの教育的価値のうち、特に地域に「かかわり」、地域が災害に見舞われたときには高校生がリーダーとなって町を支えようという防災リーダーの育成を図りながら、災害に「そなえる」という2つの柱をメインに、保健講話等による「命の尊さ」についての学習などとおして、自らの人生を正しい判断でよりよく「生きていく」ことを目標に学習を進めた。

1 「かかわる」について

(1) 1学年「町長講話」

軽米町山本町長から、軽米町のバイオマス発電や太陽光発電への取組など再生可能エネルギーの推進事業や新型コロナウイルス感染症対策の現状について学んだ。講話をとおりて軽米

町の課題に気づき、故郷への理解や現状、そして将来の展望について考えを深めた。

今回の講話をとおりて、受講した1年生からは、「軽米にはもっといい点があると思うので、そこを生かして商品制作をしてみたいと思った。」などの感想が出た。



(2) 2学年「軽米町インターンシップ」

7月下旬、2学年就職コースの生徒が地元軽米町の企業でインターンシップ・就業体験を実施した。軽米町内外の公共機関や事業所16カ所で接客や商品管理、事務仕事や施設管理などを体験し社会や地域の一員としての意識や自覚を高め、自己の将来設計・進路選択に役立てた。様々な仕事をとおりて、地元企業を知り、地元とのつながりを深め、進路意識を高めることができた。企業の担当者から軽米高校生に対して沢山の激励を頂戴し、交流を深めることもできた。【生徒23名参加】



(3) 「軽高生と語る会」

9月1日(火) 生徒会執行部などが軽米中学校を訪問し、中学校3学年に対して軽米高校の魅力や生徒会行事、部活動の様子、そして軽米高校を選んだ理由や中学校の今の時期にしておくべきことなどについて話をし、中学生と交流を深めた。先輩からの話に中学生たちは真剣に耳を傾けてくれた。【生徒3名】



(4) 1学年・2学年「中高一貫クリーン作戦」

9月16日(水)、軽米高校生徒会を中心に軽米中3年生と本校1・2学年による中高一貫クリーン作戦を実施した。12グループ、6方面に分かれて町内の清掃活動を実施した。中高の交流はもちろん、地域の方々からも激励の言葉を頂き、地域との交流を深めた。【生徒91名、職員10名、中学生67名】



(5) 1・2学年発表会(軽高祭)

10月16日(金)、総合的な探究の時間で「ふるさと軽米」をテーマに地元軽米町について学年ごとに探究した結果を発表と掲示により、全校生徒で共通理解を図った。特に2学年のグループでは防災をテーマにハザードマップについ

ての認知度アンケートを県内3校に実施し考察した。【生徒136名】



- (6) 軽米高校生徒会・軽米中学校生徒会・軽米高校PTA生活指導委員会「登校時一声運動」
軽米高校生徒会を中心にPTA、軽米中学校生徒会とともに朝登校時の挨拶運動を実施した。お互いに元気な挨拶を交わしながら交流を図った。【生徒10名、PTA6名、中学生10名】



2 「そなえる」について

(1) 1学年「被災地訪問学習」

7月31日(金)、1学年で東日本大震災津波の被災地である野田村を訪問した。見学を通して、震災からの復興状況や自然災害と共存してきた人々の減災、防災の取り組みについて学んだ。観光協会の方に、野田港、お台場、ほたてんぼうだいを案内して



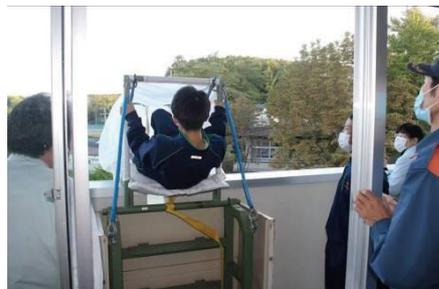
いただき、震災当時の被害の様子とその後の復興、暮らしの再建状況について説明いただいた。

【生徒47名】

(2) 全学年「防災避難訓練」

9月28日(月)、全校生徒、全職員参加の防災避難訓練を実施。火災を想定し、避難経路の確認、消火訓練、降下訓練を行った。災害により避難指示が出た場合、本校は避難場所に指定されているため、非常時に備えての動きも確認した。実際に行ってみて、コロナ禍で有事が発生した場合について考える機会となった。

【生徒136名、職員20名参加】



(3) 1学年「救命救急講習」

12月1日
(火)、二戸消防署軽米分署の方を講師に招き、AEDの使い方等につ



いて学習した。緊急時における応急対応や命の大切さを学ぶことができ、防災意識を育成させることができた。【生徒47名】

(4) 家庭科「避難所を想定した段ボールベッド等の実習」

家庭科の授業で、有事の際の避難所になることを想定した段ボールベッドの組立て実習を行った。実際に組



み立てて使用する経験はほとんどないことから、大変貴重な経験となった。また、市販の非

常袋セットの中身を確認したり、火を使わずに食べられるアルファ米の試食をとおして、災害時どのようなものが必要になるか普段から用意しておくものについて考えを深めた。【生徒47名】



(5) 学校安全計画、危機管理マニュアルの見直し及び策定

令和3年度に向けた見直し及び策定に取り組んだ。校内分掌等の調整を図りながら完成を目指していく。

Ⅲ 取組の成果と課題

〈成果〉

- ・本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止を最優先に考慮したため、実施計画とは大きく変更し規模を縮小して実践したが、見学や実践的な訓練を比較的多く実施することができ、生徒自身の防災への意識を高めることができた。また、職員間でも、避難の仕方や設備、新型コロナウイルス等感染症対応について考え、改めて確認することができ、貴重な取組となった。
- ・地域ぐるみの取組は、地元にも目を向ける機会になり、地元の長所や課題、危険な場所等について共有し理解することができた。また、企業や行政など、多くの方と接することができ、生徒の視野を広げることができた。
- ・東日本大震災津波を直接知らない生徒が現地に赴き、当時の様子や復興の過程を知ることで、人の痛みや人の役に立ちたいというボランティア精神と防災減災意識の醸成を図るとともに、地域を守る防災リーダーを目指す姿勢を育むことができた。

〈課題〉

- ・これまでとは異なり、コロナ禍における三密を避けた実践内容の工夫が必要である。
- ・異校種間連携の取組のため、日程調整が難しかった。また、学校それぞれの事情もあり、一体感を持って進めていくことがスムーズにできなかった。
- ・職員間の連携を密にしつつ、学校として、また地域として外部機関等の横の連携を図り、主体的かつ継続的に取り組むこと、また、担当者も他の関係機関とのつながりや関連性、目的を整理して実践していくことが必要であると考えた。
- ・地域連携型中高一貫教育の中で、6年間を見通した防災教育を推進していくことが必要である。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は奥州市江刺岩谷堂字根岸にある標高約90mの丘陵の頂上付近に立地している。付近の河川との標高差は30m以上あり、奥州市から地震、洪水、土砂災害発生時における第2次収容避難所及び指定緊急避難場所に指定されている。

この事業は、本校がこのような立地にあることを踏まえ、本県が東日本大震災津波から得た三つの教育的価値【いきる かかわる そなえる】の一つである「そなえる」を中心に、「いわての復興教育」の一環として実施するものである。

本校では、当初、奥州市江刺地域（旧江刺市）の小中学校と連携し、児童生徒の発達段階に応じて地域の地理を把握させるとともに、奥州市のハザードマップと照らし合わせる活動をとおして児童生徒がハザードマップに示された危険箇所を自分事として認識し、奥州市のハザードマップには明示されていない箇所についても災害を予見しようとする態度を養うことを目的とする事業を計画していた。

しかし、この1年、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点による学校の臨時休業や制限等、学校への保護者・地域からの提言等によって制約を受けながらの教育活動になった。本事業の計画に基づき可能な限り行うよう努めたが、計画していた事業内容を実施することはできなかった。また、小中学校との連携はもとより、本校文化祭・卒業研究発表会は一般公開をしないこととしたため、次に示す実施できた内容を保護者や地域住民に対して発表することもできなかった。

今年度は、「交通安全」「災害安全」を中心に次のことを実施した。

- ① 生徒会による交通安全マップの作成
- ② 生徒会による通学路や自分の住む地域の危険箇所の調査
- ③ 大雨洪水に係るワークショップ型授業
- ④ 避難訓練後の「いわての復興教育」に係る講話
- ⑤ 3年次生による卒業研究

なお、上記⑤については、これまでの学習を踏まえてテーマを設定して研究した生徒による卒業研究である。安全教育の一つの成果として加えて報告するものである。

するものである。

II 取組の概要

1 生徒会による交通安全マップの作成

生徒会執行部が、近隣の奥州市立江刺第一中学校と奥州市立岩谷堂小学校の児童生徒と一緒に交通安全に係る危険箇所を確認しながら登下校することを目的として、昨年度から着手していたものである。奥州市江刺地域には小学校12校、中学校が3校ある。今年度は作成する小中学校区を増やし、完成を目指して作成に取り組んだ。中学校2校を含む小学校7校区のマップが完成し文化祭で掲示した。

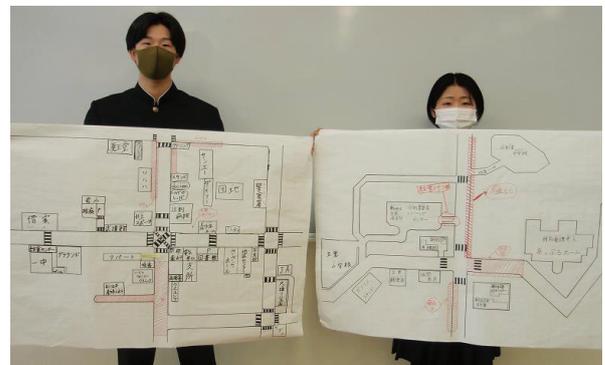


図1 江刺一中・岩谷堂小(左)と江刺東中と玉里小(右)

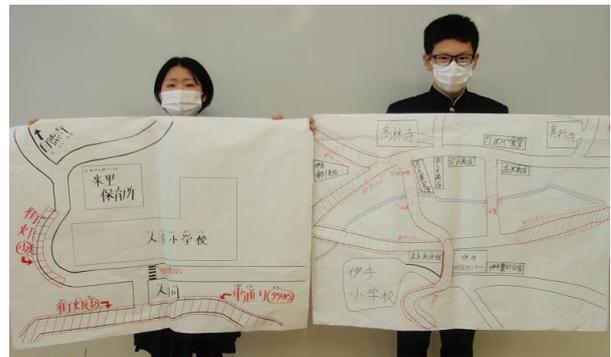


図2 人首小(左)と伊手小(右)

2 危険箇所の調査

生徒会執行部が、交通安全に係る危険箇所に加えて災害安全に関する危険箇所を奥州市のハザードマップをもとに調査した。しかし、ハザードマップに示されていること以外に広がりは見られず、ハザードマップの確認で終わってしまった。災害安全についての危険箇所は外部講師を招いて専門的知見から説明をしてもらい、生徒に知識を身に付けさせた上で行う必要があると感じた。

3 大雨洪水に係るワークショップ型授業

(1) 授業内容

1年次生を対象に、気象庁ワークショップ「経験したことがない大雨 その時どうする？」を活用した授業を行った。

4人を基本にしたグループで、異なる家族構成や住居の状況のもと、時系列で状況が変化し、状況に応じてどのように避難するかを考えさせた。生徒に主体的に考えさせるため、事前説明は行わず、垂直避難や家族の状況によって早めの避難が大切であることなどを授業のまとめで説明した。ワークショップを進める中で出てくる降水量の表し方などの必要な知識は、後日、数学科や理科の授業で取り上げてもらい、生徒の理解を深めることができたと考える。

併せて、奥州市のハザードマップを提示し、自分の住んでいる地区の危険箇所を確認させた。なお、奥州市以外から通学している生徒には、学校周辺や通学路の危険箇所を確認させた。ハザードマップは存在を知っているが詳しく見ていない生徒が多く、学校教育の中でも取り上げ、確認させる必要があると感じた。



図3 ワークショップ型授業

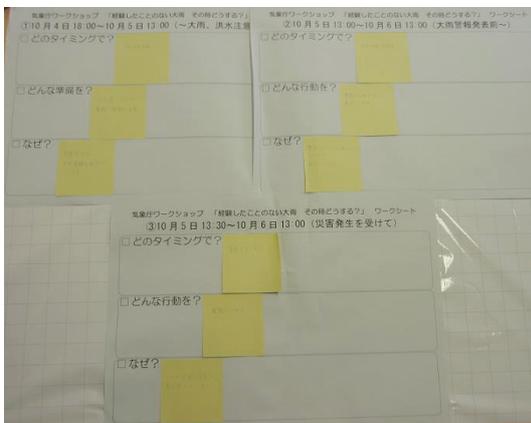


図4 ワークシートへの記入

(2) 習得状況の評価

「知識・理解」及び「思考・判断」の

2観点で見取ることとし、事前・事後調査によって評価した。

表1 ハザードマップを理解している者の割合
[知識・理解] (n=89)

	事業実施前	事業実施後
知っている	92.1%	100%
内容を見たことがある	59.6%	100%
家、学校付近、通学路の危険箇所を知っている	46.1%	100%

表2 ハザードマップで危険箇所になっていない場所でも災害が起こりうると想像できる者の割合
[思考・判断] (n=89)

	事業実施前	事業実施後
想像できる	75.3%	100%

表3 大雨時の避難で大切なことを知っている者の割合
[思考・判断] (n=89)

	事業実施前	事業実施後
大雨時の避難で大切なことを知っている	15.7%	61.8%

※ 事業実施後の調査は、実施6か月後の結果

4 「いわての復興教育」に係る講話

(1) 実施内容

本校では例年、避難訓練を年2回実施していたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、6月の避難訓練は中止にした。しかし、学校において避難訓練は重要な教育活動の一つであることから実施することとし、避難の大切さ、正常性バイアスについての理解を深めた。終了後には昨年度に引き続き、「いわての復興教育」に係る講話を行って三つの教育的価値【いきる かかわる そなえる】を育む一助とした。特に、「自助」「共助」について説明し、自分の命は自分で守ることの大切さ、「自助」があつての「共助」であること、「いきる」こと、命の大切さについて理解させることができた。

(2) 習得状況の評価

事前調査で「自助」「共助」という言葉について聞いたことがなかったり、理解していなかったりした生徒が多かったことから、今回は「知識・理解」で見取ることとし、評価した。

表4 「自助」「共助」について理解している者の割合
[知識・理解] (n=89)

	事業実施前	事業実施後
どちらも理解している	13.5%	71.9%

※ 事業実施後の調査は、実施2か月後の結果

5 3年次生による卒業研究

保健体育の授業やこれまでの安全教育を踏まえ、自身の卒業研究で「心肺蘇生法における胸骨圧迫のテンポ」と題した研究を行った生徒がいた。心拍数と音楽のテンポについて研究したもので、目の前で突然心停止となった人に出会った際に心臓マッサージができるかどうかを問い、救命率を高めるための一つの工夫を示したものである。本校では、毎年、1年次生を対象に救命救急講習を実施しているが、全校生徒に対して改めて普及・啓発、そして警鐘を鳴らす研究であったと考える。また、奥州市立江刺第一中学校で行った出前授業で中学校3年生に対して披露し、好評を得た。中学生に対しても同様の効果があったと感じている



図5 卒業研究発表会



図6 江刺第一中学校での出前授業

III 取組の成果と課題

1 取組の成果

大雨洪水に係るワークショップ型授業で、ハザードマップを理解している者の割合、ハザードマップで危険箇所になっていない場所でも災害が起こりうると想像できる者の割合、大雨時の避難で大切なことを知っている者の割合を100%とすることを成果の指標とした。

「いわての復興教育」に係る講話では、「自助」「共助」について理解している者の割合、三つの教育的価値について知っている、聞いたことがある者の割合を成果指標とした。

(1) ハザードマップを理解している者の割合

授業でハザードマップを示し、その後、各自で確認するよう促したことから、ハザードマップを知っている、内容を見たことがある、危険

箇所を知っている者の割合は、表1に示すとおり、実施後に100%とすることができた。

(2) ハザードマップで危険箇所になっていない場所でも災害が起こりうると想像できる者の割合

東日本大震災津波でも想定外のことが起こったことを踏まえ、ハザードマップはあくまでも想定されることを示しており、実際にはハザードマップ通りではないことを説明した。表2に示すとおり、実施後に100%とすることができた。

(3) 大雨時の避難で大切なことを知っている者の割合

調査は定着度を確かめるため、授業実施の6か月後に行った。表3に示すとおり、理解したという回答は60%に増加した。しかし、グループワークのためか、自分事として捉えなかった生徒がいることから対策が必要である。

(4) 「自助」「共助」について理解している者の割合

調査は定着度を確かめるため、実施の2か月後に行った。結果は表4のとおりだが、どちらも理解していない生徒は19.1%であったことから、概ね定着したものとする。

(5) 三つの教育的価値を知っている者の割合

講話時に聞いた際、知っている、聞いたことがあるという生徒はいなかった。講話実施の2か月後に調査したところ、89人全員が「知っている」「聞いたことがある」と回答した。

コロナ禍で学校の教育活動が計画通りに進まない中、できることを中心に取り組んできた。特に生徒会執行部には昨年度から交通安全マップの作成を依頼していたが、教員から指示を受けることなく主体的に活動してマップを増やしたことは本校にとって大きな成果であるとする。

2 課題

学校安全に係る取組は学校の教育活動において重要な領域である。状況判断が大切で、定着度を高めるためには繰り返し考えさせていくことが大切であるが、実施時間の確保が難しい。また、モデル地域内の小中学校との連携について、それぞれの校種の行事予定が異なり、調整を図ることも困難である。

これらを改善するためには、まず小中高の学校安全に係る連携会議を開き、各校種で習得させることを共有して発達段階に応じた取組を行うなど、校種間のカリキュラム・マネジメントが必要であるとする。本校では欲張らずに一つずつ取り組み、生徒に考えさせながら定着を図っていく。

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校が設置されている奥州市前沢地域は、中央部を北上川が流れ、東西を奥羽山脈と北上高地に挟まれている。本校周辺を俯瞰すると、本校敷地の東側には段丘が位置し、北側には北上川に注ぐ支流が流れている。そのため、地震や火災（地震によるものも含む）のみならず、豪雨等による河川氾濫や崖崩れ等が懸念される。

本校は、知的障がいを始めとする特別な支援が必要な児童生徒が在籍する特別支援学校である。年間5回、児童生徒の実態に合わせた避難訓練を実施しているが、近年頻発している洪水や河川氾濫への対応、総合的に防災を学ぶ機会については十分に行えていない状態である。

今年度、文部科学省委託事業「学校安全総合支援事業」の「いわての復興教育スクール〈内陸〉」の指定を受け、連携校（奥州市立前沢小学校、同前沢中学校、岩手県立前沢高等学校）に協力いただき、年間を通じて事業に取り組んだ。主に、高等部生徒を中心とした防災学習と全校での避難訓練、及び修学旅行（中学部3学年）での取組を中心とした。



地域の防災士会に協力いただき、総合的に防災を学ぶ機会を設定した。全3回それぞれで「水害」「火災」「地震」のテーマを設定し、テーマに沿った災害の仕組み理解や具体的な避難方法、実技を中心とした体験型学習を行った。

【防災学習の様子】



〔学習風景①〕

〔学習風景②〕



【火災時は、低い姿勢で避難する】



【毛布を使った搬送練習】

II 取組の概要

本校の児童生徒については実態が多岐に渡るため、本事業を実施する学習集団を「高等部の進路学習（※学校設定教科）から選抜したグループ（1～3年生33名）」及び「中学部3年生（12名）」とした。

1 高等部生徒（進路学習選抜グループ）による防災学習

(1) 奥州市防災士会【絆の会】による防災学習
〈全3回: 7・11・12月〉

【目的】防災について総合的に学ぶ
【講師】千葉 稔 氏（奥州市防災士会「絆の会」会長）



【ラップと雑誌で患部固定】

【生徒の感想】

- ・姿勢を低くして避難することが大事だと思った。
- ・「たすけられるがわからたすけるがわへ」ということばがぐっときました。
- ・自分でも出来ることがあるんだなと思いました。
- ・自分の命は自分で守ること。
- ・NHKのデータ放送での天気予報を、これからも見ていきたい。等

(2) 震災に係る施設見学【9月7日】

【見学場所】

東日本大震災津波伝承館（岩手県陸前高田市）

【内容】

- ・館内展示やガイダンスシアター等の見学（解説員による解説）
- ・奇跡の一本松見学

参加生徒は、震災発生時には小学校低学年であり、断片的な地震の体験記憶やニュース映像等での記憶がほとんどであった。

津波に押し流されて形が変わってしまった消防車や、繰り返し押し寄せる津波の映像、その中での人々の取組の様子等、生徒全員が真剣な表情で参加し、事

実を知ることができた。自分の立場に置き換えたり、教訓を新しい知見として感想に記述できたりした生徒もいた。



【生徒の感想】

- ・決して自分だけが大丈夫と思わないことが大事だと知りました。
- ・つながりがきたら、たかだいににげるのをまなびました。
- ・「つながんでんこ」ということを学びました。
- ・じっさいにきたら、ふるえているじぶんをそうぞうしました。等

(3) 校舎周辺のハザードマップ読み取りと、避難路の確認【11月】

【実施学年】

2学年（進路学習選抜グループ）

【内容】

ハザードマップを用いた、学校周辺地域の危険箇所確認及び避難所確認

ハザードマップを基に、学校周辺の危険箇所について実際に場所や方向を確認した。大規模河川（北上川）の方向や校舎東側の段丘を確認したことで、洪水が来る方向や崖崩れが予測される危険な場所等について、目視し指さすことができた。

(4) 防災学習の成果発表

今回の防災学習については、参加グループを6班に分けて学習を進めた。年間を通じて行った防災学習のまとめとして、グループごとにポスターにまとめ、校舎内に掲示した。



2 地域合同避難訓練での取り組み【9月16日】

年間5回実施されている本校避難訓練のうち第4回目の訓練である。本校が設置されている行政区及び行政区長、近隣の福祉型障害児入所施設、障がい者施設に呼びかけて行った。

全校児童生徒及び職員を含む280名が参加した。



(1) 避難訓練

年間5回実施されている本校避難訓練のうち第4回目の訓練である。本校が設置されている行政区及び行政区長、近隣の福祉型障害児入所施設、障がい者施設に呼びかけて行った。

全校児童生徒及び職員を含む280名が参加した。

(2) AED使用体験

高等部進路学習選抜グループ対象に実施。実物や学習プリント、スライドを使用しながら、「AEDとは」「電気ショックまでの時間と生存率」等を学習した。その後、グループに分かれ「電話での連絡方法」「AEDの使用」を体験的に学習した。



(3) 防災学習及び避難用スロープ体験

小中学部児童生徒対象に実施した。

(4) シェイクアウト訓練

高等部生徒を対象に実施した。

(5) 防災食喫食

昼食時には、防災食として「調理不要食：カレーライス」を喫食した。全校児童生徒が喫食した。



【喫食品】

- ・ザ・カレーライス（株）非常食研究所

【特徴】

- ・食物アレルギー特定原材料 27 品目不使用
- ・水、熱、調理不要
- ・同梱されてある白米をスプーンで混ぜることで、介護食（刻み食・流動食）離乳食が作成可能

(6) 地域の方や近隣組織との情報共有

事後に、参加施設の代表や行政区長を交え、「地域の課題」を共有した。

【生徒及び教員の感想】

- ・おちついて机にふせて（入って）、あわてずひなってきた〔避難訓練〕。
- ・人生で初めて使った。学校だけでなく、いろいろな場所にあるってことを知った〔AED 体験〕。
- ・じしんがなくてもつかわなきゃいけないということが大事だと思いました〔AED 体験〕。
- ・特別食を食べている生徒が学級にいたので、形状が心配だったが、問題なく食べることができました。普通食の子も安心して食べることができた保存食はありがたいと思いました。

〔非常食について教員の感想〕等

3 修学旅行（中学部3年）での取り組み

(1) 目的

三陸沿岸の修学旅行を通して、「いきる・かわる・そなえる」を学ぶ。

(2) 見学先・体験先

- ・三陸鉄道の乗車 ・かもめテラス（大船渡市）
- ・漁業体験（山田町）等

(3) 学習の様子

ア 事前学習

初めに、自分が住んでいる岩手県について地図を使い学習した。次に修学旅行で行く三



陸沿岸地域が東日本大震災による津波の被害にあったことを、当時の岩手の新聞を使って学習した。

今回の事前学習によって事実の理解を行うことができた。

そして、現在の復興の様子について学習を進めた。最後に修学旅行に向けて、自分たちができることは何かを考えた。「今、自分たちにできること」を以下にまとめた。

【今、自分たちにできること】

- 1 宿泊・見学場所の避難経路、避難場所の確認。
- 2 これからの避難訓練への取り組み方（意識を変えること）。
- 3 命を守る行動を心がける（考える）。

イ 見学・体験先での様子等



【三陸駅で黙祷する】



【かもめテラスで説明文を読む】



【宿泊場所で避難経路を確認する】

ウ 事後学習

修学旅行での取り組みの振り返りに合わせて、これからの避難訓練への取り組み方を全員で確認した。生徒からは「動かない」「低い体勢をとる」「頭を守る」という発言があり、すぐに命を守る行動をとる大切さを学年全体で確認することができた。

4 職員研修会での取り組み（連携校との取り組み）

【講演テーマ】危機への対応

【講師】越野 修三氏（岩手大学地域防災研究センター客員教授）

研修には地域の連携校である前沢小中学校、高等学校の防災担当者を招き、奥州前沢地区のハザードマップの読み取り方や想定される災害リスク、豪雨・洪水を主とした対応の基本的な考え方を学んだ。研修終了後は、本校及び連携校担当者で「想定される地域の災害リスク」について情報共有した。講師からは「情報収集（事前に情報を集める）」「危機予測」を基本とした「状況判断（適切に判断する）」の重要性について助言いただいた。



（事前に情報を集める）」「危機予測」を基本とした「状況判断（適切に判断する）」の重要性について助言いただいた。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 防災学習での取り組みについて

特別な支援が必要な生徒の防災スキルについては、従来「訓練の中で繰り返し身に付ける」内容が主流であった。その中で「助けられる」「守られる」側面が比較的強かったように考える。今回、「水害」「火災」「地震」等の体験的な学習を通して、生徒の事後アンケートからも積極的な感想や意見が出ている。「自分の命は自分で守る」ために「いきる」「かかわる」「そなえる」力が育ち、「進んで行動する側」へ、生徒の意識と行動が変容していくことを願いたい。

(2) 地域連携について

今年度、職員研修会を通じた取組では、連携校担当者に参加いただき地域全体で想定される災害リスクや避難場所、具体的に注意が必要な地点等について確認・共有できた。これまでそれぞれの学校で抱えていた課題や想定していた避難経路等が確認・共有でき、講師から地域防災への示唆をいただいたことは大きな成果であった。

(3) 中学部での実践について

今年度中学部は、本県沿岸部を主体とし復興教育に主眼を置いた修学旅行を実施した。生活・社会経験が多いとは言えない本校の生徒たちにとって、実際に「見ること」「手がけること・体験すること」の意義は大きい。「東日本大震災」や「現在の沿岸の様子」について、体験を通して学び、さらには「今、自分たちができること」についても考えることができた。

本学習を経て、「生活している地域（郷土）を知る」視点や一人ひとりの防災意識が、体験を通して深まり広がった。

2 課題

- (1) 特別な支援が必要な児童生徒は、「学んだことの定着の難しさ」や「一般化の困難さ」に課題がある場合が多い。本事業での学びが、家庭場面で、または実際の災害場面で具体的に発揮できるように、どのような取り組みが必要かが課題となる。
- (2) 本校は小中高一貫校であることから、防災についての学習が継続的に積み重なっているかの検証も重要である。学校安全計画の見直しの際は、上記の視点も盛り込む必要がある。
- (3) 事業の内容や成果を次年度の教育課程に盛り込んでいくために、内容の精査や検討が必要である。継続的、持続的な内容としていくために、どのように取舍選択するか、またどのように発展的な内容を設定していくかが課題となる。

【参考資料】

各防災学習や避難訓練等の実施後に、参加した部進路学習選抜グループ生徒全員（33名）へ学習の評価と自由記述を含むアンケートを実施した。

評価の観点については以下のとおりである。

【防災学習事後アンケートに係る4尺度】

- A（肯定：うまくできた。よかった等）
 - B（やや肯定：まあまあうまくできた。まあまあよかった等）
 - C（やや否定：あまりできなかった。あまりよくなかった等）
 - D（否定：できなかった。よくなかった等）
- ※4項目に設定した理由：「どちらでもない」といったあいまいな評価をなくすため。

【防災学習】

項目/尺度	A	B	C	D	欠席等
水害	25	2	2	0	4/33名
火災	23	4	1	0	5/33名
地震	22	2	1	0	8/33名
本学習を通して	23	2	0	0	8/33名

【地域合同避難訓練】

項目/尺度	A	B	C	D	欠席等
避難訓練	20	11	1	0	1/33名
AED体験	16	13	3	0	1/33名
非常食体験	14	12	2	4	1/33名

「いわての復興教育」 実践事例集

2021年（令和3年）3月

発行：岩手県教育委員会事務局

所在地：〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1

電話番号：019-651-3111

印刷：川口印刷工業株式会社



「いわての復興教育」
実践事例集